

抗日パルチザン

参加者たちの回想記

特選集

「抗日パルチザン参加者たちの回想記」 目録

訳者の手元にある原本（一〜十二巻）の奥付けによると、発行所は朝鮮労働党出版社で、第一巻の初版発行は一九五九年五月三十日、第十二巻の発行は一九六九年十一月十五日となっている。

十二巻で計二百六十四話あり、執筆者は計九十七人で、そのうち女性が十七人である。

二百六十四話のうち二十三話は「朝鮮人民の自由と解放」（一九七二年、未来社刊）に載っている。同書は、別に編纂された回想記「人民の自由と解放のために」（中身は「抗日パルチザン参加者たちの回想記」とかなり重なっている）から翻訳委員会が三十編を選んで翻訳発行したものである。

訳者の翻訳ノートを見ると、一九七七年一月四日から翻訳を開始し、二〇〇六年九月までに二百四十二話を翻訳している。途中十回ほど中断している。

訳者の主観で以下のように分類してみた。

「銃を取るまで」「革命の同志を回想して」「不屈の女闘士たち」「革命のつぼみたち」「必勝の信念」「革命的信義で結ばれた同志たち」「敵の凶計を粉碎し」「革命の規律」「不敗の隊伍」「抗日統一戦線のために」「敵を瓦解させて」「人民の海の中で」「キム・イルソン同志に従って」

「銃を取るまで」（十話）

今日の幸福を感じるほど過去を忘れてはならない

銃を取るまで

闘争の第一歩

初試練

道は一つだ

無産者が生きる道はただひとつ——革命の道のほかにない

燃える復讐の一念で

遊撃隊に入隊するまで　私はこのように遊撃隊員になった　我々はこのように武器を取った

「革命の同志を回想して」(二十五話)

オ・ウンリョン同志を回想して　オ・ヂュンプフ同志を回想して　革命の司令部を命をかけて守り

革命の闘志で、師長同志の意志と信念で彼は闘った　彼は一当百の革命戦士だった

彼はいつも司令官同志の命令の執行に忠実だった　彼は確固とした共産主義者だった

彼は司令官同志の命令をどんな逆境の中でも確実に執行した　彼は常に戦闘ですばやく大胆だった

共産党員ウイトナム　共青員ヘカンチャウイ<　この背のうを同志たちに

死んでもいっしょに死に、生きてもいっしょに生きよう　ただキム・イルソン同志の教えの通りに

チョンボ山の勇士　パルチザンの英雄キム・ゼントナム　ファン・ジョンへ同志を回想して

不屈の闘士　不屈の闘争精神で　もつとも高貴な政治的生命的生命のために　労働者階級の息子

忘れられないカン・ナムソン同志　忘れられないチャントナム

司令官同志の命令ならばどんな難関と試験にも打ち勝ち最後まで貫徹することに努めた

ただ司令官同志の革命思想と意志の通りに

「不屈の女闘士たち」(二十四話)

明けてくる明日のために　アン・スンファトナムの最後　革命の勝利が見える　革命の初試験

彼女は今日も私たちと共にいる　共青員リ・スニトナム　苦難の四十日　裁縫隊員たち

〈刺刀〉に関する話　人民と軍隊の生命財産を命をかけて守りましょう　隊伍を待ちながら

タラロミの密営で　　タバンチョンの密営で　　中隊の姉　　チオルグオモニ
同志の意志を受け継いで　　トンファの樹林の中で　　初試練　　パルチザンの女將軍
不屈の女闘士ハン・ヂユエ同志　　未来の幸福のために　　遊撃隊の娘
リ・シングム同志についての回想　　私たちは屈しなかった

「革命のつぼみたち」(十二話)

赤い花　　ウアン少年を児童団に引き入れるまで　　革命のつぼみたち
革命の暴風雨の中で育ち勇敢に闘った児童団員たち　　三人の児童についての話　　少年遊撃隊員たち
真の児童団員　　真の児童団員グムスン　　真の児童団員チョン・ギオク少年
チョン・ウアンチュルトムの最後　　リ・ファストンの最後　　ポンナミとともに

「必勝の信念」(八話)

生きて最後まで闘わなければならない　　いつ、どこでも闘争をやめることはできない
偉大な思想に鼓舞されて　　死線を突破して　　死に打ち勝った力
トゥマン(豆満)　　江の氷塊をかき分けて　　難関を突破して　　任務を遂行するまで

「革命的信義で結ばれた同志たち」(四話)

熱い心臓　　熱い同志の愛情で永遠に生きよう！　　艱苦の日々に　　同志たちの熱い愛情

「敵の凶計を粉碎し」(四話)

いつ、どこでも革命的警戒心を高めなければならない
敵は奸悪だ 革命の司令部を保衛するために
敵の凶計を打ち碎き

「革命の規律」(二話)

規律は困難な時ほどいつそうしっかりと守らなければならない
背のうの中の餅 一巻きの毛糸

「不敗の隊伍」(五十九話)

インターナショナルの歌声を聞くたびに ウボクトンの炎 革命先烈に捧げる誓い 革命の道
革命の勝利を確信するとき 革命の要求ならばできないことはない

革命家は常に革命の哨所をえり好みしてはならない 革命的出版物三・一月刊

必ず私の祖国を解放する カンサムボン戦闘を回想して キム・イルソン同志の教えを掲げて
偽満軍に変装して 敵しい警戒網を突破して 共同の敵に反対して 共産党員の榮譽を担うまで

苦難の行軍 古参隊員たちの世話の中で

抗日遊撃隊の指揮員たちはいつも先頭で模範を示す革命的気風を發揮した

最後まで闘わなければならない 心臓が鼓動する限り 心臓のラッパの音 人民のためならば

銃についての回想 司令官同志の偉大な革命思想に鼓舞されて

司令官同志の戦略的方針を高く掲げて 司令官同志が与えた革命の任務を遂行して

すべての人民が武装すればどんな敵も退けることができる すべてを革命偉業に捧げて

憎悪の反撃 祖国解放のための聖戦に参加して 祖国へ進軍する道で 祖国進軍の道で迎えた正月

隊伍を訪ねて チルソンハ戦闘 敵に息つく機会を与えてはならない 敵の弱点を看破して

同志たち、この銃を受け取ってくれ 入隊後の初戦闘総括 初行軍の日に

一つの生命のために千里 一つに団結した力 不敗の隊伍

プロレタリア国際主義の旗を高く掲げて 不意の状況の中で プスゲンでの激闘 武装のために

ホラン河のほとりであったこと ポチヨンボ戦闘 密林の中の祝日

命令は無条件最後まで貫徹しなければならない 名射手の話 モクタン江を越えて

遊撃隊の軍医 ヨンギル爆弾 ヨンヂプ江での凱歌 リムガン県エチャグ戦闘

ロルリ河ほとりの勝利 私の分まで敵を討ってくれ

我々は自身を革命化することによってのみ最後まで革命をすることができるのです

「抗日統一戦線のために」(六話)

ある山林部隊の中で 革命の一つの道で 救国軍部隊に入って 抗日の旗の下に

光明の道を求めて 山林部隊の中で

「敵を瓦解させて」(四話)

オン署長が選んだ道 カガヨンでの工作 偽満軍を説得して 敵を瓦解させて

「人民の海の中で」(四十二話)

ウァンウグの人民　革命の種をまきながら　きゅうり畑のおじいさん
軍民一致の革命的気風を堅持して　高貴な恩情　行軍途上であつたこと
広範な大衆を革命の側にしっかりと結束させるために　山田小屋の老人
死に打ち勝つたチヨチャンヂユ(車廠子)　銃剣の林をかき分けて国内へ　人民の忠僕
人民の熱い愛情の中で　人民の生命財産を保護して　人民のものならば
人民の利益のための気持ちで　人民は遊撃隊を血でもって助けた　ソクセ谷の老人
祖国光復のかがり火　大衆を説得教育して　断つことのできない血肉の情　団結の力
チ・ボンパール老人の最後　チャン老人についての話　チャンベク県の人々
チヨルラ道から来た農民たち　敵はヤマイヌだ　敵を追い出してきつと帰ってきます
トウゴウヂユの人民　トルチについての話　ネドウサンで　ムチホで
パルトグ鉱山の労働者の中での政治活動　木材労働者たち　モクタンガンの人々の中で
労働者たちの中で　遊撃隊はどこでも人民を離れては生きることができなかった　老獵師たち
ロヤ嶺の一軒家の老人たち　忘れられない人たち　忘れられないキム老人一家
ヨンギル監獄での工作　忘れられない老人についての回想

「キム・イルソン同志にしたがつて」(四十一話)

ある木材所で　一隊員の健康を心配されて　親の愛　オルギ江で　オンランは再び目を開けた
革命の旗を最後まで固守して　革命的活動方法の偉大な模範を創造されて

キム・イルソン同志が革命の陣頭に立つておられるために　　キム・イルソン同志の偉大な感化力
キム・イルソン同志は我々をこのように信じてくださった

キム・イルソン同志は我々を党の息子としてこのように育ててくださった　　クアンヂ付近であった話
後方活動はすなわち政治活動である　　困難な時ほど大胆に前へ進撃しなければならぬ

司令官同志は我々を革命戦士に育ててくださった　　司令官同志の肉親的な配慮の中で
司令官同志の肉親的な愛情と配慮の中で　　銃一発撃たずに　　銃架木に関する話

人民に対するキム・イルソン同志の至極の愛情　　人民を愛される気持ちで　　絶大な信任
祖国へ進軍する道で　　ソガンでの勝利　　祖国の地に再び勝利のかがり火を高く掲げて

焚き火歩哨　　常に部隊の管理をしっかりとやり　　敵の凶計に先制し　　敵の凶計を看破して
黨員はいつでもでも党組織生活に忠実でなければならない　　二度目の対面

反帝闘争の旗を高く掲げて　　再びアムノク江を越えて　　学びの第一歩
婦女会活動に対するキム・イルソン同志の綱領的教示　　マンガンでの演芸公演

自ら機関銃を取って　　自ら死線を突破して　　未来の真の主人公になりなさい
遊撃根拠地農民に対する司令官同志の温かい配慮　　ロフクサンでの勝利

目次

「抗日パルチザン参加者たちの回想記」 目録 1

「革命の同志を回想して」

| | | |
|---|-----------------------------|----|
| 1 | オ・ウンリョン同志を回想して | 11 |
| 2 | 「死んでもいつしよに死に、生きてもいつしよに生きよう」 | 20 |
| 3 | 共産党員ウイトンム | 27 |
| 4 | この背のうを同志たちに | 34 |
| 5 | パルチザンの英雄キム・ズントンム | 41 |
| 6 | 不屈の闘士 | 47 |
| 7 | 労働者階級の息子 | 57 |
| 8 | 忘れられないカン・ナムソン同志 | 66 |
| 9 | 忘れられないチャントンム | 75 |

「不屈の女闘士たち」

- 10 明けてくる明日のために ————— 83
 - 11 タバンチョンの密営で ————— 90
 - 12 トンファの樹林の中で ————— 98
 - 13 中隊の姉 ————— 106
 - 14 パルチザンの女將軍 ————— 117
 - 15 未来の幸福のために ————— 126
 - 16 遊撃隊の娘 ————— 134
- 「必勝の信念」
- 17 死線を突破して ————— 143
 - 18 トウマン（豆満）江の氷塊をかき分けて ————— 151
 - 19 難関を突破して ————— 160
 - 20 任務を遂行するまで ————— 166

「革命的信義で結ばれた同志たち」

21 熱い心臓
176

22 熱い同志の愛情で永遠に生きよう！
182

23 艱苦の日々に
188

「不敗の隊伍」

24 インターナショナルの歌声を聞くたびに
197

25 革命の道
203

26 ロルリ河ほとりの勝利
210

「革命のつばみたち」

27 ポンナミとともに
220

「人民の海の中で」

28 死に打ち勝ったチヨチャンヂユ（車廠子）
227

「革命の同志を回想して」

1 オ・ウンリヨン同志を回想して

チエ・ミンチョル

抗日武装闘争時期にたくさんの方々が革命のために生死苦楽をともにしながら峻厳な闘いの道を歩んできた。その中には今日の勝利と幸福を見ることができないまま惜しくも犠牲になった同志たちも少なくない。しかし彼らの革命精神は永遠に生きているし、我々を常に新たな勝利へ力強く鼓舞してくれている。

私がここで話そうと思うオ・ウンリヨン同志もまさにこのような忘れられない革命の同志の一人である。

私がオ・ウンリヨン同志と一緒に遊撃隊で活動するようになったのは一九三七年からだだったが、彼は年若かったが何事にも深重で沈着だったし、何よ

りも革命の任務に限りなく忠実で、同志たちをこの上なく愛する勇敢で立派な指揮官だった。

私は彼の革命家らしい高潔な品性の中から、一九三九年の冬にあったひとつの話だけをここに書こうと思う。

当時我々の中隊は負傷兵たちを護衛する任務を引き受けて、指揮部とともにヨハの深い密林の中のスパサンディ付近に駐屯していた。

人家と遠く離れたところで冬を過ごすようになった上にまた敵の動きが甚だしかったので、我々の活動には困難な点が多かった。その中でも特に食糧事情が困難だった。雪が深く積もり吹雪が続く中で、木の実、草の根さえも探す途がなくなった我々は、

負傷したトンムたちまで腹をすかさねなければならぬ苦しい境遇に処した。日がたつほど負傷したトンムたちの体は衰弱していき、病は悪くなるばかりだった。

このような状態で我々は非常対策を講じなければならなかった。

この時チェ・ヨンゴン同志からオ・ウンリヨン中隊長に食糧工作の重要な任務が下達された。

オ・ウンリヨン同志を責任者とする五名の食糧工作隊員は、チェ・ヨンゴン同志が教えてくれたとおりにムウォン県城からヨハ県城に行き来する郵便配達夫（以前から我が遊撃隊と連携が深い人）に会って、彼を通じて食糧を解決することを予期して出発した。

我々の目的地である二つの県城の間を通じる道路まで行くかと思えば、雪の中をかき分けながら二十余里を歩かなければならなかった。我々の途中の糧食は全部で炒った豆数つかみに過ぎなかった。しかし我々はどんな困難があっても必ず任務を遂行して

帰ってくる固い決意を抱いて歩みを急がせた。

オ・ウンリヨン中隊長はずっと我々の先頭に立って雪道をかき分けながら歩いた。

我々は千辛万苦して樹林の中を脱け出て広々と開けた地帯に入った。しかし吹雪が吹き荒れる果てしない平原を行軍しようとすると、樹林をかき分けて出てくる時よりもかえってよけいに骨が折れた。

雪が日差して若干解けては再び凍りついたので、我々は何歩か歩いては滑って転び、猛烈に吹き荒れる吹雪のために前を見分けることができなかった。

「こんなに寒くて吹雪がひどいのに郵便配達夫が来たりするだろうか!？」

「道がふさがって来れなかったらどうしようか……」
あるトンムたちはこんなことを言いながら心配そうな顔で中隊長を眺めたりした。

こんな時オ・ウンリヨン同志は「トンムたち、信念を固く持ちましょう。万一我々が郵便配達夫に会えずに食糧を解決できなかったならば、まず負傷したトンムたちがどうなりますか……郵便配達夫に必ず

会うことができます…さあ！ 元気を出して歩きましょう。」と言いながら、苦しがつているトナムたちの手を引いてやった。

我々は数粒の豆で飢えをしのぎながら両こぶしを握り締めて中隊長の後に従った。倒れれば十ぺんでも二十ぺんでも再び立ち上がって歩いた。そしてとうとう一日半かかって我々は目的地に着いた。

しかし目的地に着きはしたが、配達夫に会うことなど実際漠然としたことだった。彼といつの日に、どの場所で会おうと約束したわけでもなく、ただムウオン、ヨハ間を通じる道というのはこの道一つだけだから、彼は必ずこの道を往來するだろうというその一つのことだけを信じて、配達夫が現れるのを待つほかになかった。

我々は大きな道からいくらか離れたところに場所をとってここで郵便配達夫を待つことにした。ところが今か今かと陽が西の山に沈むまで待ったが、配達夫は現れなかった。いつの間にか暗闇が覆った。

我々は骨の髄までしみこむ寒さの中で火も焚けず

に体をかがめて座って夜が明けるのを待った。

その次の日も我々はまたそのように長たらしい一日を過ごしたが、郵便馬車は現れなかった。陽は再び暮れて寒さはいっそう厳しくなっていた。

「どうも道がふさがって来られないようです。」隊員の一人が不意にこんな言葉を口の外に漏らした。しばらく沈黙が続いた。

しかしオ・ウンリヨン中隊長は、ムウオン、ヨハ間を往來する郵便配達夫は数日に一度ずつ往復するので、根気よく待てば必ず会うことができるだろうと言いながらトナムたちを鼓舞した。

ついに三日目の朝だった。

依然としてやるせなくいらした気持ちで野原を眺めていると、馬ぞりが一台吹雪を高く巻き上げながら我々に接近してきた。

胸をどきどきさせながら馬ぞりを注視していた我々は、それが明らかに郵便馬車だということを確認した時、この上ないほどうれしかった。

郵便配達夫も我々が遊撃隊員だということを知る

や非常に喜んだ。我々は互いに力強く手を取り合つた。

オ・ウンリヨン中隊長は我々がそこで三日間待たないさつを話してから、「おじいさん、どうか我々を助けてください。」と付け加えた。

我々の要求を深重に聞いていた老人は、「そんな大事なことをどうして拒絶しますか。たとえ手紙を運べないことがあるとしても、それだけは必ず解決してきます。」とすぐに応諾してくれた。そうして我々は再びその場所で会うことを約束して彼を送り出した。

その後三日目の日、老人は約束どおり戻ってきた。彼は郵便馬車に小麦粉と布を積んだほかに、我々に与えようとマンドウ〔朝鮮式餃子〕八十余個と酒まで持ってきた。

配達夫の老人に心から謝意を表して彼を見送ってから我々は一箇所に集まって座った。

オ・ウンリヨン同志は我々にもつと近くに座りなさいと言うと、マンドウの包みをほどいた。

配達夫の老人が心を込めて毛皮の外套に包んできたマンドウにはまだ温かみがあるまま残っていた。

何日も空腹と闘ってきた我々にはすぐさまマンドウの包みに手がいくのをこらえがたかった。しかし次の瞬間、我々の目の前を、病床に横たわつて切なく我々が帰ってくるのを指折り数えて待っている戦友たちの青白くやつれた顔がすすめていった。

黙つて我々を見回していたオ・ウンリヨン中隊長は、しまいにこのように言うのだった。「人民の真心がこもつたこの温かいマンドウをこのまま負傷したトムムたちに持つていってやったらどうでしょう？」

これをどうしてオ・ウンリヨン同志一人だけの心情と言えようか！

我々は皆一様に彼の言うことに賛同した。我々はマンドウを再び包んで背囊の中にした。そしてようやく老人が持つてきてくれた酒で体をほぐした後、そこを発つて帰路についた。

道は険しく荷は重かつたが、トムムたちに食糧を持つていくという喜びで我々は苦しさも忘れて歩い

た。

吹雪は依然として激しく吹き荒れて我々の歩みを遅らせた、時には雪を巻き上げるつむじ風の中に入っ
てしばらく雪の中に埋まってしまいうこともあった。

しかし我々は互いに励まし合いながら歩いた。

「さあ！ トンムたち、腹をすかせながら我々を待っているトンムたちのことを考えてもう少しがんばりましょう。」

我々は倒れてもオ・ウンリヨン同志のこのような言葉に再び力を得て立ち上がり、立ち上がっては再び歩いた。

ヨハ県のサトグに向かう山のもとに至ってから
は、深い樹林の中をかき分けながら倒木をまたいで
越えたので道も倍かかり骨が折れた上に、一粒一粒
数えて食べていた豆まですっかりなくなつた。しか
し我々は歩みを移すたびによるめきながらも、誰一
人腹が減つたという言葉を口の外に出さずに一晩中
休まずに道を急いだ。

次の日の朝休息命令が下りた時、我々は皆気力が

尽きて雪の上に倒れるように座り込んだ。

このような時にもオ・ウンリヨン同志だけは休ま
なかつた。彼は我々が横になつている間ずっと歩哨
に立ちながら雪の中を掘り返してどんぐりを拾い集
めた。

そして彼は我々を起こして座らせた。

「トンムたち！ 元気を出しなさい。もう遠くは
ないからこのどんぐりでも食べて、一気に行きましょ
う。」彼は一握りは十分にあるどんぐりを我々の前
に差し出すのだった。

それを見た我々は皆元気を出して起き上がり、ど
んぐりを拾ってきてそれを焼いて空腹を癒してから
再び出発した。

このようにまた一日歩いて我々はいよいよホソンミョ
ン連絡処が遠くないところに至つた。

私とキム・グアンサントムムが先に立ち、オ・ウ
ンリヨン同志と他のトンムたちは後ろについてきて
いた。

ところが我々が樹林の中をほとんど抜け出て野原

に入ろうとした時だった。急に雪の中に隠れていた敵が手を挙げると叫びながら両側から飛び出してきた。

我々は思いがけず敵の埋伏線に入ったのである。

後に知ったことだが、ホソン・ジョン連絡処を探知した敵がこの日数百名の〈討伐隊〉を放つてそこに通じる道に埋伏させていたのである。

やつらは我々をすつかり生け捕りにするつもりだった。

卑怯にも敵に生け捕りにされるか、そうでなければ戦って死ぬかという二つの道のほかになかった。

我々は決死戦を覚悟した。

私は反射的に拳銃を抜いてます前をさえぎって立つた奴を撃った。拳銃の音は私の後ろと左右からもした。

その瞬間「木に隠れて戦えー」というオ・ウンリョン同志の叫び声が聞こえた。我々はすぐに後ろに退いて木の後ろに隠れて射撃を続けた。

すでに十余名の敵が雪の上に倒れた。

このようになるや敵は我々を生け捕りにするのを断念したように、銃を撃ちながら四方からわつとかわってきた。

戦闘は激烈になった。

我々は敵が近寄るたびに手榴弾を投げて山積みにして倒しながら一歩一歩樹林の中に深く入っていった。

ところがこの時一人の隊員が敵弾に当たって倒れるや、オ・ウンリョン同志は彼を救うために敵の包围の中に再び飛び込んでいった。この瞬間オ・ウンリョン同志はそのまま足を負傷した。

くるぶしが砕け、足首が半分以上なくなった怪我によつてもう立ち上がることも、歩くこともできなくなつたオ・ウンリョン同志の顔にはただならぬ深刻な表情が浮かんだ。

彼は私に頭を向け、やわらかくも厳しい声で、「ミン・チョル・トムム！ こいつらは私が引き受けるからトムムたちと一緒にここから脱出しなさい！」と叫んだ。

そして彼は歯を食いしばって、群れになってかかってくる敵を沈着に撃ち倒しながら私の返事を待っていた。

しかしこんな時にどんな言葉でどんな返事ができようか！ 私はかかってくる敵を撃ち倒しながら彼に一歩一歩近づいた。

「ミンチョルトンム！ 私の言うことが聞こえなかったのか？ 何をしている？…」

敵を続けて倒しながら再び催促する彼の言葉は厳しかった。しかし生死苦楽とともに分かち合った革命の同志であり、指揮官である彼を危険の中においてどうして我々だけが先に脱出することができようか！

彼は再び鋭い声で叫んだ。

「君はなぜ命令を執行しないのだ！」瞬間私の胸は張り裂けそうだった。

私はオ・ウンリョン同志にやっとな声をかけた。

「中隊長同志！ 私と一緒に戦わせてください！

私は：私は行けません！」

これは私一人だけの心情ではなかった。死んでも彼と一緒に、生きて部隊に帰るのも彼と一緒にというのが我々全ての心情だった。

我々の思いを変えさせるのが難しいと思ったのかオ・ウンリョン同志はその後しばらく言葉がなかった。

この時オ・ウンリョン同志がさらに悲壮な決心を固めたことを我々がどうして知りえたらうか！

彼は自分の前の敵に向かってびったり近寄って最後の手榴弾を投げると、「トンムたち！ 早く行きなさい！必ず部隊に帰りなさい。…」と叫んだ。

「あつ、中隊長トンム！…」

私はのどを詰まらせて叫んだ。しかしすでに時は遅かった。

拳銃をしっかりと握ったまま倒れているオ・ウンリョン同志を見た私の心臓は今にも張り裂けそうだった。

その次の瞬間胸の中からは敵に対する敵愾心とともに、中隊長同志の高貴な死を無駄にしてはならないという重い責任感が湧き上がった。

何をためらうことがあるのか！

身が粉になることがあるうとも食糧を持っていくようにという彼の命令を必ず遂行しよう！

五名中三名の同志が犠牲になり、ただキム・グアンサントムと私だけが生き残った。我々は敵の包囲陣から脱出するために決死的に戦い、ついに敵の包囲から脱出した。

愛する戦友たちを失ったつらい心の傷のために、我々は足がどのように動いたのかも分からずに部隊に向かって歩みを移した。

しかし我々は何歩も歩めずに振り返った。足がその場から離れずに前に踏み出すことができなかつた。どこからか中隊長の声が聞こえるようだったし、戦友たちが再び起き上がって飛んでくるようだった。

我々は魂を失った人間のように吹雪の中に向かって叫んだ。

「トムムたち……」

「中隊長トムム……」

しかし猛烈に吹き荒れる風の音だけで、何の返事

もなかつた。

やっと密営に帰ってきた我々は、一部始終を話す前にまず荷を解いて震える手でマンドウを取り出した。

そのマンドウと同志たちをかわるがわる見た瞬間、こみ上げる悲しみをそれ以上こらえきれずに私はそのままわつと泣き出してしまった。

そのマンドウにまつわる話と犠牲になった同志たちの壮烈な最期を聞いて、負傷兵の同志たちも地を叩いて泣いた。

「中隊長同志！ オ・ウンリヨン同志……」こみ上げる悲憤をこらえきれずにこのように叫びながら泣くトムムたちの目からは、敵に対して込み上げる敵愾心と、必ず復讐しようという闘志が火花のように飛び散っていた。

オ・ウンリヨン同志を失った我々全ての悲しみは大きかった。

しかし我々はこの計り知れない大きな悲しみに打ち勝つてさらに固く銃を握った。

彼が残した永生不滅の革命精神は、我々の胸に革命の偉業に限りなく忠誠を尽くそうという新たな決意と闘志を抱かせ、いつも我々を敵撃滅の戦いに力強く呼び起こした。

2 「死んでもいっしょに死に、生きててもいっしょに生きよう」

キム・ビョンシク

今日人民軍隊内では抗日武装闘争時期に実現された将兵一致と革命的同志愛の伝統的美風が高く発揚され、これに関する数多くの美しい話が我々の胸を熱くする。

私は我が人民軍隊の上下間、同志相互間の熱い愛情と団結に関する話を聞く時には、艱苦だった抗日武装闘争時期の指揮官と戦友たちのことが思い出され、いつのまにか胸が熱くなる。

私の指揮官の一人だったチェ・チュングク同志は、革命に限りなく忠実な確固とした共産主義者であり、キム・イルソン同志の忠実な戦士だった。

彼は戦場で勇敢だったばかりでなく、戦場の時や日常生活で自分の部下と革命の同志をこの上なくいつくしみ愛するそのような指揮官だった。

私は一時彼の連絡兵をしていて、自分自身よりも

まず革命の同志と部下のことを考え、深く配慮する彼の高邁な品性を日常的に見てきたし、私自身温かい愛情をたくさん受けた。

特にその中でも私を限りなく感動させた一つの事実が今も私の記憶に生々しい。

それは一九三九年一月、部隊の食糧工作のために、ホンソクラヂヤから約七里ほど離れたある集団部落の敵を攻撃して帰って来る時にあったことである。

この日我々襲撃班は、城内の敵を奇襲して目的とした食糧は鹵獲したが、撤収しようとした矢先に、数量上優勢な別の敵が急に部落に到着したため、やむを得ず正面衝突を避けながら土城を越えて脱出するようになった。

この時襲撃班を先に発たせてその後ろを探りながら行動していた正尉チェ・チュングク同志と彼の連

絡兵である私は、やや遅れて通路に決めた土城の壁にたどり着いた。

ところが登って越えるはずのはしががなく、後衛を担当したキムトムムも見えなかった。

我々を追撃しながら無秩序に歩き回っていた敵が、ここにも来てからまた別のところに押しかけていったのだと推察することができた。

この時敵は我々が撤収する方向に猛射撃を加える一方、部落の路地路地を搜索しながらうろつきまわっていた。

キムトムムがどうなったのか心配だった。

我々は周辺を探りながらキムトムムを探してみた。

しかし一寸先を見分けることも困難な真つ暗な夜だったので、どこがどこか見分けることが困難だった。

そうかといって敵を鼻先において声を出すわけにもいかなかった。

私の胸は締め付けられるようにやるせなかった。

ちょうどこの時だった。

「ううむ…ううむ」という細い呻吟の音が近くから聞こえてきた。

我々はその声があるところに急いで駆け寄ってみた。

土城の壁からちよつと離れたある稲むらの横に、ほかならぬキムトムムが右側のふくらはぎに貫通傷を負って倒れていた。

「キムトムム！ キムトムム！」

声を殺してこのように呼びながら何度も揺すぶってみたが、返事がなかった。

何日も腹をすかせたうえにたくさん血を流した彼は、完全に昏睡状態に陥っていたのである。

しばらく心配そうな顔でキムトムムを見守りながら何か深く考えていたチェ・チュングク同志は、立ち上がって私に言った。

「君はキムトムムを守ってここにいなさい。どうしても土城の壁を手榴弾で壊して越えなければならぬよ。」

彼は、重傷を負って危急な革命の同志を救出する

ためには危険を恐れずにこんな大胆な決心をしたのである。

実際この時私も、負傷したキム・トナムを負ぶって高さ三メートル以上の土城の壁をどのように越えようかと心配していたところだった。しかし手榴弾で土城の壁を壊そうというのには驚かざるを得なかった。それは手榴弾が破裂する爆音がすれば、敵がごとくと我々のところに押し寄せてくるのがわかりきっていたからだだった。

しばらく後にすごい爆音が響いた。

私はすばやくキム・トナムを背負って土城の壁のところに走ろうと急いだ。

しかしもともと体が大きいうえに意識を失って力の抜けた彼を、年のゆかない私の力では到底動かすことができなかった。

私が見てもどかしく身をもがいているところへ、チェ・チュングク同志が走ってきて言った。

「君じゃだめだ。君は敵を監視しなさい。早く！」
爆音に驚いた敵は我々に射撃を集中しながら押し

寄せてきた。

暗がりの中でも奴らが近づいてくるのが一人二人と見え始めた。

この時キム・トナムを背負ったチェ・チュングク同志は、一番前に立って近づいてくる奴をすばやく撃ち倒して、壊れた土城の壁の方に走っていった。

私も場所を移しながら一人一人撃ち倒した。

敵弾はいつそう激しく飛んできた。

まさにこのような危急な瞬間、半分以上壊れた土城の壁を越えたチェ・チュングク同志が急に立ち止まるのがちらつと見えた。

(あつ！ 正尉同志が?)

私は片方の手に抜き持っていた手榴弾を敵に投げた。

奴らは急に飛んできた手榴弾にびっくりしてしばらく退いた。

この時を利用して私はチェ・チュングク同志のところに近寄った。

「正尉同志……」

しかし彼は、「ビヨンシク、早く越えなさい！」という声だけ残して、キムトンムを背負ったまま土城の外に脱出した。

私も続いて土城を越えた。

正尉同志はそのままキムトンムを負ぶって前に走っていきながら急いで叫んだ。

「ビヨンシク、早く！」

私はしばらく土城の壁にもたれて敵の動静を探ってから彼の後に従った。

彼のそばに追いついた時、私は彼がひどく足を引きずっているのに気づいた。

彼は土城を越える時敵弾に当たって足を負傷したのだった。

それを見た私は彼になんと言ったら良いのか分からなかった。

結局我々は土城を越えたが、三人の中で私一人だけがまともな体だったのである。

(たとえ背中によって這いつくばることがあろうとも、負傷した正尉同志にキムトンムを任せてお

くことはできない。)私はこのように決心してチェ・チュングク同志の腕をつかんで言った。

「正尉同志、僕がキムトンムを負ぶっていきます。」しかし彼は、「ビヨンシクではだめだ。さあ、早く先に立ちなさい。敵が追撃してくるから……」と言っ

てかえって私の手をつかんで引つ張るのだった。

敵は我々が土城を越えて暗がりの中に消えるや、引き続き銃をめくら撃ちしながら、土城の周辺でがやがや騒いで我々を探していた。

奴らは我々が恐らくその周辺のどこかに隠れていて、また手榴弾を浴びせたりしないかと思っておびえながら押し寄せている様子だった。

このような間に我々はかなり走ってきた。しかし野原を完全に抜け出て樹林の中に入るにはまだかなり進まなければならなかった。

チェ・チュングク同志の歩みはだんだんのろくなかった。

何日も満足に食事を取れずに負傷までした体でキムトンムを負ぶって走る彼は、力の尽きるたびにし

しばらく立ち止まってキムトムを背負いなおしては再び走るのだった。彼はすでに何度も倒れては起き上がった。

彼の前で道を探しながら進んでいた私は、そのたびにやるせない気持ちを抑えきれずに、再び引き返して、キムトムを私にかつがせてくれと頼んだ。

それでも彼はキムトムを下ろそうとしなかった。

「まだ大丈夫だ。もうちょっと行けばいいから……さあ、早く走りなさい。」

と言つてかえつて私を押しながら鼓舞するのだった。

しかし力の尽きた彼を見てそのまま歩むことはできなかった。

私は肩を押し入れて彼を支えたり、彼を押ししたりしながら歩いていった。

こうすると彼はずつと楽になるようだった。しかし歩みはだんだんさらにのろくなった。

ところがこの時暗がりの中で我々の行方を探し回っていた敵が我々を迫撃してきた。敵弾は我々の耳元

をかすめてびゅんびゅん飛んでいった。

私はそのまま進むことはできなかった。

（僕が死ぬことがあるうとも正尉同志を守らなければならぬ。）

このような思いで私は彼からさつと離れながら拳銃を抜き持つて振り返った。

するとチェ・チュングク同志は私の手を力いっぱい引つ張りながら言った。

「ビョンシク！ 何を考えているんだ。だめだ！」
私は黙つて彼の後に従った。

この時やつと気を取り戻したキムトムが、かすかな意識の中でも我々の話を聞いてすべてを悟つたらしく、詰まった声で言うのだった。

「正尉同志……」

キムトムが意識を回復したのを知るや、正尉同志は、「良かった。キムトム……もうちょっとの辛抱だ。」と言つて大変喜ぶのだった。

私もあまりにうれしくて、「キムトム！」と呼んだ。ところがキムトムはせわしく息をつきなが

らこのように言うのだった。

「正尉同志、私を下ろして行ってください。危険です。私を置いて行ってください。」

彼は雪の上に転げ落ちようとやたらと身をもがくのだった。

するとチェ・チュングク同志は彼を力いっぱい背負いなおすと、厳しくもやさしい声で言った。

「キムトンム！ 何でそんな弱気なことを言う。それじゃ、君を捨てて我々だけで行けというのかね？！ 我々は死んでもいつしよに死に、生きてもいつしよに生きなければならぬ。元気を出して私にしっかりつかまりなさい。」

しかしこのように言うチェ・チュングク同志自身すでに何度も倒れ、そのたびに歯を食いしばって再び立ち上がって走ったのだった。

こうして走る彼の背中ではキムトンムが、「私のために…私のために…」と言いながらずつとすすり泣いていた。

このようなキムトンムを見ながら、正尉同志を助

けながらついていく私の胸にも熱いものが込み上がった。

（部下に対する、革命の同志に対する肉親以上に熱い愛情、死んでもいつしよに死に、生きてもいつしよに生きよう…）

私は背が低く力が足りなくて正尉同志をもう少し助けてやれないのが恨めしかった。

我々は身も心も一塊になって気力を整えながら走り走った。

キムトンムは再び昏睡状態に陥って静かになった。しばらく後に我々は目的にしていた樹林の中に入った。敵はもう追撃してくることはできなかった。

しばらく樹林の中にさらに深く入っていくと、夜が明けてきた。

この時チェ・チュングク同志は私に言った。

「ジョンシク、キムトンムにちよつと何か食べさせて、体もほぐしてやってから行こう。」

私はその時やつと我々の着ている服がよろいのようにかちかちに凍っているのに気づいた。

ある日当たりの良い奥まった静かなところにキム・トムを下ろして横にしたチェ・チュングク同志は、すぐに火を起こす準備を急ぐのだった。

しかし彼はまだ自分の傷口も縛ることができないでいた。

彼は足を引きずりながら乾いた木を拾い集めに行くのだった。

それを見た私は、「正尉同志！ 傷口を縛ってから！」と言ってはそれ以上言葉が続かなかった。

しかし彼は笑顔で私を振り返って言った。

「私の心配はせずに、すぐに粥を炊く準備をしろ。早くキム・トムの世話をしななくちゃ。」

私はもつと言いたかったが、のどが詰まって言葉が出なかった。足を引きずりながらゆっくりと歩いていく彼を眺めながら私は、革命の隊伍の中で、このような指揮官の愛情の中で育ち闘っている自分がどんなに幸福かをいっそう切々と感じた。

キム・イルソン同志によって教育され育成された、キム・イルソン同志の忠実な戦士であるチェ・チュ

ングク同志！ 「死んでもいっしょに死に、生きてもいっしょに生きよう」という彼の言葉のように、私もこのような精神で同志を愛し、指揮官を守りながら、永遠に革命の闘争隊伍で彼らとともに生きて闘おうと何度も固く決心した。

3 共産党員ワイトナム

ユン・テホン

キム・イルソン同志が領導された抗日遊撃隊に私が入隊してから一年が経った一九三五年の冬だった。

その時私が属していた部隊はソンガンハ付近にいたが、八十名ぐらいの隊員のうちほとんど大部分は反日部隊の出身だった。別名「教育部隊」とも呼ばれたこの部隊には遊撃隊から派遣されてきた幹部（中隊長と小隊長）たちとともに四十歳近い年配の隊員であるワイトナムが活動していた。

私の頭には今でも忠実な共産党員だったワイトナムについての数々のことが思い浮かぶ。

彼は初期の私の遊撃隊生活において革命家としての真の模範となった。

その中でも特に私を限りなく感動させたのは、部隊の越冬用の資金を解決して帰ってきた時のことである。我々の工作隊は工作任務の責任を負ったウイ

ナムと、数ヶ月前に反日部隊から移ってきた青年、そして私の全部で三名だった。我々は部隊から二十余里も離れたサムドのソンガンハという村で部隊の越冬用の資金を解決して再び部隊に帰ってくるようになった。

その時我々は部隊の行方を見失っておよそ四ヶ月間も無人地帯で多くの苦勞を経なければならなかった。

部隊から持っていた食糧が全部なくなつて我々は何日もの間ひどい寒さと飢えに苦しめられるようになった。

激しい吹雪が吹き荒れる寒さの中で全身がかかちちに凍りつき、雪の中に埋まった足の指は今にももがれるようだった。

苦難に満ちた行軍が継続されたある日、反日部隊

から移ってきたその青年は耐え切れずに雪原にばたつとへたりこんだ。彼は艱苦な革命闘争でまだ鍛錬されていなかった。

ウイトンムは青年を助け起こして彼の隣に立った。そしてこのように言い聞かせた。「本当に耐えられないのかね？ 確かに並大抵の寒さではない。しかし我々はあらゆる困難に打ち勝って一日も早く部隊に戻らなければならない。我々は非常に重大な任務を負っている。越冬用の部隊の資金が我々にあるではないか。私は部隊のトンムたちのことを考えれば一日でも惜しい。さあ元氣を出しなさい。」

ウイトンムは自分のはめていた手袋を脱いで青年にやり、襟巻きまで巻いてやった。

それでも青年はふくれつららした声で不平を言った。

「組長トンム！ 村に下りて行ってちよつと休んでいきましよう。我々には部隊の資金もあるのに何のために腹でこでないなければならないのですか？ 食糧も少し用意しなければならぬじゃない

ですか？」

私も心の中ではあまりにひどすぎるという思いもなくはなかったが、部隊の資金を勝手に使うことがどんなに大きな規律違反であるかを再び考えた後、何も言わずに立っているだけだった。

ウイトンムは我々をじつと見つめると、

「我々はどんな時でも革命家としての規律を守らなければならない。もしもそれができなければ知らぬ間に革命の隊伍で動揺するかも知れないし、もっと険しい穴に落ちこむかも知れない。」

もちろん我々は村に下りて行って食糧を手に入れてくることはできる。しかしちよつと考えてみなさい。この付近はみな敵の統治区域なのだから非常に危険なことじゃないか？ また我々が村に下りていけば部隊に到着する日もそれだけ遅れる。

絶対に遅れてはならない。たとえ雪の中の草の根を掘って食べてでも我々は部隊の資金を勝手に使うことはできない。」

ウイトンムは最後までこのように説得しながらいつ

そうよく我々の面倒を見てくれた。

彼は休息するたびにいつの間にかもう雪の中に埋まった草の根を掘り出し、ゆでてぎゅっと絞っては、「これがどんなものかちよつと食べてごらん。おそらく君はこんなものを食べたことがないだろう？」と言つて塩まで取り出すのだった。

青年もこの真心に負けてこれを口にするのだった。しかしそれはその時だけだった。引き続き飢えと強行軍に疲れた時には青年の弱い心は再び現れた。

そんなある日だった。

この日我々はリヤンガングの村からちよつと離れた山道にさしかかった。雪が膝まで埋めるほど降つた山の斜面はどこを見ても白雪におおわれ、ここでは草の根さえ掘り出して食べることができなかつた。我々は幸いにも深い谷間に入った時丸木小屋を一軒発見した。

ウイトナムはその家で一日泊まっていこうと言いつながら、私と青年にこの地帯は敵統治区域だから警戒心を高めるようにと再三頼んだ。

我々は家のそばに近づいて様子を探ってみたが、別に変つた気配はなく、六十歳を過ぎたくらいの老人が一人何かを臼でついていた。

「ご苦労様です。…」とウイトナムが丁寧に挨拶した。

老人は横目でにらむだけで、何の返事もせずしばらく我々を上から下までじろじろ見てからぶつきらぼうに訊いた。

「ところで何しに来たんだね？」

「一晩ご厄介になろうかと思つて寄りました。…」

「うちの家では休むことはできないよ。ごらんとおり部屋の中がひどく狭いだろう。」と言つてきっぱり拒んだ。

この時老人の行動を不当に思つた青年が腹立たしげに言葉かけた。

「それじゃ米でも売つてくれよ。それもいやかい？」

老人はちらつと青年を見た。

「ないよ。うちには何もないよ。」

「何っ?!」

怒りがこみ上げた青年は、再び反日部隊で生活していた時期の習性がよみがえったように銃台を握り締めて老人に食ってかかった。

(なんとこのトンムが?) 私は大変驚いた。

ちようどその時「トンム!」というウイトンムの声が響いた。彼の低くて力のある声にはどこか近寄りがない威厳がこもっていた。自分をにらみつけるウイトンムの視線があまりにも鋭くて青年は若干あわてて後ろに引き下がった。私は今までウイトンムのこんな鋭くて厳格な顔色を見たことがなかった。

やがてウイトンムは再び老人に近づいて丁寧に行った。「おじいさん! 狭くても構いませんから一日ちよつと休ませてください。私たちは雪の原で何日も夜を明かした遊撃隊なのです。…」

老人はすまなそうに丁寧に話すウイトンムの態度と遊撃隊員だという言葉に多少気持ちをしなげながら、

「何、遊撃隊だって! それならそうと早く言えばいいのに。さあ早く入って体を休めなさい。」と言っ

て部屋の中に案内した。

老人の家で久しぶりに食事を取った我々は、数日ぶりに押し寄せた眠気に取られて横になるやすぐに眠りこんだ。

しかしウイトンムだけは主人の家の薪を割ってやり、水も汲んでやりながら老人の仕事をせわしく手伝ってやった。

私と青年はそんなことも知らずにそのまま眠ってしまった。

次の日の朝にやっと目を開けた私は大変驚いた。

夜通しウイトンムは麦わらでむしろを編んでいたのである。今まで敷物一枚なく板の間で過ごしていた老人はどうしてよいかわからないほど喜んだ。

「なんとまあ、ありがたいこつた…これは本当にすまなかつた、どうか勘弁してくれ。…」

「何をおっしゃいます。私たちこそおじいさんにご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。」

夜寝そびれたウイトンムの両目は充血していた。

老人は「わしは本当にあんたのような人を初めて

見たよ。昨日あんたたちに冷たく当たったわしを赦してくれ！ わしは初めあんたたちが遊撃隊員だとは知らずに土匪だとばかり勘違いして。…」と謝罪するように低く言った。

「おじいさん、私たちは貧しい人間を苦しめる日帝の奴らと闘う抗日遊撃隊なのです。」

山の中で日帝「討伐隊」の奴らと土匪たちから何度もひどい目に遭わされたという老人は、ウイトンムの話が終わるや、「闘わなくちゃならん、あいつらを打ちのめさなくちゃならん…」と独り言のようにつぶやくと、ぱつと立ち上がって外に出て行くのだった。

やがて老人は網袋にじゃがいもをいっぱい入れて部屋に入ってきた。

「見なさい！ じゃがいもはこんなにたくさんあるからたらふく食べなさい。」

私は老人のありがたい態度に胸がいっぱいになった。初めは我々をあんなに煙たがっていた老人、一握りの食糧もないと言っていたあの老人ではないか！

私のそばに近寄って座った、反日部隊から移ってきた青年も感激で涙をいっぱい浮かべていた。

我々はその老人のあたたかい世話で一日休息した。出発準備をする我々の挙動を察した老人は、「もう一日だけ休んでいきなさい。こんなにすぐに出発するという法があるかね？」と言いながら我々を送り出そうとしなかった。

ウイトンムがすぐに出発しなければならぬ事情を話した時、老人は軍隊の方たちがすることを妨げることとはできないと言いながら、ちよつとだけ待ちなさいと言うと、再び網袋にいっぱいじゃがいもを入れて持ってきた。そして「軍隊の方たち、これを受け取りなさい。行く途中で腹が減ったら空腹の足しにでもしなさい…」と言った。

この日、老人は出発する我々を山の屋根まで見送ってくれながら互いに別れるのを非常に名残惜しがった。老人の目にはまるで遠い外地に自分の息子を送り出す時のような悲しみの色が浮かんでいた。

老人が引き返した後、ウイトンムはその時やつと

青年を厳格にたしなめた。「それでどう思うんだね？
きのうの君の行動は正しかったのかね？」

青年は黙って顔を赤らめた。

「よろしい！ 分かればよいことだ。

きのうの君の行動は非常に危険な行動だった。なぜなら我々遊撃隊を人民と切り離す行動だったからだ。」

そう言いながらワイトナムは、我々の革命が艱苦であればあるほど人民をいつそう信じ、人民に依拠して闘わなければならないということ、人民の支持と声援を受けることこそが我々の力であり、勝利の源泉なのだということを順々に説明してやった。

…我々の行軍は進めば進むほどいつそう困難が重なった。行けども行けども果てしない雪嶺、吹き荒れる吹雪は我々の前進を妨げた。老人からもらったじゃがいももすっかり食べてしまっただけから久しかった。

しかし我々はどんな難関にぶち当たろうとも部隊を探さなければならなかった。我々はムソンのソン

ガンハの樹林の中に到着して数日の間ずっと腹をすかしながら部隊から連絡が来るのを待った。我々は付近から食べられる草の根をすっかり掘り出して食べた。

しかしワイトナムは資金が入った背囊の紐を決してほどこいたことがなかった。

極度の飢えに疲れたある日、ワイトナムは我々の前にじゃがいもを四つ差し出した。

これを見た青年はたちまち元気が湧いたようにぱつとその場を蹴って立ち上がった。ところが次の瞬間そのじゃがいもが十余日前に山小屋の老人からもらったものであるのを知るや彼の目にはすぐに涙がにじんだ。

（組長トナムは今まで食べずにいたんだな！）という思いに私も涙が浮かんだ。青年はとてもじゃがいもを受け取ることができず、見違えるほど衰弱したワイトナムを今にも泣き出しそうな顔で眺めた。

「さあ、腹ごしらえをしよう。しかしこのじゃがいもは本当にかちかちに凍ったもんだな…おや、ど

うしたんだ？ 早く受け取らないか！」

ウイトンムはどうしてよいかわからないでいる青年の手にとうとうじゃがいもを握らせてやってから自分は葉煙草を吸った。

「早く食べなさい！ 私は苦い葉煙草の味の方がもつとすきだな。…」

ウイトンムのこのように変わることのない熱い同志愛と強い意志、そして任務の遂行における高い責任感青年に深い感銘を与えた。

我々はおよそ四ヶ月ぶりに部隊に会った。

その間部隊は約四里あまりさらに深い樹林の中に場所を移し、時折連絡員を送って我々を探させたのだった。

我々はどんな困難の中でもとうとう部隊の資金にはちりほども手をつけなかった。部隊のトンムたちに会った我々はあまりにもうれしくて涙がどつとあふれ出た。

ウイトンムもその大きな目に涙を浮かべて、ぎゅつと自分の手を握る中隊長同志の顔を黙って眺めてい

るだけだった。

中隊長同志のどを詰まらせて叫んだ。

「ご苦労様でした！ トンムたちは真の革命の息子です。真の闘士です。」

トンムたちは我々を高く持ち上げて歓声を挙げた。苦難に充ちた四ヶ月間の日々―それはそれまでまだ未熟な隊員で、革命の艱苦な試練の中で鍛錬されていなかった私とその青年に、真の革命とは何であるかを悟らせた。同時に我々は今後ウイトンムのように高潔な革命精神で生き、闘おうと何度も誓った。

その後もウイトンムは我々に引き続きあたたかい援助を与えてくれた。分からないことは教えてくれたし、骨の折れることは助けられながら、この上なく我々の面倒を見てくれ、その青年を立派な共青員にまで育ててくれた。

4 この背のうを同志たちに

—リュ・チストンを回想して—

私はかつての抗日武装闘争時期に革命のために指揮部を保障しながら戦友たちの身代わりのためらいなく命を捧げたたくさんの同志たちを知っている。

私が話そうと思うリュ・チストンもまさにこのような崇高な革命精神で自己の貴重な生命を捧げた遊撃隊員の一人である。

リュ・チストンは東北ヨハ県のある農村で小作暮らしをした後に一九三六年に遊撃隊に入隊した。彼は心がやさしく、特に同志に対する友愛心が強く、入隊した最初の日から戦友たちのこの上ない愛情と尊敬を受けた。部隊が非常な困難に出くわすたびに彼はいつも先頭に立つて進み、戦闘の時には常に勇敢で大胆だった。

キム・チュンリョル

一九三九年の冬だった。

我々の部隊は北満のヨハ、ホリム一帯で数十倍に達する敵と毎日のように熾烈な戦闘を進めていた。敵は続けて甚大な打撃を受けながらも執拗に襲いかかってきた。

昼夜休息する間もなく戦闘をし、行軍しなければならぬ我々の前には困難が多かった。

部隊がトムホの近くに至った時、食糧がなくなつて三〜四日食べ物にありつけなかった。このような状態ですら食糧を用意しなければならなかった。

指揮部では食糧工作隊を編成した。そこにはリュ・チストンや私も選ばされた。当時私は機関銃手で、リュ・チストンは副射手だった。我々は食糧を手

に入れるために腰まで埋める雪をかき分けながら密林の中を行軍した。何日も空腹だったうえに吹雪まで吹き荒れて、わずか四里しかない目的地に夜中の十二時をはるかに過ぎてやっと到着することができた。

目的地に到着した我々は息つく間もなくすぐにそこにいる自衛団を襲撃した。そして奴等の食糧をろ獲し、力の及ぶ限り一荷ずつかついで引き返した。戻る道は何倍も骨が折れた。

空腹が極度に達したところへ重い荷を担いだし、雪の中に倒れると自分の力ですぐに立ちあがることができなかつた。しかし我々は互いに手を貸し、肩を貸し合いながら雪道をがむしやらにかき分けて進んだ。

チストンムは体が弱いトナムの背のうを肩からはずして二人分を担いで歩いた。彼の顔には汗が水のように流れ落ちたが、終始背のうの一つを別のトナムに渡そうとしなかつた。彼は逆に前に立ってほかのトナムたちの手を取って引いてやつたり、後ろか

ら背中を押してやつたりした。

我々はその次の日の朝遅くやつと約束した場所に到着することができた。しかし部隊はすでに別の場所に移動した後だった。我々はそれまでの緊張がいつぱんにゆるんでそのままその場に倒れるようにへたりこんでしまった。そして第二の集結場所に出発する前にそこで一晚休息することにした。元気を回復しなくてはそれ以上行軍を続けることはできなかつたからである。

我々は担いできたとうもろこしを煮てまず空腹をいやした。そして歩哨だけを残して皆眠くなつてたき火のそばに横になつて眠つてしまった。

どれだけ時間が経つたのか私は急に目を開けた。皆ぐつぐつと眠つたままだつた。ただチストンムだけが一人たき火の前に座つて何か熱心にやつていた。「何をしているの?」と私は起きて座りながら彼に尋ねた。

チストンムは私を振り返つてみながら黙つてにこつと笑つた。

彼はとうもろこしをたき火で炒っていた。私は彼のそばに行った。すると彼は黙って横に置いた背のうちから炒ったとうもろこしをひとつかみ取り出してくれた。

彼の背のうは炒ったとうもろこしでいっぱいだった。きつと一睡もせず炒ったものに違いなかった。「どうしてとうもろこしをこんなにたくさん炒ったのです？」

私が驚いてこのように尋ねると彼は「我々はどうか空腹をいやしたけれど、部隊のトンムたちはさぞ腹をすかしているでしょう。トンムたちに会ったらずぐに分けてやって食べることができるようになくちや。どうしてとうもろこしが煮えるまでのんびりと待たせておくことができますか。」と言うのだった。

私は彼の言葉を聞きながら胸に熱いものがこみあがるのを抑えることができなかった。戦友たちを思う彼の高貴な品性は私の胸を強く打った。

「チストンム！」と言って私は力いっぱい彼の手

を握った。

私は彼にとうもろこしは私が炒るからちよつと横になりなさいと勧めたが、彼はとうもろこしを横になろうとしなかった。

しばらくのちにトンムたちも一人二人と起き始めた。

ちょうどこの頃に歩哨線から敵が押し寄せてくるという合図を受けた。後に分かった事実だが、敵は我々の部隊の行方を見失ってしまい、この近くをそのままうろついているうちに我々と遭遇したのである。

リュ・チストンムと私は山に登るトンムたちを援護するために機関銃を山の端の崖の上に据えた。

奴等是我々の人員が少ないことを知って包囲態勢を取りながら押し寄せてきた。

私は襲いかかってくる敵の群れに向かって連発火雷を浴びせた。リュ・チストンムも拳銃で奴等を一一人狙いながら真正面に撃ち倒した。

このためどうも猛に襲いかかってくる敵もそれ以上

近づけずにその場でめくら撃ちばかりした。

「チュンリョルトンム、この隙に山に登りましょう。」と言いながらチストーンムは何としてでも機関銃を保護しなければならぬと言った。

我々はすばやく山頂に登り始めた。

しかし半分ほど登った時彼は「どうも二人が固まっていたのは危険だな。」と言って急に横に突っ走った。

私は彼を止める間もなかった。彼はすでに敵に向かって拳銃を連発撃ちまくりながら灌木の間に入っていた。

私が機関銃を持って無事に身を避けられるように彼はわざと自分の位置を露出させながら敵を別のところに誘導していくのだった。彼の大胆で犠牲的な行動は、集団と同志たちの安全のためにはどんな危険の中にもためらいなく飛び込む、革命戦士にだけ見ることができる高貴な精神の表現だった。

彼の後ろ姿を眺めた私は胸が熱くなった。私が高地に登ってきてトンムたちとともに戦闘準備を整えるまで下の方からは引き続き身のすくむような銃声

が響いてきた。

やがて彼は汗まみれになって高地に登ってきた。

「チストーンム、ご苦労様でした！ けがはありませんか？」

「ご覧の通りびんびんしています。心配をかけてすみませんでした。」と言って彼は豪胆に笑いながら背のうを地面に下ろし、炒つて入れておいたとうもろこしがこぼれていないか調べてみてから再び背のうを担いで初めて安堵の息をついた。

私はチストーンムをもう一度見た。

そして彼の革命の同志をこのうえなく愛する心、どんな困難な環境でも屈せずに戦う不屈の闘志に深く感動させられた。

夜がふけて敵は飢えた狼の群れのように再び高地に這い登ってきた。ゆうに数百名にはなった。

我々は奴等をびたつと接近させておいて集中射撃を浴びせた。敵は麻の茎のように倒れた。これに慌てた奴等はあたふたと下へ押されていた。

敵が退いた隙を突いて我々は雪を積み上げ固めて

陣地を構築し、機関銃をしつかりと据えた。

しばらくのちに奴等は再び這い登ってきた。今度は高地の正面と左右の側から這い登りながら機関銃を十字型に乱射してきた。そのために我々は頭も上げられなかった。左側からかかってきた敵はいつのまにか我々の目の前に現れた。危険な瞬間だった。チストンムはすばやく身を起こして手榴弾を投げた。敵は群れになって倒れた。

しかしその瞬間チストンムはそのまま敵弾に当たって重傷を負った。

私は隊員の一人のトンムに彼をすぐに後送させようとした。しかし彼は言うことを聞かなかった。

「私はまだ戦うことができます。私のために他のトンムまで戦闘の場から離れさせてはいけません：あれをご覧なさい。敵があんなにたくさん這い登ってくるじゃないですか！」と言って彼は歯を食いしばって拳銃で奴等を狙って撃つのだった。

我々は火のような敵愾心を抱いて奴等に復讐の命
中弾を浴びせた。

敵は執拗に這い登ってきた。戦闘は一層苛烈になった。

時間が経つにつれてチストンムの顔はだんだん蒼白になった。我々は何度も彼を後送させようとした。そのたびに彼は「こんな時にどこへ行けと言うのですか。」と言いながら必死にトンムたちの手を振り払いながら、積み上げた雪の上に這い上がって敵に引き続き射撃をした。

奴等が我々の頑強な抵抗に勝てずに再び山の下に押されていき始めた時だった。

チストンムは敵に向かって銃で狙いをつけたまま急に雪の上に頭をばたつと落とした。

「チストンム！ チストンム！ しつかりしろ。」と言って横にいた隊員が彼を抱きかかえて肩から背のうを下ろした。

彼は重傷を負いながらも、トンムたちのためにとうもろこしを炒って入れた背のうを下ろさなかったのである。

戦友の懷に抱かれた彼はやっと目を開けた。そし

て口の中で「背のう…背のうを…」と繰り返した。

私は「背のうはここにありません。」と言って彼の手に背のうを握らせてやった。

彼はその時やつと安心したようにうなずきながらぼつりぼつりと「革命のために最後まで戦うことができないのが残念です…。しかし私は我々がきつと勝利するということを固く信じます。この背のうをトムンたちに…。彼は言葉尻を結べずにそのまま目を閉じてしまった。

「チストンム！ チストンム！」。

我々は彼の体を抱きかかえて揺すりながら何度も声を詰まらせて呼んだ。しかし一度閉じた目を彼は再び開けることができなかった。

革命の道を頑強に、長い歳月を一日のごとくに戦ってきた、困難で骨の折れることに真つ先に取り組むすべを知った彼の高貴な品性、自己の高貴な生命を捧げる最後の瞬間まで革命の同志たちのことを思った彼の崇高な同志愛を、どうして数語の言葉で表現し尽くすことができようか！

リュ・チストンムの壮烈な最後は我々の胸の中に何倍もの強い闘争の炎を燃え上がらせた。

我々は再び襲いかかってくる敵に火雷を浴びせながら怒れる獅子のように奴等に真つ向から向かっていき、肉薄戦でぶつ倒した。我々の復讐戦に恐れをなした敵は、再び高地に這い登ろうとはしなかった。こうして我々は数十倍を超える敵に殲滅的打撃を与え、その日の夜遅く本部隊と会うことができた。

我々は部隊長同志にその間の経過とリュ・チストンムの英雄的な闘争について報告した。そして彼が最後の瞬間まで自己の任務を忘れずに大事に持っていた大きな背のうを前に差し出した。

背のうの中に入っていた炒ったとうもろこしはチストンムの言葉通りにすぐに隊員たちに一様に分配された。

部隊長トムンはトムンたちの前でこのように厳粛に言った。

「トムンたちが受け取ったとうもろこしの一粒一粒をただの炒ったとうもろこしの粒だと考えてはな

らない。そのとうもろこしの一粒一粒にはチストンムの高貴な革命的同志愛の精神が込められていると
いうことを忘れてはならない。

我々はチストンムが残した崇高な精神を腹に入れ
我々の血と肉にして彼の仇を討たなければならない」。

一握りずつ受け取った我々の手は震え、のどがつか
えてすぐに口に入れることはできなかった。

我々はチストンムの意志を受け継ぎ、彼が果たせ
なかつた願いを自己の全てを捧げて実現しようと思
うと固く誓った。そうして部隊はその後ソ満国境にあ
る日帝警備線の後方に続けて打撃を加えながら、ウ
スリー江のほとりに勝利の赤旗を高くひるがえして
前進した。

その時から二十余年という年月が流れた。しかし
今でも私はリュ・チストンムの顔が目の前にはつき
りと浮かび、彼とともに戦った苦難の日々がありあ
りと思ひ浮かぶ。

そのたびに私は革命のために自己の全てを捧げて
戦った彼の高貴な革命精神を胸の中に深くしまい、

自分が引き受けた革命の任務を遂行するために最後
まで身を捧げて闘おうという覚悟を一層固めるので
ある。

5 パルチザンの英雄キム・ゼントナム

オ・ヂヌ

キム・イルソン同志の領導下の抗日武装闘争時期を回想するたびに私はその時期にいつしよに戦った数多くの戦友たちのことを考える。

その中でも私と同じ小隊にいて敵との戦いで英雄性をあます所なく發揮したキム・ゼントナムの姿は、今でも目の前に鮮やかに浮かんでくる。

キム・ゼントナムは遊撃隊に入隊する前にニヨンアン県ノフンリヨンの谷間にあるソレという地方で育った。

ソレ地方というのは元々ここで権勢を張つて農民を搾取し苦しめていたソレという者の名前から呼ばれるようになった地名である。

キム・ゼントナムもこの地方でソレからあらゆる蔑視と冷たい仕打ちを受けながら生きてきた。

革命の炎がこの地方を覆うようになってだんだん

目覚め始めた彼は、一九三五年春にキム・イルソン同志が親率されたウアンチョン遊撃隊に入隊した。

それまであばら家暮らしの苦しい生活で勉強することができなくて世の中わけも分からずに育ってきた彼は、新たな生活の道に入った。

キム・ゼントナムは力、ナ、タ、ラ（ハングル文字）から革命とは何であるかを理解するに至るまで、キム・イルソン同志の直接的で親近な指導を受けた。キム・ゼントナムは艱苦な戦いの日々、食糧がなくなつて腹をすかせる時が多くても、ただ「革命の良識」——マルクスレーニン主義の理論を習得するのを忘れたことは一日もなかった。

キム・イルソン同志が与えた「革命の良識」——それはまさに我々の血肉となり、敵との戦いにおいて無比の勇敢性と大胆性と優れた智恵の源泉となつ

た。

そのためキム・イルソン同志の懐で教育され育成された全ての隊員たちは革命の勝利を固く確信し、その道において指揮部の命令ならば水火も辞さなかつた。

まさにキム・ゼントンムもそうだった。彼の熱烈な革命家的気質と高尚な品性についてここで一つ一つ全てを話すことはできない。

しかし私はどうしても一つ、この世の人たちとそして我々の後孫たちに伝えたい彼の輝かしい偉勳について話さなければならぬ。

一九三九年八月二十三日アンド県テサハ戦闘の時にあつたことである。

戦闘が始される前に我々全ての隊員は指揮部からテサハ戦闘が持つ意義について詳しく伝達された。

この時我が軍の部隊は戦闘計画においてまずテサハ部落にいる敵を包囲攻撃することによつて、ミンウォルグとアンドにいる敵が応援に来るように誘引してすっかりせん滅することを予見した。

戦闘命令を受けた我が隊員たちは抜かりなく戦闘準備を整えて目的地に行った。

部隊は夜が明ける前にテサハ部落を首尾よく包囲した。

そうして明け方に城内の人民が水を汲みに出てきたらその機会を利用して私服の隊員たちが水桶を担ぐしよいごを代わつて担いで城内に入り、警察署と砲台を占領すると同時に基本部隊の力量が一斉に攻撃することにした。

ところが夜が明ける少し前に城門の中から日本の奴が一人外に出てきて我々を発見し、びつくりして中へ駆け込もうとした。

こうしてにわかに緊急の事態が生じた。指揮部では埋伏していた隊員たちに攻撃命令を下した。

命令が下りるや待つていた隊員たちは疾風のよう

に城内に飛び込んでいきながら射撃を開始した。魂が飛び散るほど驚いた敵はどうしてよいか分からずに慌てふためいた。しかししばらく後に奴らは砲台に依拠して猛烈な機関銃射撃をしてきた。

我々は戦闘を速決するためにまず敵の砲台を占領しなければならなかった。ところが機関銃の火力が余りに強くて正面から入るのは難しかった。この時先頭で入っていった隊員たちは、砲台の横の方にある大きな地主の家に入り、壁に穴をあけて砲台に接近した。そしてすばやく手榴弾を続けて投げた。

しかししばらく煙の中に沈んでいた呪わしい砲台は再びよみがえって一層猛烈に火を噴いた。銃弾が雨のように飛んできて頭も上げられない状態だった。緊張した瞬間が流れた。

我が部隊はテサハの敵を早く消滅して即座にソサハの峠に走って埋伏し、アンドの方から駆けつけてくる敵の応援部隊をせん滅しなければならなかった。そのため時間が遅れば遅れるほど状況は我々に不利になるのだった。

戦闘における時間性——これはこの戦闘の勝敗を左右する重要な条件の一つだった。

我が軍の指揮部では緊迫した瞬間に対処して敵の砲台を占領する決死隊を組織することにした。

隊員たちは各自先を争って進み出た。決死隊には四中隊長チェ・ドウソク同志を始めとする数名の隊員が選抜された。

この時キム・ゼントナムは私と一緒にこれに参加するようになった。

この荣誉ある任務を必ず完遂しようという決意に充ちた同志たちの顔には悲壮な覚悟が漂い、目からは炎がめらめらと燃え上がった。

チェ・ドウソク中隊長を先頭にした我々決死隊員は皆手榴弾を抱えて敵の砲台に向かって這い始めた。

弾は連発我々の耳元をかすめて前後にぶすぶすと突き刺さった。それでも我々は沈着に腕と足にさらに力をこめて這い進んだ。

砲台までわずか三十メートルしか残らなかった。敵の火口をにらみつけていたチェ・ドウソク中隊長は、真つ先に手榴弾を引き抜いて持ち、さらに一步近寄った。

ところが手榴弾を握った彼の手が急にふるふる震えた。

——あつ！ 中隊長トナムが……—という不吉な予感が私の頭をかすめた。

私とキム・ズントナムは彼の代わりをしようと彼のそばにすばやく近寄った。

しかしこの時彼は再びある限りの力を尽くして手に持った手榴弾を敵の火口に投げた。手榴弾は火口の入り口で破裂してしまった。

敵の火口は依然として生きていた。

誰かが再び手榴弾を投げた。それでも砲台は破壊されなかった。

我々はすばやく肩を負傷した中隊長トナムを後送り、位置を替えて今度は機関銃を敵の火口に向けて射撃した。しかし元々堅固に設置された砲台で、それでも効果が見られなかった。

時間が経つほど事態は一層危急になった。

突撃路が開拓されるのを今か今かと待っている戦友たちのことを思う我々の胸は限りなく締め付けられた。

一時的に我が軍の攻撃が阻止されるや、敵はさら

に猛烈な射撃を加えてきた。

ちょうどこの時敵の火口をにらんでいたキム・ズントナムは私に顔を向けた。

彼の眉毛は逆立ち、唇には痙攣が起こった。

彼は、「小隊長トナム、頼みます。」という一言を残すと、矢のように敵の砲台に向かって這い始めた。

キム・ズントナムの意図を悟った我々は、敵の視線が彼に向かないように誘導射撃を開始した。

敵は我々の方に向かって狂ったように機関銃弾を浴びせた。その間にキム・ズントナムは弾雨の中を

くぐり抜けて砲台の近くに這い寄った。もう数歩進めば敵弾が及ばない死界内に入ることができた。

ちょうどその時だった。

彼が砲台のすぐそばまで近づいているのを発見した敵は慌ててキム・ズントナムに火力を向けた。敵弾があられのように降り注いだ。

右手で手榴弾を取り出そうとしたキム・ズントナムは急に頭を地面に伏せた。

彼を注視していた我々は、敵に対する憎悪で目か

ら火が起こるようだった。

しばらく後に彼は再び頭を持ち上げた。彼は数歩這つていき、手榴弾を取り出して砲台に投げた。

しかし火口からは一層狂暴に火が吹き出した。

瞬間キム・ズントナムはうなじを回して後ろにいる戦友たちを振り返った。そして我々に何か叫んだ。我々は彼の言葉を聞き取ることはできなかったが、彼が何を言おうとしているのか推察することができた。

キム・イルソン同志の教えを受け、鋼鉄の意志で鍛練され、革命の利益を自分の命よりも貴重に思う彼が選んだ最後の決心は、自分の体で敵の火口をふさごうということだった。

キム・ズントナムは再びうなじを回して敵の火口をにらみつけてから体をぱつと起こした。

彼を見た我々の胸は火のように熱くなった。

瞬間彼は火を噴く火口の前に稲妻のように駆け寄った。

「クァルン…」。

地心を揺すぶる爆音とともに、憎らしく吠え立てていた敵の機関銃はくちばしをつぐんだ。赤黒い煙は砲台を呑み込んでしまった。

続いてラツパの音とともに我々は「キム・ズントナムの仇を討とう！ 突撃！」と叫びながら潮が満ちるように攻撃していった。

最後の突撃戦に入った我が軍の喚声、機関銃の音、炸裂する手榴弾のけたたましい爆音、四方で倒れる敵の悲鳴、これら全てが今にもテサハ部落をひっくり返してしまうようだった。我々は瞬く間に敵の警察署と兵舎を占領した。

一方戦友たちはキム・ズントナムのところへ走っていつて彼を抱きかかえた。

数十発の弾が胸を貫いていたが、まだ彼の心臓は鼓動していた。

戦友たちは胸を締め付けられながら切なく彼を揺さぶった。

「キム・ズントナム！ あの声を聞いてくれ。勝利のあの喚声を。」

意識がもうろうとなつた彼からは何の反応もなかつた。

天地を振動させる戦友たちの万歳の声が再び聞こえてきた。その声にかすかに気を取り戻した彼はやつと目を開けた。そして自分を取り囲んだ戦友たちの顔を見回しながらやつと口を開いた。

「トムたち……トムたちといつしよに……敵ともう戦えないのをゆるしてください……革命が勝利するまで立派に戦ってください……」。

最後の言葉を残した彼は静かに目を閉じた。

ただ革命の勝利のために二つとない高貴な生命をためらいなく捧げて勇敢に戦つた戦友の前に我々はこうべを垂れた。

キム・ズントノムの壮烈な最後は我々皆の胸を敵撃滅の強い炎で燃え上がらせた。

テサハ戦闘に続いて我々はデザヤンガン集団部落にいた敵をすつかり掃蕩し、アンドとミヨンウォルグから来た敵の応援部隊に対する一大せん滅戦を展開して奴らに決定的な打撃を与えた。

キム・イルソン同志の懐で育ち、革命の道で自己の貴重な全てのものを捧げて英雄的に戦つた、祖国と人民の真の息子キム・ズントノムは今日我々のそばにいない。しかし彼の高貴な革命精神は我々の心臓の中に、沸き立つ血脈の中にそのまま脈打っており、まさにそれが今日数多くの新たなヘキム・ズンソを生んだのである。

美〔アメリカ〕帝の武力侵犯に反対して祖国を血で守るための苛烈な戦いにおいて青春の赤い心臓で敵の火口をふさいだ数え切れないほど多くのヘキム・ズンソを！

我が人民の今日の幸福とより輝かしい明日のために命を捧げた英雄たちの高貴な革命精神は、今日我が党とキム・イルソン同志の呼びかけにしたがつて、社会主義の高い峰に向かって、共産主義の光明の未来に向かって力強く進軍する千里馬騎手たちの心臓の中に一層力強く脈打っているのであり、彼らの高貴な革命精神は永遠不滅なのである。

6 不屈の闘士

リム・チュンチュ

一九三八年十一月モンガン県ナムベヂャ会議があった直後のことである。

キム・イルソン同志の戦略的方針に従って司令部管下の各部隊は新たな闘争の道に進んだ。

警衛旅団の連隊長リ・ドンハク同志は約三百名の隊員たちと指揮員たちを率いて出発した。

確固とした勝利の信念を持って険山峻嶺を越えて強行軍を続けた彼らが、フアヂョン県リュスハヂャ付近の密林で宿営するようになったのは、行軍開始から数日後の十一月三十日だった。

隊員たちと指揮員たちは皆動員されて深い雪をかき出して臨時に宿営する場所を用意してからテントを張った。しばらく後にテントの中には火が焚かれ、隊員たちは長い行軍の疲れをほぐし始めた。武器の掃除も終え、とうもろこしの煮たのをおいしく食べ

ながら夕食を終えてから一晩ぐつすり休もうとした時、偵察小隊から急に敵情を知らせてきた。

わが軍が駐屯しているところから約一里半の地点で千五百余名の敵の大部隊が宿営準備をしているということだった。そして奴らは我が軍の行動の跡を探知するために山地の四方に散らばって回っている。「精鋭」の機動部隊だということだった。

もしもそのまま夜が明ければ敵の大部隊の正面攻撃を受けるようになるだろうし、そうかといってあらかじめ敵を避けようとして、何日もの強行軍で疲れた隊員たちを引きずって再び行軍を継続するのも困難なことだった。

キム・イルソン同志が自ら育成した有能な指揮官の一人であるリ・ドンハク連隊長は、常にキム・イルソン同志の教えに忠実だったので、この日も危急

な事態を迅速に解決するばかりでなく、むしろ敵に殲滅的打撃を与えることができる巧みな戦術を考え出した。

リ・ドンハク連隊長は敵を不意に奇襲して敵の主導権を喪失させ、我が軍が主導権を掌握することによつて敵を束手無策「どうしようもなくて手をこまねくこと」にしてから殲滅してしまうことにした。

彼が不意の夜襲によつて敵に対して先手を打とうと考えるようになったのも、寒くて暗い夜に険しい地形地物をうまく利用してひそかに敵の中に入つて奴らの隊伍を混乱させた後、敵同士を互いに戦わせたキム・イルソン同志の卓越した戦術を学んでいたからだった。

彼はまず敏捷で大胆なマ・ヂヌトナムなど二十余名の隊員を選抜して軽機関銃とその他軽便な武装を携帯した二個の襲撃班を組織し、残りの隊員たちにはそこで休息を続けさせた。

連隊長は奇襲班を引率して自身が直接敵陣深く突入した。

このような我が軍の襲撃班の行動を敵は知るはずもなかった。

暗くて寒い夜で、深い谷間のうっそうとした樹林の中である上に、衣服と武装まで敵のものと同じに装ったばかりでなく、あまりにも泰然と歩いて入つていったので、敵の歩哨は軍号さえ訊かなかつた。

しばらく後に敵の指揮部の近くに至つた我が軍の襲撃班員たちは、瞬く間に有利な地形を選んで機関銃と歩銃で、各所に広がっている敵の宿営場所と指揮部のテントなどに猛烈な分胆射撃を浴びせた。

不意の攻撃を受けた敵は、我が軍が陣中にいるとは知らずに急いで宿営地の外に飛び出すと、射撃方向も定めず無秩序に乱射した。

敵は悲鳴を挙げながら群れになつて倒れ、しまいには敵味方を区別できずにあちこちに走りながら自分たち同士で銃を撃ち合うなど大混乱を起こした。

このような中で機関銃、歩銃を持った数十名の敵兵が、我が軍の襲撃班員たちが埋伏している地点に飛び出してきた。

射撃を止めて敵の動静を探っていたマ・ヂヌトムが連隊長に知らせながら軽機を構えた。

「もうちよつと待ちなさい。：奴らは我々を発見したわけではない。適当な掩蔽（えんぺい）。敵の砲弾を防ぐ」場所を探そうと飛び回っているようだ。

もうちよつと接近させてから撃ち倒せば武器も簡単にろ獲できるだろう。：」

その間に敵はさらに近づいてきた。マ・ヂヌトムは沈着に敵を狙いながら命令を待った。

かなり離れている焚き火の光で奴らの顔が現れるようになるや、連隊長は射撃命令を下した。時を逃さずにマ・ヂヌトムたちは猛烈な射撃で瞬く間に敵数十名を撃ち倒した。そして軽機関銃二丁を始めとする多くの武器をろ獲した。

しばらくの間このように戦いながら敵を混乱に陥れて同士討ちをさせた我が軍の襲撃班員たちは、時間になったので適時に退却して、あらかじめ定めてある予備の集合地点に到着した。

我が軍が退却した後にも敵はそのまま長時間自分

たち同士の戦いを止めなかった。夜が明けるときにやっと奴らは互いの撃ち合いを止めて、負傷者と死体を引きずって急いで逃亡してしまった。

そしてその日（十二月一日）朝九時ごろに敵の飛行機二機が飛んできて我が軍の方向に狂ったように低空射撃を加えた。しかしこのときパク・ソン Chol、キム・インムク中隊長たちは敵機に対する猛烈な集中射撃を命令した。ここで再び軽機関銃の名射手たちと歩銃狙撃手たちは、発狂的に襲いかかる敵機に対して猛烈な集中射撃を浴びせて敵機一機を撃傷させ、もう一機を撃墜した。撃墜された敵の飛行機は我が軍の上空で片側の翼を撃破されて約二里の地点まで行つて凶悪な機体を地面に突つ込んで燃えてしまった。

ここで進められた一晚と一昼の戦闘で我が軍は飛行機を始めとする敵の戦闘機材に莫大な損失を与えたほか、五百余名の敵を殺傷する戦果を収めた。しかし我々はこの戦闘で惜しくも一名の戦死者と十五名の負傷者を出した。

私は当時地方党工作の任務を引き受けていく途中でこの戦闘に参加するようになった。そしてまず戦闘で負傷した危急な患者たちを治療してやることになった。もちろん私は医師ではなかったが、若い時に漢医术を若干学んだので、医師がいない条件の下で軍医官を兼ねて患者を治療することもあった。

私はこの日重傷者と軽傷者を分けて治療するために、二里の間隔をあけて密営を定めた。密営とはいっても松の密林の中に灌木で作った天幕を張り、その外側に松の枝をかぶせて昼間には敵機に発見されないようにし、夜間には焚き火を焚いて夜が明ける前に消してしまうことよって、敵の目を避ける程度だった。このようなところで私は彼らを治療するようになった。

数日後マ・ヂヌトムも戦闘で重傷を負ってこの病院に入ってくるようになった。

マ・ヂヌトムは左腕にひどい刀傷を負った上に右腕は完全に骨折し、大静脈まで切断されて非常に危篤な状態だったし、また酷い寒さの中で足の指五

本は完全に凍傷にかかっていた。私が彼を訪ねていったとき、彼はひどい苦痛をこらえようと目をぎゅつとつぶって汗を流していた。よく見ると彼の腕と足の指は切断しなければならぬ状態にあった。しかしその場ですぐに手をつけるのは困難だった。私はまず彼に止血と滅菌消毒をするなど外部治療だけしてやると、腕と足の指を切断しなければならぬという言葉は到底口の外に出せなかった。

「何とか切らずに治せられないだろうか?…」
彼のそばを離れながら私はまた考えた。

しかし私はこの考えが無駄なものだとすぐに悔いた。

私は急いで引き返して彼を訪ねていった。そして腕と足の指を切断しなければ生命が危険だということと話した。

実際これだけのことを言うその短い瞬間が私にどれほど苦痛だったか、私は今でも忘れられない。

呻吟の中で私の話を聞いていたマ・ヂヌトムが目をぱつと開けた。

そして静かに口を開いた。

「私が右腕を切つてしまえば死んだ命じゃないですか。」

そう言いながら目を閉じる彼の息づかいは荒くなつた。しばらく後に彼は再び目を開けて話を続けた。

「私が腕を切れば今後機関銃はおろか歩銃も撃てないし、手榴弾も投げる事ができないじゃないですか。日帝強盗の奴らをこれ以上倒せずに私が生きていなければ、それは何の価値がありますか。私は共産主義者なのだから引き続き敵と闘わなければならぬじゃないですか。それなのに私から腕を取つてどうしますか。」

このように彼は問いたですように私に反問するのだった。

「トンムの言うことはもちろん正しいし、革命の闘士らしい言葉です。」と言つて私は彼を説得し始めた。

…トンムの腕はすでに脈搏が切れて腐り始めた。もしもこのままにしておくとな生命が危険だ。それが

分かりながらどうして黙過することができようか。…

革命のために必要な場合には最後の血の一滴までもためらいなく捧げること、これは我々の高尚な革命的義務だ。しかしぶち当たつた環境と目の前にあることを冷静に考えずに、腕一本を惜しんで貴重な生命を失つてしまうということは、誤つたことではないだろうか?! 我々の革命は銃剣と手榴弾で敵を倒すことだけで達成されるものではない。腕がなくてもトンムが今後やらなければならぬことはたくさんある。…トンムの生命はトンム自身にとつても、我が革命のために一層貴重なのだ。…それなのにトンムが自暴自棄になつて命まで捨ててゐるならば、これは共産主義者として我が人民と我が革命の前にどんなに恥ずべきことか。…

私の話を黙つて聞いていた彼は、急に私の膝に頭をこすりつけながらわつと泣き出した。

「自分の命を…そんなにも貴重だというならば、腕を切断しても革命のために闘うことができるというならば…どんな苦痛にも耐えることができます…」

私は彼に興奮しないようにと言い聞かせて手術に着手した。

不完全な手術道具で極度に衰弱した重傷者を手術するということは、負傷者と医師の間に、どんな苦痛と危険も顧みずに生きなければならぬ、救わねばならないという強い精神力と責任感が一致してはやり遂げられないことである。

しかしためらう時ではなかった。私はその場で彼の腕を切断した。手術を終えた後に私は彼の心臓の上に手を載せてみた。

ひどい苦痛をこらえながら口を閉じて横になっていた彼は、初めて目を開けてフウと息をつくとき、若干体を動かすだけで何も言わずに静かに目を閉じるのだった。そして彼は次のように言った。

「苦労様でした。どうぞ体を少し休ませてください。」

この時私はどのように返事をしたのか覚えていない。私は彼の胸から手を離して彼の布団をきちんとかけてやった。

「ありがとう!…」

苦痛を知らないかのように泰然と横になっている彼の顔をうかがいながら私はこのように口の中で言った。実際その時これ以上に適切な言葉を見つけないとはできなかった。

数日後に私は彼の凍傷にかかった足の指五本と左手の指数本をまた切断したが、その時は彼が逆に私を説得する立場だった。

「あまり残念がつてはいけません。私の腕と足が全部なくなつたとしても私は悲観はしないでしよう。もちろん一時的苦痛はつらいし、また今後不自由ではあるでしょうけど、しかし今のように私を世話してくれ、一緒に闘うトンムたちの中で生きるようにさえなるならば、私には何の心配もありません。私がかれまで生き抜いたことを考えると、どうも私は革命の成功を見て、解放された祖国で全ての人民が幸福に生きるのをきつと見るような気がします。もちろん私より何倍も何十倍も厳しい苦痛と死の環境をくぐり抜けてきたトンムたちはたくさんいますが、

私も十三度もへこれでもうおしまいだな〜」と思いつながらもさらに生き延びたのです。その中でも宗派主義者たちの手中に陥り、やっと死の境を脱して革命の隊列で再び戦うようになったことは、本当に一生涯忘れられないでしょう。」と言いつながら、彼は次に次のような話を聞かせてくれた。

一九三三年夏のある日マ・ヂヌトンはいわゆる「民生団員」という反革命分子の嫌疑を受けて逮捕された。

当時東満では一部の宗派分子たちによって反「民生団」闘争が誤って進められるようになった。そして革命の隊伍を内部から瓦解させようとする日帝の離間策動にまんまとひつかかって、一部の堅実な革命の同志たちも「民生団」に加担したという「理由」で謀害、暗殺、拷問を受けた。

今もその時も宗派主義者たちは自分個人の私利私欲のために「革命家」の仮面をかぶって革命を抹殺するのあらゆる手段と悪行を選ばなかった。

マ・ヂヌトンは当時の所感を次のように語った。

「反革命宗派主義者たちは私を根拠もなしに「反革命分子」と規定して逮捕しました。私は悔しくも濡れ衣を着せられて殺害されるのだと思うと、あまりのことにあきれました。しかし私は堂々としていました。いったい私がどのように革命に背反したというのか？ 私は私の良心に差し障ることはなかったし、堅実な我々の同志たちは私を信じてくれるだろうという希望を失いませんでした。

悲観失望して自暴自棄になつてはならない。死んでも革命のために死に、生きても革命のために生きなければならぬし、最後まで断固として闘わなければならぬという自覚と勇気が炎のように起こりました。…」

そこで彼は共産主義者としての革命的気概を最後まで守ることを固く決心した。そして彼は夜になるのを待った。

しかし彼は夜になる前に外に引き出されて山道を歩かされた。

「この時私は何を考えたでしょうか。彼らにその

まま引つ張られていけば、死ぬのが分かりきっていましたが。死ぬのが怖いのではなく、宗派分子たちによつて〈民生団員〉にされてられて死ぬのが悔しかった。私はあらかじめ考えていたとおりに死を顧みずに突つ走りました。どこまでどのようににどれだけ走つたのか分かりません。走つては倒れ、倒れては起き上がりながら山を一つ越えると、すぐに真っ暗になりました。…」

彼は山の中で夜通し深い考えにふけた。

「…いや、私はもう一度遊撃隊に戻らなければならぬ。隊列内に潜入した何名かの害毒分子のために私が遊撃隊から離れたならば、宗派分子たちは本当に私を〈反革命分子〉にしたてるだろう。…今私がかもう一度戻つても彼らはもちろん私を殺そうとするだろう。しかし革命のために立ち上がった身が革命の隊列を離れては生きることができない。死んでももう一度隊伍に戻らなければならない。行つて堂々と私の良心を吐露して闘つてみよう…」

このように考えてその場から立ち上がつて歩き始

めた彼は、「死ぬならばいつそ敵と闘つて銃の一丁でも奪つて革命のために死のう!」という考えが不意に頭に浮かんだ。

彼はその道で山の下にある敵の自衛団室に向かつて駆け下りていった。そして長い苦勞の末にそれからとうとう五連発歩兵銃二丁を奪い、しばらく後にサンドマン遊撃根拠地を再び訪ねてきた。

「もちろん私は遊撃隊に戻つてきても宗派分子たちの手にかかれれば死ぬのは分かりきつたことでした。

…しかしその当時は五連発歩兵銃一丁あれば遊撃隊員たちは日帝の奴らの軽機関銃と互角に渡り合つていた時だったので、死んでも十分に血の代償を得られるので多少でも遺恨が晴らせると思ひました。…そんな思いで私が戻つてきた時に私は驚きました。宗派分子たちはすでに打撃を受けた後で、この時には心から私を信じ愛してくれていた同志たちが私を抱きしめて泣くのです。〈誰が君を民生団だといつて君を逮捕したんだ〉へとにかく君が帰つてきて我々と会つたんだからうれしいよ! うれしいよ!と言つ

て皆抱き合つて歓声を挙げたそのことを私は忘れることができません。私が革命の同志たちを再び訪ねてこなかったならば、私はどうなっていたでしょう?」

このように千辛万苦を味わったマ・ヂヌトンは、その後キム・イルソン同志の領率下にあつた警衛連隊の機関銃手となり、小隊長となり、キム・イルソン同志と全てのトナムたちのこの上ない愛情を受けた優秀な指揮官に育つた。彼はソタンハ戦闘を始めとするたくさんの戦闘で軽機の名射手として偉勳をどどろかせ、リュスハヂャ戦闘に至るまでおよそ数百名の敵を殺傷し、敵機を撃墜したトナムだった。

彼は手術後にもよく次のような話をした。

「私がたとえ片腕を切断し、足の指と手の指数本を失つたからといって、私は生きて革命を続けて革命の勝利を見るだろうと思うとうれしい。そして本当に私を愛してくれる同志たちの中にいるのだと思うと幸福です。…」

こんな話を聞きながら彼の片腕を見る私の目頭は

熱くなつた。

その上悪いことに薬もなく、糧食も解決できないので、彼に接するのにいつそう胸が痛んだ。とうもろこしの何粒かずつでやつと食事を続けながら三ヶ月間治療を受けた彼は、やつと歩くことができるようになった。

私は彼を連れて約一里余り離れたところに移動して、ほかの患者たちと一緒に過ごした。そして私がそこを出発する準備をしている時だった。

深い密林の中のひなたには冬の間中かぶっていた雪が解け落ちておにぐるみ「くるみ科の落葉高木」の芽が吹き始めた。そんなある日の九時ごろに敵討伐隊二百余名が我々の野戦病院であるこの密営を不意に襲撃してきた。我々は敵の機関銃射撃を避けながら運良く死境を脱出した。

私は彼を背負おうとしたが、彼は必死に私の手を払いのけながら、ぴよんぴよん前に飛んで樹林の中を抜けていくのだった。そして我々がその日の夜ある山の中で夜を明かすようになった時に、彼は私に

こんなことを言った。

「朝鮮では花が満開でしょうね！」

「そうだな！　ここよりずっと暖かいし花や木も多いだろう。…」

このように言った私はすぐにのどが詰まった。このように天真爛漫で純朴なトム！　傷ついた体で敵の不意の襲撃を受けたのに少しもあわてず、今ではどうもろこしさえも食べられないのに、あらゆる困境と飢えに打ち勝ちながら祖国の春を恋し たっている革命の同志に対して、私にそれ以上何を話すことができよう！

——革命闘争の過程でどんな難関と困境の中に陥っても悲観失望せずに楽天的に最後まで闘わなければならない。日本帝国主義強盗どもを打倒するまで健全な思想と火のような闘志で闘わなければならない。——

これこそがマ・ヂヌトムの考えであり、行動の指針だった。

彼はたった今咲いた花のように若くて壮健な体格

の持ち主からひどい不具者になったが、その後も依然として同志たちの前で常に快活だったし、自分の力の及ぶことならば率先して同志たちを助けてやった。そして彼はそれまで以上に学習に熱中した。左手で字を上手に書いた彼の姿が今でも私の目にはつきりと浮かんでくる。

7 労働者階級の息子

キム・チャリン

今日チョンリマ（千里馬）の勢いで突き進んでいる我が国の労働者階級の英雄的気質は私に大きな感激を呼び起こす。この感激が大きければ大きいほど私の目の前には共産主義のために最後まで戦って犠牲になったたくさんの方々の姿が浮かんでくる。彼らは皆キム・イルソン同志の忠実な戦士であり、熱烈な愛国者だった。その中から私は同じ部隊で戦った〈鉸山〉トンムについて話をしようと思う。

それは一九三六年初めにあったことである。

当時私が属していた朝鮮人民革命軍第四師一連隊はアンド県リュスチョンから北方に十里ほどへだたっているファジョン県ミホンデン密営に臨時に駐屯していた。そんなある日キム・イルソン同志は部隊を引率してナムドウからムソン、チャンベク地区に進出する途中でここに立ち寄られた。この時キム・イ

ルソン同志はチェ・ヒョン同志に第四師部隊は主にアンド、トンファ、ファジョン県などで活動するようにと指示された。

そこでチェ・ヒョン同志が直接指揮する第一連隊はまずアンド方面に進出するようになった。

ちようどこのような時期にミホンデンから二里ほど離れたオロホチョンの組織大衆の中の一人が情報を持って我々を訪ねてきた。

情報の内容はこうだった。

アンド県リュスチョンには偽満軍オ・ヨンジャン部隊一個小隊の兵力（五十名）が巢食っているが、奴らはオ・ヨンジャン部隊の中でも中核だと自任する悪質分子たちだった。

奴らはリュスチョンで住民の財産を手当たり次第に略奪していた。

村には鶏の種さえ尽きてしまった。さらにはオ・ヨンチャン部隊の奴らは、村のある家でやつとヒエの飯をいくら作って婚礼を挙げるところへ乗り込んできて、ありもしない酒や肉を出せと言いがかりをつけた。そしてしまいには新郎新婦の部屋に押し入って結婚初日の布団を奪っていった。これに激憤した新郎は偽満軍の小隊長に抵抗した。しかし新郎は銃剣を振りまわす奴らにひどく殴られて営倉に監禁された。新婦と部落の人たちは敵の兵営に押しかけて新郎を出せと言った。奴らは銃剣で村の人たちを脅し、新婦まで兵舎に引きずり込んであらゆる乱暴を働いた。妻のけたたましい悲鳴を営倉の中で聞いた新郎はそれ以上我慢できずに入り口を叩き壊して飛び出そうとした。すると奴らは根拠もなく〈不穩思想〉を持つていると言って新郎を無惨に射殺した。

恨み骨髓に染み込んだリュスチヨンの人々は、オ口ホチヨンの組織大衆を通じてこの仇を討つてくれと我が部隊に人を送るようになった。

アンド方面に出征する計画だった我が一連隊はちょうどこの情報に接し、一部の力量を動員してまずアンド県リュスチヨンの敵を掃蕩することを計画した。戦闘の目的はリュスチヨンの人々の千秋の恨みを晴らしてやりながらその一帯で遊撃活動を自由に行い、地方組織大衆との活動も活発に展開できるようにしようということにあった。

リュスチヨン襲撃部隊はある日の晩ミホンデン密営を出発した。

月が明るくて大きな道を歩くことができなかつた我々は、ずつと険しい山道の雪の中をかきわけながら二日間行軍した。雪は腰まで埋めた。顔に叩きつける激しい吹雪のために前を見分けることができなかつた。

ところがその時私は足の裏に腫れ物ができた。行軍が続くにつれて足はひどく痛んだ。私は戦友たちに負担をかけまいと一人我慢して歩いた。しかしそんな努力にもかかわらずとうとう私の分隊長である〈鉱山〉トンムに見つかってしまった。

彼は行軍の隊列から私を引つ張り出して道の脇に座るところを作り、座るように言った。〈鉦山〉トナムは分厚い手で私の両足をさすると、痛いところをぎゅっと押さえた。私は体がぞくぞくとして思わず彼の手をつかんだ。

しかし彼はお構いなしに私の足の脚絆をほどき、地下足袋をぞんざいに脱がせた。そして月の明かりにぼんやりと見える腫れ物をのぞき見ると、

「君、もつと早く言わなくちゃ！」と叱るように言つて内ポケットから阿片を取り出して腫れたところにつけてくれた。私がいくら止めても、腫れたところを冷やしてはいけないと言いながら彼は自分のパルツァゲ〔履物を履く時に足が入りやすいように素足を包む布切れ〕を裂いて巻いてくれた。そして私の肩から背のうと武器を奪つて担ぐと、私の片方の脇を抱えてさつさと歩き出した。

私は胸に何か熱いものが込み上げてくるのを感じた。

肉親以上に熱い同志の愛情に鼓舞された私は、骨

をえぐるような激しい吹雪と寒さも、ずきずきする足の痛みも忘れてしまつて行軍を続けた。

実際〈鉦山〉トナムは人が苦勞している時にはいつも自分のことのように助けてくれ、何事にも主体的に勤勉に取り組んだ。彼はあらゆることに熱心だったし、仕事を探して回りながら片付けていく性格で、最も困難な仕事を引き受けるほど満足そうにした。それで戦友たちは彼を信頼し尊敬したし、何かことが生じれば〈鉦山〉トナム！ 〈鉦山〉トナム！と彼を呼ぶのだった。

元々〈鉦山〉トナムは一九三四年までヨンギル県パルトグ鉦山で辛い労働をしていた。

日帝の監督の奴らは食べるものも食べられずによりよるする労働者を見さえすれば狂犬のように飛びかかつて容赦なく鞭打った。

遊撃隊の影響が深く浸透したパルトグ鉦山の労働者たちはそれ以上我慢できずに罷業を起こし始めた。そんなある日（一九三四年）〈鉦山〉トナムは坑道の中で掘進作業をしているうちに、一人の労働者に

乱暴を働く日本の監督を激憤に震える拳で殴り殺してその足でヨンギル遊撃隊に入隊したのだった。

そこで戦友たちは彼を〈鉦山〉トナムと呼ぶようになったのだが、その別号の中には鉦山から来たという意味もあつたが、それよりも彼を尊敬し愛する意味のほうが強かつた。

我々が目的地のリュスチョンから一里ほど離れた一軒家に到着したのは一月十三日の夜の十時ごろだった。

ここで我々は部隊の戦闘計画に従つて行動を開始した。

テサハ、プルホ、テヂョンヂャの三方向に防遮隊が進み、リュスチョンの敵を掃蕩する四個の襲撃班が組織された。

そして戦闘が部落の近くで進められるので、人民を落ち着かせ、彼らに宣伝煽動活動を行う政治工作隊も組織された。戦闘後の集結場所は出発地点の一軒家に定めた。

敵の兵舎はリュスチョン部落の片隅にあつたが、

兵舎は土城で囲まれていて、土城の周囲には一・五メートルの深さの溝が掘られていた。土城の東西の両端には二段火口を持った砲台が突き出っていて、城門は北側にあつた。

〈鉦山〉トナムが責任を負つた我が襲撃班は西側の砲台を占領する任務を引き受け、ほかの三班は東側の砲台と城門、そして兵舎などを引き受けた。兵舎の敵が行動を開始する前に二個の砲台をまず掌握することが何よりも重要だった。

襲撃班が出発する少し前だった。

〈鉦山〉トナムは自分の襲撃班員たちを一軒家の近くにあつた大きな松の木の下に集めてこのように言った。

「敵は無慈悲に叩きのめさなければなりません。血には血でもって報いなければなりません。トナムたち！ リュスチョンの人々のあの恨みを見事に晴らしてやりましょう。…分かりましたね。…」

ぼつりぼつりと話す彼の言葉一言一言から私は抑えきれない力を感じた。

我々がリュスチョンにほとんど着いた時、部落は死んだように静かで、時々つむじ風が吹いて雪の粉を飛ばした。襲撃班員たちはひそかに部落に入った。

〈鉦山〉トナムが責任を負った我が襲撃班員六名が先頭で行動した。我々はすばやく土壁の家々の壁の間を抜けて部落のいちばん端の家に着いた。そこから敵の兵舎までは二十―三十メートルしかなかった。その間は身を隠すところのない平坦な空き地だった。我々は雪の上になうつ伏せて土城と砲台の動静を探った。我々がうつつ伏せた場所から西側の砲台は丸見えだった。それはまるで白い笠をかぶった怪物のようだった。

あれを叩き潰してしまわなければならないと考えた我々六名は、〈鉦山〉トナムの後に従って西側の砲台に向かつてほふく前進した。ほかの襲撃班員たちも自分たちの引き受けた目標に接近していった。我々ではできるだけ音を立てまいと努めながら這った。西側の砲台が目の前に見えた時だった。部落の方で犬が吠えた。

「伏せろっ！」〈鉦山〉トナムが命令した。砲台の方から何かしゃべる声はつきりと聞こえてきた。砲台の敵の歩哨が我々を発見したのに違いなかった。私は緊張した。

瞬間静寂を破る銃声が起こった。敵弾は我々の周囲にぶすぶすと突き刺さった。状況は危急になった。この時〈鉦山〉トナムがぱっと身を起こすと、「前へ！」と言いながら猛虎のように突進した。

我々は〈鉦山〉トナムの後に従って城壁の横に掘設された戦壕の中に飛び込んだ。そしてすぐに砲台の火口めがけて射撃した。しかし銃弾は砲台の火口に命中しなかった。砲台の下から垂直に上へ撃つので命中率が低かった。同様に敵も砲台の下にびたっとくっついた我々に命中させることができなかった。切羽詰った奴らは我々のほかの襲撃班員たちが城壁にそれ以上接近できないように、何もない空き地に向かつて狂ったように射撃をした。

このような頃に城壁の向こうの兵舎の方から呼び笛の音、わいわい騒いで慌てる声が入り混じって聞

こえてきた。

兵舎で寝ていた奴らが目を覚ましたのである。

〈鉦山〉 トナムは戦壕の中につ伏せていた私の脇腹を突つつきながら断固とした語調で言った。

「すぐに爆弾を破裂させる準備をしなさい。」そして彼は私の返事も待たずに弾雨の中をくぐり抜けて部落の方に消えた。

彼の意図を察した私は、ヨンギル爆弾の束を取りだし、導火線に火を付ける準備をした。やがて雪を全身にかぶった〈鉦山〉 トナムがころがるように戦壕に飛びこんできた。彼は村のある家から鋏を持って飛んできたのだった。彼は急な瞬間にも一度にっこり笑って見せてから息付くまもなくその鋏で砲台の下に穴を掘った。そして「よし！」と叫んだ。

導火線に火を付けた私は、砲台の下に穴に爆弾を放りこんですばやく戦壕に飛びこんだ。

真つ赤な火の筋が蛇のように尾を振ると、続いてものすごい爆音が起こった。砲台の真ん中が内側へばざつと崩れ落ちた。すると我が軍の襲撃班員たち

が城壁に殺到した。〈鉦山〉 トナムはほかの襲撃班員たちに東側の砲台の襲撃班を支援せよと命令し、私と一緒に崩れた砲台を飛び越えて城内に突入した。

西側の砲台の火口は口を閉じたが、城内の兵舎に入っていた悪党どもは、壁や扉、煙突に隠れてがむしやらに銃を撃っていた。我々は薪を積み上げたところにも身を隠した。ところが二人の悪党が我々のいる方へ駆け寄ってくるではないか！

〈鉦山〉 トナムは別に狙った様子もなく続けて二発撃った。そいつらはまるで弾をつかむように胸を押しえて二、三步蟹歩きをすると、ぶざまにひっくり返った。

すると兵舎の方の火力が我々のいる薪の山に集中した。

私は銃を撃つ奴らの群れの中にヨンギル爆弾を投げた。爆弾は空中でウインという音を立てながら飛んでいった。今度は〈鉦山〉 トナムが投げた。「クアルルン！……」あちこちで倒れる奴らの悲鳴が聞こえた。

生き残った奴らは（二十余名）うわつと声を挙げながら最後に残った東側の砲台に殺到していった。

東側の砲台はまだ奴らの手に握られていた。高さ七メートルもあるこの砲台には二段に火口が突き出ていたが、火口は四方を撃ちやすいように横に長く開いていた。その火口からは敵の機関銃の火力と歩銃の火力があられのように弾を噴き出した。

これを制圧しなくては敵を消滅することはできなくなつた。薪の山からそれをにらみつけていた〈鉦山〉トナムは私に目配せをして、体をくるつと向けて壊れた塀を飛び越えて城の外へ出ていった。城の中からその砲台に接近することができなかつたからである。城の外の我々の襲撃班員たちは熾烈な火力戦を展開していた。しかし砲台の敵の火力が余りに強かつたので、頭を上げることさえできなかつた。そこから砲台の火口まではわずか三十メートル余りしかなかった。しかし我々はただの一步も前へ進むことができなかった。

奴らは高いところから撃ち下ろしているので、我々

は対抗射撃をするのに非常に不利だったし、まして敵の機関銃の火力を克服できるはずがなかった。息の詰まるような瞬間はどんどん流れた。

前で誰かが上半身を起すと、砲台に向かって爆弾を投げた。しかし二重の壁で厚く築かれた砲台はしばらく爆煙に包まれた後に再びその呪わしい姿を現して吠えたてた。けたたましい銃声は鼓膜を破るようだった。そして敵弾が炸裂するために雪の粉と石の粉が激しく顔に当たった。再び焦燥の瞬間が流れた。

このような時戦壕の中にうつ伏せて連発銃を撃っていた我々の勇士たちのうちの誰かが爆弾を握って砲台の火口の下に矢のように走っていくのが見えた。しかし彼は火口の下に着かないうちに雨のように降り注ぐ敵弾に当たって倒れてしまった。私は目がかつと見開き、血が逆巻くのを感じた。私は余りにも無念で、「トナム……」と叫んで戦壕の上にながろうとした。この時私の横で敵の火口をにらみつけていた〈鉦山〉トナムがぱつと身を起こし、戦壕の上にな

がる私を突き落として前に突っ走った。彼は激しく降り注ぐ弾雨の中をくぐり抜けて不死鳥のように敵の砲台に突進した。

彼の手には鋏と爆弾が握られていた。

毒蛇のような奴らの砲台の下を掘って爆破してしまおうという積りだった。私は〈鉈山〉トンムの後に従った。ウインウインという銃弾の音が耳元をかすめた。我々はもう数歩で砲台の下にたどり着けるところまで来た。

しかしこの時〈鉈山〉トンムが倒れた。倒れた彼はやつと頭を挙げて腕を前に伸ばしながら再び砲台の下に一寸一寸這っていった。切羽詰った奴らはやたらと手榴弾を投げてあがいた。

〈鉈山〉トンムはそれ以上這って進むことができなかった。私は〈鉈山〉トンムのやろうとしたことを代わりにやろうと彼のところに接近した。しかしその瞬間私も肩に貫通傷を負った。

戦壕の中で息を殺してこの光景を注視していた我々の勇士たちが一斉に「万歳」を声高く叫びながら砲

台に駆け寄ってきた。

〈鉈山〉トンムは頭を挙げて駆け寄ってくる我々の勇士たちを呼んだ。そして最後の力を振り絞って火口をにらみつけながら叫んだ。

「同志たち！ 敵のあの口を…ふさげ…」

呪わしいその口を叩き潰そうと我々は突進した。我々の勇士たちは〈鉈山〉トンムが息を引き取った後にも固く握り締めていたその爆弾と鋏で敵の火点を叩き潰し、憤怒の銃剣で鬼畜のような奴らを突き刺しまくって最後の息の根を止めてしまった。

これは同志の死に対する我々の復讐であり、人民の敵に対する我々の審判だった。

…雷のような喚声が起こった。

爆音、最後のあがきをする敵弾のうなり、倒れる敵の悲鳴―これらが一つに入り混じった。

その中でも我が隊員たちの突撃の声は全ての騒音を押しさえ付けて恨み多いリュスチヨンの夜空を震撼させた。

祖国と人民のために青春も、生命も惜しみなく捧
げた労働者階級の真の息子―（鉦山）トナムの崇高
な犠牲精神と熱火のような革命の闘志、熱烈な愛国
心はいつも我々の心臓の中に生きている。

8 忘れられないカン・ナムソン同志

パク・ヨンスン

キム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争時期にあつたことである。

一九三六年初めのある日、部隊では重要な作戦を前にして、当時兵器修理所の責任を負っていた私に二十個のヨングル爆弾を四日のうちに作るようにという任務を与えた。

これは非常に困難な任務だつた。ほとんど素手で二十個もの爆弾を四日のうちに作り出すというのみに余ることだつたうえに、チョチャンデュのトンナムチャに行つて倒木の林の中に隠しておいた炸弾の材料（材料といつても蠟〔ろう〕、銅の斧、ブリキ、はさみ、爆薬などだつた）をウアンバボヂュまで持ってきてそこにある鍛冶場で作らなければならないのだつた。

私はその時カン・ナムソントンムと一緒に仕事を

するようになった。

ミホンジンを出発した我々は、日が暮れてやつとチョチャンデュのトンナムチャの倒木の林の中までたどり着いた。ここで我々は炸弾の材料を力に余るほどいっぱいかついで引き返した。その日の夜のうちに鍛冶場があるウアンバボヂュまで着くつもりだつた。

しかし何しろ荷物が重いうえに二人とも腹ペコだったので、しつかり歩くことができなかつた。そのうえ折悪しくも私は急に悪寒がして熱が開始めた。私の足はふらついて今にもその場に倒れそうだった。

ナムソントンムもやはり苦しいという言葉を口の外に出しはしなかつたが、疲れているのだけは確かだった。しかし彼は少しも苦しそうな顔色を見せようとせずにかえつて私のために心配するのだった。

彼は私がひどく苦しんでいるのに気づくと、「パクトンム、私がおもしろい話を一つしましょうか。」と言いながらこんな話を打ちあげ始めた。

一九三二年―彼が十七歳になる時のことである。

ある日彼は通信員として連絡に行くようになった。ところが途中で急に敵の追撃を受けるようになった。村の入り口に至って彼は急いで刈り取つたいなむらの中に身を隠した。後を追ってきた奴らは彼を探そうときよるきよるするうちにしまいにはいなむらの中を回りながら銃剣で突き刺し始めた。ところが銃剣がちょうど彼の太ももを突き刺した。ナムソントンはとつさに銃剣を着物のおくみでくるんだ。そしてひどい苦痛を歯を食いしばってこらえながら銃剣に付いた血を着物のおくみでふき取ってしまった。自衛団の奴らはいくら突いてみても銃剣に血一滴つかないのを見るとそのまま行ってしまった。彼はいなむらの中から這い出ると、傷口を縛ってから再び連絡任務を遂行するために出発した。こうして彼はとうとう自分の連絡任務を立派に遂

行したのである。

彼はここまで話し終えると、「まったく奴らはいのししのように愚かだという話ですよ。いつそのしじだつたら捕まえて食べたりもしないでしょうよ。ははは…」と笑いながら疲れをすっかり忘れたように低い声で革命歌謡を歌い始めた。

元気がなくてただ横になりたいばかりだった私にカントンムの話と歌声は大変元気をつけてくれた。

私は彼の歌を聞きながら「まず峠を越えるところまで行こう。」と独り言を何度も繰り返しながら歩いた。そこには我々の側の自衛隊の小屋があったのである。

私の後ろからそのまま歌を歌いながらついてきた彼が急に「おや、この背のうはなんだい。」と声を挙げた。

わけが分からずに私は立ち止まった。するとナムソントンは背のうをはずした。抵抗するまもなく私の背のうを自分の右肩にかけた彼はこそっと笑って見せた。その時やっと私はわけが分かった。私が

苦しそうにしているのに気づいた彼はかねてから私の背のうを奪う方法をじっくりと考えていた様子だった。

背のうを奪い返そうとしたがそれは無駄だった。

我々はこのようにしながらずっと歩いてきた。

前を歩いていたナムソントンムが急に「頂上だ！」

と大きな声で歓声を上げた。

我々は急いで峠を越えた。

ところが我々の期待は外れた。昨日の朝まであった自衛隊の小屋はどこにもなく、その跡には一筋の煙が力なく立ち上っているだけだった。ウエノムの〈討伐〉で燃えてしまったのだった。

我々の心はこころもとないこと限りなかった。ナムソントンムはまだ燃え切っていない焼け跡をかき分けて、やっと燃え残った一握りの粟を拾い出した。

峰を一つ越えて我々はその粟を石でこすって粥を炊いた。石がカリカリと齒に当たり、焦げた臭いがする粥だったが、一日半空腹だった我々にとつてこの粥は格別な味だった。

ところが私は粥の汁を飲んだしばらく後にぶつ倒れてしまった。私は当時はやっていた腸チフスにかかったのである。全身がふるふる震え、のどからは吐き気がしてきた。

「もしもこのまま倒れてしまったら？」と思うと私はとても焦った。

「どんなことがあっても爆弾を作り出さなければならぬ！」という思いが募るや私は齒を食いしばって立ち上がった。私に肩を貸したカン・ナムソントンムは私に勇気を与えようと一歩一歩泳ぐように歩いた。

このようにして我々はやっとウアンバボチュに到着した。

しかし途中で多くの時間を費やしたために我々の前に残された時間はわずか二日半しかなかった。

冬の日はとても短かった。その上二人は疲れに疲れ、私の熱は分ごと時間ごとに上がっていくばかりだった。

「じつと横になって指図だけしてください。仕事

は私がやるから。」と言つてナムソントンムはしきりに私を制止した。しかし私は二人が力を合わせて昼夜働いても終わらせるのが困難なこの重大な任務を前にしてじつと横になっていることは到底できなかった。

ナムソントンムは私の指図どおりにブリキ板を切ったり槌を打つたりするなど骨の折れる仕事を引き受けてやり、私は座つてブリキ缶に爆薬を詰めて組み立てる仕事をした。

ナムソントンムは脂汗を流し、私にあれこれ聞きながら仕事をした。そのうえ自分が作つた付属物を組み立てる私の仕事も極力手伝つてくれた。我々はこのように二日間の昼夜を一睡もせずに働いた。

三日目の明け方におよそ半分を作つた爆薬缶を握つたまま私は氣を失つて倒れた。

そして私はひどい熱にあえぎながら氣を失つたまま数日を過ごした。

あまりの高熱のために氣を失つた私はずっとうわごとを言い始めた。まるで夢の中でさまようように

精神が朦朧となると、いつの間にか私のそばにはやさしい母が現れた。私の手を取つてせつなそうに見下るしながら母は「まあヨンスン！ しつかりなさい。」と言つたのだ。すると私は「お母さん！」とせつなく呼んだ。瞬間氣を取り戻した私は誰かがやつれた手で私の手をぎゅつと握っているのに氣付いた。ナムソントンムだった。「助かつたんですね！」と彼が喜びにあふれて叫んだ時、私は彼の目に感激の涙が浮かんでいるのを見た。ナムソントンムの手が母の手とどこが異なるうか！ 私の胸はいっぱいになった。私はナムソントンムの手を力いっぱい握つた。

この時私は彼の手がはさみ仕事と槌うちで裂けているのを知つた。

「爆弾は!?」と私は目を閉じながらこのように尋ねた。

「心配ありません。爆弾はすでに通信員のトンムに全部渡しました。」

率直に言つて私はその時彼の言葉が信じられなかつ

た。いくら複雑ではないといつてもやはり爆弾を作ろうとすれば一定の熟練と経験がなければならぬのだ。どのように作ったのかと尋ねようとしたが、唇が震えて言葉が出なかった。後に分かったことだが、彼はずっと私のやることを仔細に見ていて、私が気を失った後に自分一人ですつかりやり遂げたのである。

その日から熱が少しずつ下がりはじめた。すると私はしきりに水をほしがった。そんな時彼はいつも沸かした湯を持ってきた。

付近には小川の水もなかった。彼は雪を溶かして水を用意したのでしたが、コップ一杯の水を得るためには、ブリキで作った食器に雪をいっぱい盛って少なくとも十べんは溶かさなければならなかった。その水を再び沸かしてから布でこして持つてくるので、彼は一晩中眠らずに夜を明かすことがしばしばだった。

数日後に我々を訪ねてきた通信員のトムムは私を担架に寝かせて部隊の後方部があるソチャの向こう

のプルホに向かつて出発した。

ハンチョングに来て暖かいオンドル部屋の焚き口の近くに布団を敷いて横になって汗をたっぷりかくと、すぐにも病気が治るかのように体が楽になった。

私はナムソントンムに冷たい水を頼んだ。ところがナムソントンムは依然として湯を沸かして持つてきた。私は懇請してみたり哀願してみたりしてきた。私は懇請してみたり哀願してみたりしたが、頑として聞き入れなかった。やむを得ず私は通信員のトムムにも家の主人にも懇請してみたが、彼らもナムソントンムにどれほど強く念を押されたものか、私の言うことを聞いてくれなかった。

害だということを知りながらも冷たい水があまりにも飲みたくて私は彼に「冷たい水でなければもう飲まない。」とわざと腹を立てると、彼は笑いながら「まだ冷たい水は体に毒です。その代わりに重湯をおあがりなさい。」と言って重湯の器を差し出したのだった。

この日敵が奇襲して来た。

人民の助けを受けて部落を脱出することはできた

が、我々の状態は言いようがないほどひどかった。ひどく寒い日で手と足がかちかちに凍りつき、汗がしみついた私の衣服はたちまちこわばった。

私が震えているのを見るやナムソントンムは何度も「ふとんでももらってくればよかった。」と繰り返した。

彼は焚き火を焚こうと努めたが、生木で火がつかず、周囲には腰まで埋める雪原が広がっていて、乾いた木の枝を手に入れることはできなかった。

すると彼は雪の上に突き出たエゾヤマハギの枝を一、二本折って私の前に小さな火を起こしてくれた。

その火はその寒い天候に比べてあまりにも無力で私を暖めてくれなかった。

しかしこの火にこめられた革命の同志の熱い心情は私をそのひどい寒さに耐えさせてくれた。

その火が思わしくないのを知ると、ナムソントンムは私を通信員のトンムに預けて、銃声が消えない部落に向かって駆け下りていった。

布団を取りに下りていくのだと分かって私は止め

ようとしたが、彼はもういつの間にか林の中に姿を隠してしまった。

その日の晩私は身のすぐむような銃声に耳を傾けながら、あるいはナムソントンムの身辺に危険が生じてはいまいかと心配しつと気をもんでいた。

この緊張性がおそらく私を彼が再び現れるまで寒さと痛みで打ち勝たせたようだった。とにかく私は彼が帰ってくるまで待ち通した。

ナムソントンムは布団を持ってきたが、さらに私を涙ぐませたのは再び下りて行って馬バリ（そりを利用した馬車の一種）まで手に入れてきたことだった。

私に言わせればその時もう泣くような年はとづくに過ぎていた。しかし同志を救うために自分の命をかけて敵がうようよしている中に飛び込んで行って馬バリまで手に入れてきたナムソントンムはその心情が私を泣かせざるを得なかった。

走る馬バリの上で風がしみこまないように布団をかけてくれながら繰り返し「助かったんだ、助かつ

「なんだ！」と言つて喜んだ彼の姿は私の胸の中に深く刻み込まれた。

そのたびに私は（ナムソントナムのためにも私は必ず病気に打ち勝とう。）このように決心した。

ナムソントナムのこの上ない看護とトナムたちのまめめめしい世話によつて私は十余日後からはナムソントナムの手を借りなくても一人で起き上がる事ができるようになつた。

こうなると私は外に出てみたいし、トナムたちとも交わりたかつた。しかし私のそばにはずっとナムソントナムがついていて、私は身動きできなかつた。ある日私はあまりにも冷たい水が飲みたくて我慢できずにナムソントナムを呼んで懇請した。

「ナムソントナム……トナムにひとつ重要な頼みがあるんだ。」と私が言うと、ナムソントナムは分かつてしまったというようににこにこ笑いながら「何ですか？」と聞き返した。

「冷たい水が飲みたいんだよ！」この言葉を聞くと彼は「また冷たい水ですか。」と言いながらただ

笑うだけだつた。そこで私は

「いや、本当だよ！冷たい水を思いつきり飲んだらすぐにも病気が治ると思うよ！」と言つた。しばらく後に彼は笑うのを止めると、病気が治るといふ言葉に引かれたのか、トナムたちに聞いてみてくると言いながら外に飛び出していった。

しばらく後にナムソントナムは氷がぶかぶか浮かんだ冷たい水をパガジに一杯なみなみと汲んで持ってきた。

「さあ！思いつきり飲んでごらんさい！」と言いながら彼はパガジを私の口の前に持つてくるのだつた。私はあまりにもうれしくて彼の顔をもう一度ながめてはパガジをつかんで口をつけた。しかし彼が力を入れて握っているために思うように飲む事ができなかつた。水を飲もうと力を込めて引き寄せる私の腕はぶるぶる震えた。パガジをしつかり握つて注意深く私に水を飲ませる彼の手も震えていた。

私はこのようにして三度にわたつて水を思いきり飲んだ。今にも胸の中から何かが抜け出していくよ

うだった。しばらく後に水でいい気分になって私はその場に倒れて眠ってしまった。

夕方目を覚ました。どことなく私の気分は爽快で、元気が沸いた。

額に手を当ててみると熱は跡形もなく消えて本来の私に戻ったようだった。(その時にはこのように病気が治ることが時々あった)

氷の水が熱をすっかり取ったのである。いやそれよりも革命の戦友たちの、特にナムソントムの真心によって治ったのである。彼らが私のそばにいる限り私の病気が治らないはずがなかった。

窓から月の光が差し込んできた。庭の中からは革命歌謡の歌声が聞こえてきた。私はたまらないほど外に出たかった。私のそばでは昼夜ぶつ通しの二十余日間の看病で疲れきったナムソントムが座ったまま眠りこんでいた。

私は彼が目覚まさないように注意しながら起き上がった。まだ足は震えた。

私は入り口をそっと開けて外に出た。ある焚き火

のそばでは隊員たちが焼いたじゃがいもで夕食をしていた。なぜかそのじゃがいもが食べたくて私は二個を食べた。じゃがいもを食べると元気がいつそう湧き出るようだった。

私が部屋の中に再び入ろうと入り口を開けたとき、その音に目を覚ましたナムソントムがぼつと立ち上がると急いで聞いた。

「どこに行つてたんです？」

「外に：ナムソントム！ 私はじゃがいもを二個も食べたよ」

すると彼は「えっ、じゃがいもを？」と我を忘れたように言いながら戸を蹴つて外へ飛び出していった。彼はトムムたちに本当にじゃがいもを食べたのかと尋ねると、病んだ人間に食べ物を食べさせる時には気を付けなければいけないと言いながら、焼いたじゃがいもをつかんであちこち仔細に調べた。

それからナムソントムは部屋に飛びこんできた。彼は私を責めなかったばかりでなく、私をがばつと抱きしめると部屋の中をぐるぐる回りながら「やつ

たぞ！ もうすっかり治ったぞ！」と言いながら私をつかんで幼い子供のように喜んだ。

「さあもう一個お食べなさい」

彼はこのように言いながら黄色く焼けたじゃがいもを私の口元に持ってきた。

私は震える手で彼を抱きしめながらじゃがいもをかじった。すると私の目からは熱い涙があふれ出て、心の中ではすすり泣きさえした。

どうしてそれがただのじゃがいもであろうか！

その中にはキム・イルソン同志によって育成された我が革命家たちの高貴な品性と、自分の命よりも同志の命をより大事に思う熱い心が込められていた。まさにこれまで同志のために死をも恐れることなく飛び込み、万難を克服して同志を救援してきた彼の全ての心情がその中に込められているのだった。

私は彼を抱いたまま涙を流しながらその一粒のじゃがいもをどのように食べたのか覚えていない。

すっかり食べてしまうと私は病んでいた人間とは思えないように全身が軽くなった。

私はまさにこのような同志の熱い愛情で今日まで生きている。

それゆえその時から永い歳月が過ぎた今日でもいつも彼と一緒にいるようであり、その時のそのことがまるできのうおとといのことのように回想される。

(彼はその後戦闘で勇敢に戦って戦死した)

革命的同志愛！

これがどれほど美しく高貴なものか！

我々は最も苦しい時や最もうれしい時も常に真の人間、共産主義者だけが所有できる革命の同志の熱い愛情で生きてゆこう！

9 忘れられないチャントンム

キム・ヤンチュン

キム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争時期、私が属した部隊がホリム県チュソンデヨンザの密林の中に駐屯していた時のことである。

一九三七年冬、我々は後方活動をしていたチャントンムを含めて五十名ほどだったが、新年の戦闘のために皆軍事政治学習に熱中していた。

そんなある日の朝だった。

急に敵の大部隊が我々の駐屯地域に襲いかかってきた。敵が現れたという歩哨の合図の銃声を聞いて我々は急いで戦壕に走っていった。しかしすでに敵が機関銃を振り回しながら密営に這い登っていた。敵は数百名に達したが、山林がうっそうとして地形が急勾配だったので、百余名だけが先に接近し、残りの奴らは後ろでもぞもぞしていた。

我々は有利な地形と戦壕に依拠して、現れる敵を

狙って連発引き金を引いた。

初め事情が分からずにむやみにかかってきた敵は、我々の強い火力の前に多くの死体を出した。それにもかかわらず奸悪なやつらは数量上の優勢を信じて包囲網を狭めながら続けて接近してきた。

我々は敵の包囲の中から脱出しなければならなかった。

この時我々が進むことのできる場所は南方の谷間だけだった。敵がその方に力量を向ける前に先行動しなければならなかった。

しかし敵が我々にびたつとくつついて迫ってくる条件の下ではどうすることもできなかった。包囲網を突破して進むためにはとにかく目の前にいる敵を退けなければならなかった。

我々は敵を近くに接近させておいていつせいに喚

声を挙げながら猛烈な反撃の銃弾を浴びせた。

先に立つてきた奴らは倒れ、後ろから来た敵は一時ためらっていたが、とうとう後ろに退き始めた。我々は逃亡する奴らの後頭をめがけて続けて猛烈に射撃した。こうして双方の間にはいくらかの距離が生じた。

この時を逃さずに我々の基本隊伍はすばやく南方の谷間に脱出した。敵が後ろからついてくるだろうから、これをさえぎるために七、八名の隊員が残った。この時私もトンムたちとともに残ることになった。

やがて後ろに押し戻されていった奴らが再び這い登り始めた。敵の行動はよりいっそう凶暴になり、敵弾もさらに強く飛んできて、戦いはいっそう困難になった。

しかし我々はどんなことがあっても基本隊伍が安全な場所に撤収するまで敵をけん制しなければならなかった。

我々は敵に続けて火雷を浴びせた。

私が前からかかってくる敵をにらみつけていた時、チャントナムが私の横に来てうつぶせながら、「ヤンチュントナム！ 前ばかり見ずに横もよく見なければいけない！…」と言うのだった。その時初めて私は彼に視線を向けた。

戦闘経験が少なかった私は彼の言葉を深重に聴いた。

戦闘の場面を全局的に見ながら射撃をすると、さらに多くの敵を倒すことができた。

私は襲いかかる敵を撃っている途中で、右腕を重い棍棒で殴られたような激しい衝撃を受けてしばらく雪の上に倒れた。

再び起き上がった時、私はまったく右腕を使うことができず、左手で拳銃を握り締めて引き金を引いた。

しかし照準をうまく合わせることができず、撃つたびに弾がそれ、私は数発目にやっと敵の一人を撃ち倒した。

私が二番目の敵を狙っていた時にチャントナムが

私のところに走ってきた。

「早く溝俵いに下へ行きなさい！」私は彼の言葉が非常に不当に思えて、行くことはできないと言った。

「負傷した体でどうやって戦うというのだ！……こは我々だけでも戦うことができるから早く行きなさい！ 早く!!」

私は終始彼に押されるようにしながらその場を離れた。

しばらく後に私は負傷者たちが集まっているところを探し出した。そこには重傷を負ったホ主任もあり、我々を看護するために数名の隊員たちも残っていた。

敵を最後までけん制しながら戦っていたチャントムともう一名の隊員がしばらく後に我々のところに走ってきた。

こうして我々をへ包围殲滅しようとした敵のへ攻撃は完全に挫折した。この戦闘で数多くの死体を出した敵はこの日それ以上は接近してこれなかった。

次の日の朝、我々がある山の中腹で食事をしていると、再び敵が来たという合図が伝達された。

「奴らの搜索兵が我々の後ろについてき始めたのだった。

チャントムは我々に早く前の山を越えるようにと言いながら、足を運べないホ主任を担架に寝かせて前に立った。私も首に紐をかけて右腕をつつたま彼らの後ろに従った。

我々が山の稜線に登り立つや、激しい吹雪が顔を殴り、今にも息が詰まってその場に倒れそうだった。

担架の前の棒を持って雪の中をかき分けながら進むチャントムは誰よりも力に余る闘争をした。零下四十度を超える酷寒の中でも彼の額からは汗が噴き出した。しかし彼はただの一度も担架の棒を誰にも譲らなかつた。

彼は一時も早く負傷した同志たちを危険の中から救出しようという一念で、ある限りの力をふり絞って歩みを急がせた。

敵は続けて執拗に後ろについてきた。奴らが撃つ

弾丸は雨のように我々の周囲に落ちた。

状況はだんだん危急になった。

自分のために同志たちに危険が迫ってきていることを直感したホ主任は、

「同志たち！ 私を下ろしてくれ。私はまだ戦うことができる！」と叫びながら担架から転げ落ちようと身をもがいた。

しかしチャントナムは何も答えずに彼をさらにしつかりとつかんで歩みを急がせるだけだった。

ただ革命の勝利のために万難を排してともに戦ってきた同志、まして重傷を負った彼をおいてそのまま行くことはできなかった。

チャントナムは倒れることがあるとしても彼を危険の中から救出しようとする限りの力をふりしぼった。

しかしそのまま進んでいては遅かれ早かれ敵に捕まるかもしれない。

チャントナムは何を考えたのか、ちょうど道の前に現れた倒木があるところに急いで走っていった。

そしてすばやく倒木の下にある雪を手でかき分ける

と、ホ主任を担架に横たえたままその下に隠した。チャントナムはホ主任がまだ何か言うまもなく雪で彼を覆ってしまった。

「主任同志！ 辛抱してください。」 彼は雪の上についた手の跡を消しながらこのように言った。腕を負傷したトナムと私もこのように木の下に隠れた。

「銃を撃たずに辛抱しなければいけない…ヤンチュントナム…！」

倒木の下に入って座った私の肩をつかんでこのように言うチャントナムを見る私の胸には熱いものがこみ上げてきた。

「いけません。僕も一緒に行きます。」

私は体を覆っている雪を左手でさつと払った。

「ヤンチュントナム！ なぜそんなことを言う…どうしたって現在の我々の力で敵に立ち向かうというのは不利なことではないか…！革命をやる人間は常に沈着に問題を深く考えるすべを知らなければならぬ。…敵を突き放してくるから、早く私の言

うとおりにしなさい…そして傷口が凍らないようによく見なければいけない。…」

敵が近づいてくる緊迫した瞬間だったが、私を再び木の下に隠しておいて雪で覆ってくれる彼の熱い心に私は非常に感動した。

「チャントナム！ きつと帰ってきてください！」私はのが詰まつてやつとこの一言を言っただけだった。

チャントナムは年を取ったチエトナムも無理やり木の下に隠した後、「負傷者たちを頼む！」と言うと、足跡をわざと大きくつけながら山の向こうに突っ走った。彼の後ろにもう一名の同志が従った。

倒木の下にうつぶせた私の頭には、チャントナムとともに夜遅くまで焚き火の隅で学習したことや、彼と並んで馬を駆つて敵を打ち破ったことなどが鮮やかに浮かんだ。

（そんなチャントナムが今我々のために困難な道を歩いている！ 彼と再び会うことができるだろうか？）

このような思いに私の胸は耐え切れないほど痛み、敵に対する憎悪心でさらに強く燃えた。

私は弾倉を引き抜いた。

残りの弾六発あれば血の代償を得ることもできると思いながら私は弾を込めて射撃態勢を整えた。やがて敵の足音、話し声が聞こえてきたが、しばらく後には敵の二人が私の前にある倒木の上にぬつと登り立ったのである。

私はすぐに袖で目をこすつて銃を持ってそいつの胸に狙いをつけた。左手で握つた拳銃は非常に揺れ動いた。私が気を引き締めながら三度も敵に狙いをつけている時、チャントナムが去つた方から数発の銃声が響いた。チャントナムは我々のために敵を自分の方に誘引していた。

この瞬間私の耳元では、「銃を撃たずに辛抱しなければいけない！」とチャントナムがすぐそばで言い聞かせているようだった。

私の銃口はまっすぐに敵の心臓を狙っていたが、私は同志たちのために銃を撃つてはならなかった。

敵を鼻先においても引き金を引くことができないやるせない瞬間が流れていった。

息を弾ませながら倒木の上に阿呆のように立っていた奴らは、私が隠れている倒木を越えて、銃声が出た方向にどつと押し寄せていった。

奴らが過ぎ去るや私は雪をかき分けて倒木の上に登り立った。敵の足音はまだまばらに聞こえてきたが、吹雪が前をさえぎって見分けることができなかった。

強い吹雪のためにかすんだ樹林の中を眺める私の目の前にはいつの間にか、敵を打ちのめしながら高い山嶺と深い渓谷の雪の中をかき分けて進むチャントムの姿が浮かんできた。

このような思いにふけっている時、倒木の下から私を呼ぶホ主任の声が聞こえてきた。その時やった私は我にかえって倒木から下りた。そしてチャントムの頼みを考えながら、トナムたちとともに新たな密営地を探して歩みを移した。

隊伍の後ろについていく私の目の前には一時もチャ

ントナムの姿が消えなかった。私は彼のことを思うあまり歩くうちに木の枝で顔をひつかいたり、きつい風に巻かれて倒れたりもした。

しかし私は痛みも、寒さも感じることはできず、ただ彼が無事であつてくれればという一つの願いで胸を焦がした。

そうしていても後ろからする銃声を聞いてびくつきとして歩みを止めて振り返ったりした。

やるせない思いに胸を焦がしながら銃声が響くほうを眺める私の頭の中では、

（チャントナム！ 彼は今どんなに困難な戦いをしているのか！ 本当に彼を助けることはできないというのか！ そんなはずはない。僕には銃があるし、力があるではないか！ 何を躊躇するか。早く彼を助けよう！）という思いが浮かんだ。

私は拳銃を握りしめた。こんな時「同志たちを頼む！」というチャントナムの声が耳元で響くようだった。

私は再び気を取り直した。そして込み上げる激情

で張り裂けそうな胸を抱いてしばし立ち往生した。

この日の夜我々の行方を捜してきた通信員たちに出会って、彼らが目撃した話を聞いた。

我々を探そうと、敵が通り過ぎた跡を注意深く探りながら歩いていた通信員たちは、倒木が多いところで敵の足跡とは違う二人の足跡を発見した。

敵の無秩序な足跡に埋まってそれは現れては消え、消えては再び現れたりしながら、樹林を過ぎて険しい渓谷に伸びていった。道が遠くなるほどさらにしきりに踏み散らされたその足跡は、ある山の尾根から雪の上を転がっていった跡に変わり、最後に山の斜面に取り付きながら再び身をもがいて這っていった跡に変わった。

その足跡について山に登っていた通信員たちは、山の中腹に至ったところで峠の向こうで響く銃声を聞いて、さらに歩みを急がせた。

せわしく息をつきながら山に駆け上っていった通信員たちは、向かい側の山の中腹で、敵弾に当たって最期を遂げた同志を横において敵と決戦をしている

るチャントンムを見た。

通信員たちはチャントンムを危険の中から救出するために敵を狙って射撃をしたが、すでに時は遅かった。

敵は群れになって倒れた味方の死体を踏みつけながら狼の群れのようにチャントンムに襲いかかっていた。奴らはがむしやりに射撃し手榴弾を投げた。この時弾がなくなったチャントンムは銃一発撃つことができなかった。

彼は近寄ってくる敵をにらみつけながら撃発機を抜いて握り、奴らが鼻先まで来た時、上半身を起しながら敵の顔面に思い切り投げつけた。そしてにわか立ち上がった、撃発機に当たった顔を押しさしながらよろめく敵の胸板に復讐の銃剣を突き刺した。その瞬間彼は再び敵弾に当たった。

彼は最後の力を振り絞って「朝鮮革命万歳！」を叫んで壮烈な最期を遂げた。

我々はこの話を聞きながら皆がすすり泣き、敵に対する燃えるような憎悪で体が震えた。

(必ず復讐しよう！ チャントンムがあれほど願った革命の勝利のために最後まで勇敢に戦つていこう！)

私はこぶしで涙をぬぐいながら何度もこのように誓った。

チャントンムとそして彼とともに最期を遂げた同志は今我々のそばにいない。しかし彼らが抱いた不屈の革命精神と革命の同志に対する至極の愛情は、我々の心臓の中に深く保たれ、社会主義建設をいっそう促進する我々を新たな勝利へと鼓舞している。

「不屈の女闘士たち」

10 明けてくる明日のために

一九三九年九月にあったことである。

北満の九月といえば朝夕冷たい風が吹く初冬である。

私たち縫衣隊（裁縫隊）はその時部隊から冬服を作るようにという戦闘的任務を与えられた。

五名で構成された私たち縫衣隊はヨハ県スパサンヂュ付近の密営に向かつて出発した。私たちには手回しミシン一台と服を作る粗織りの木綿、綿、水を入れるブリキ缶、そのほか粗末な生活器具があった。私たちはそれをまとめて担いで密林の中に入っていた。

私たちは後ろに険しい山がそびえ、前に小さな小川が流れる樹林の中の平らに広がったところに落ち

着いた。

私たちは寝られる二つのテントを張り、その間に焚き火を焚いた。

私たちの責任者はウアン・プグアンという中国のトンムだった。彼と年配の中国の男のトンムがもう一人いたが、男のトンムたちは部隊の連絡と後方活動を受け持った。女性のトンムは私を含めて皆で三名だった。そのうちの一人はウアン・プグアンの妻で、もう一人はウ・イチンという十八歳の若い中国の娘だった。私たち女性トンムは服を作る任務を引き受けたが、女性たちに対する責任は私が負った。

私たちは夜が明けるや仕事を始め、針の先が見えなくなるまで服を作った。ウアン・プグアンの妻は

リ・ヨンスク

裁断をし、私は裁縫をやった。ウ・イチントンムは綿を刺し縫いしてポタンの穴を作った。

一日中この仕事をすると腰がずきずき痛み、指先が痛んだ。しかし私たちは痛さをこらえて夜も仕事をしなければならなかった。

その時私たちには灯をともし油がなかった。そこで夜には主に白い木綿に保護色を染めてそれを乾かして伸ばす作業をした。

布に色を染めるために私たちは半く一里離れたところに行つてチョウセンヒメツゲ、カシワの木の皮をはいで小さなブリキ缶に入れて煮た。それからその液に白い木綿を入れて沸騰させた。ここは深い山奥なので朝夕かなり冷え込んだが、ハエぐらいの大きな蚊が多かった。蚊はまだ暗くならないうちから皮膚にたかつては血を吸った。私たちは蚊に付きまといわれて余計に疲れた。

食事といつたらかぼちゃとかぼちゃのつるを煮た汁だったが、それさえ腹が満たされるほどには飲めなかった。そのうえ燃え盛る炎の前に立つと汗が全

身から流れ出すようだった。空腹で足がぶるぶる震え、気がぼうつとなつて目の前が真っ暗になつたりした。

しかし私たちは一步も退くことはできなかった。明るくない焚き火の前で布に色を染めるので、下手をすると貴重な布を焦がしたり、まだらになつてだめにしてしまうかも知れないからだ。私たちの遊撃隊員が血を流して敵と戦つて手に入れたり、人民が食べるのも惜しんで貯めた金で買つて遊撃隊に送つてきた布であることを考える時、私たちはどうして一瞬でも辛い仕事だと考えたり、些細な不注意でこんなに大事な布をだめにしてしまうことができようか！ 私たちは気を引き締めて仕事を怠いだ。ある日の晩ウアン・プグアンの妻は、私たちと一緒に木綿に色を染めているうちに気を失つて焚き火の中につんのめつた。

この時ウ・イチンがすばやく彼女を助け起こした。下手すれば大変なことになるところだった。

しかし我々は手を休めなかった。互いに骨の折れ

ることを我先にやろうと考えた。

冬は鼻先まで迫ってきているので、一時も早く部隊のトンムたちに服を作って送らなければならないという一つの思いで、私たちはあらゆる苦しさに耐え抜いた。その後私たちにはかぼちゃのつるさえなくなつた。空を覆う密林の間から冷たい晩秋の風が吹いてきた。

「来るという歳月はいつ来るのかしら？」

ウアン・プグアンの妻が寒い冬が迫ってくるのを感触したのか、ため息をつきながらそつと言うのだった。

私は彼女がそんなことを言うかも知れないと予想していた。

元々彼女の夫であるウアン・プグアンは偽満軍にいた。私たちの遊撃隊の活動によつてどの道が正しいのかを悟つたウアン・プグアンは妻と一緒に遊撃隊に移ってきたのだった。

私は覚員だつた。だから彼女を党的に正しく教育しなければならぬと決心した。

「いつもかぼちゃの汁だけで我慢しましょう。良い世の中はきつと来るわ。今日私たちが食べるかぼちゃの汁は明日の白いご飯になるのよ。それで私たちはその日のために闘っているんじゃないの?」と話を始めた私は、彼女に私たちが遂行する革命の勝利を確固として信じられるように多くの話をしてやつた。

そして何のためにこのような艱難辛苦を顧みずに闘わなければならないのか、朝鮮人民や中国人民、特に私たちのような無産階級が味わう苦しみの禍根はどこにあるのかを話しながら、私は私が遊撃隊に入隊するようになった話もした。

私の父は日帝の〈討伐隊〉の奴らに無惨に虐殺された。その後私はウアンスピヨンの谷間の密林で縫衣隊としてやはり冬服を作っていた。その時私たちの縫衣隊は全部で五名だったが、皆女性だった。

そんな一九三六年十月だった。敵の不意の襲撃によつて私たちは奴らに逮捕された。奴らは私たちを監獄に監禁してひどい拷問を加えた。しかし誰も遊

撃隊の秘密をしゃべらなかつた。拷問では到底秘密を探り出すことはできないと悟つた奴らは、私たちを監獄から出して城の中から出られないように監視した。奴らは私たちをだまして秘密を探り出そうとした。私たちが逮捕されてからおよそ一年になる一九三七年七月、私たちは城の外に脱出するのに成功した。城の外には野菜畑を耕しながら一人で暮らしている中国人の老人がいた。私たちはその老人のところに行つて助けってくれと言つた。私をじつと見た老人は、「朝鮮人だね。遊撃隊を探しているのかね?」と言つて私たちの顔を注意深く探るのだつた。私たちがそうだと答えると、彼はためらいなく道案内をしてくれ、自分についてくるようにと言ふのだつた。私の体が極度に衰弱して疲れているのに気付いた老人は、私の赤ん坊まで負ふつてのっしのっしと歩いた。彼は二里半を超える道を歩いて、私たちをノベコウという谷間にある反日会の会長の家に連れていった。ここで遊撃隊がいるところを知つたその老人は、再び私たちを部隊まで連れていつてくれた。

その時軍長だつたチェ・ヨンゴン同志は、私たちをどんなに喜んで迎えてくれたか知れなかつた。そしてその老人に家に下りていかずに部隊に留まりなさいと勧めた。それは老人が私たちをこつそり遊撃根拠地へ送り届けたということを敵が知つたら、彼を銃殺してしまうということを、軍長同志はよく知つていたからである。

部隊に留まると約束した中国人の老人は、家に行つて家財道具をおおそまとめて持つてくると言つて下りていった。しかし残忍な敵はその老人を逮捕し、遊撃隊を助けたという罪で無惨に虐殺してしまつたのである。

その次の年の十二月私は乳飲み子を人に預けなければならなかつた。

私の話に耳を傾けて聞きながら穴の開くほど私を見つめていたウァン・プグァンの妻は、私の手をぎゅつと握りながら涙を流すのだつた。彼女の涙は自分の意志が余りにも弱かつたという反省の涙であり、同時に新たな決意を固める涙でもあつた。しば

らくして彼女は興奮して言うのだった。

「分かりました。私はヨンスクトンムが何のためにそのような闘うのか分かりました。私たちは子供たちにまでそんな不幸を抱えさせてはなりません。

私たちは朝中国人民の共同の敵日帝を追い出すために最後まで闘わなければなりません。私たちは勝利するでしょう。本当に新しい日が明けてくるでしょう」。

その次の日の朝だった。いつもウ・イチンや私より遅く起きていたウアン・プグアンの妻は、薄暗い明け方に起きて食事の準備をするのだった。そして彼女はいつそう機嫌よく働き始めた。私たちの仕事は日が経つほどいつそう緊張していった。気候が寒くなる前に冬服を一日も早く作って部隊に送らなければならぬからだだった。

私たちは夜には焚き火の横でほとんど眠らずに仕事の手を早めた。

私たちがここに来てから一と月が過ぎたある日の朝だった。私は普段の日より早く目が覚めた。私たちは互いに他のトンムたちを少しでもよけいに休ま

せようとしていたのである。私が眠りから覚めて食事を作ろうと小川のほとりに行ったのはまだ薄暗い時だった。その瞬間向こうの方から木の枝が折れる音が聞こえてきた。

私はひよつとしてウアン・プグアンと男のトンムが部隊に行つて帰ってきたのではないかと思つた。私は息を殺してそちらをじつと見つめた。

次の瞬間私は驚かざるを得なかつた。薄暗闇の中を明らかに黄色い服を着た日本の奴らが近づいてきているではないか！

私は急いでテントに走つていきながら叫んだ。

「敵よ！」

私のこの切羽詰つた声に驚いた二人のトンムはぱつと飛び起きた。私は彼女たちを先に逃がそうとした。もしも敵とぶつかるようになれば皆が犠牲になるかも知れないからだだった。私は敵に発見されないようにまずテントに人間がいた痕跡をなくそうとあせつた。

ところが私の行動を探っていた彼女たちは、自分

たちがやるから私に先に逃げろと言うのだった。

「コンスクトムム！ あなたは私たちよりもっと革命に大事な人間です。早く逃げてください！」
と言ってウアン・プグアンの妻は私の前を遮った。

「いいえ、私たちは皆大事なのよ。私には銃があるけど（私はその時拳銃を持っていた）、あなたたちには銃がないじゃないの？ さあ、こうしている時じゃないわ。早く逃げて…」と言って断固とした態度を取った。

実際私の心情は命を賭けて彼女たちを救いたかった。このような心情は彼女たちもやはり同じだった。私たちは敵が鼻先まで来ているのにそれ以上ぐずぐずしていることはできなかった。

私は命を賭けて守り抜かなければならない裁縫機を抱えた。ウアン・プグアンの妻は作った服と綿を風呂敷に包んで持ち、ウ・イチンはそのほかの物件をまとめて持って先に立った。私たちはテントの後ろに逃れて険しい裏山に這い登り始めた。

私は荷が重くて走ることができず、木の枝に引つ

かかってしょっちゅう転んだ。

事態は非常に危急だった。私は裁縫機をすぐに倒木の下に隠しながら、一方でトムムたちを早く山の上的ほうへ避難させた。

私は装弾をした拳銃を抜いて、敵とぶつかったら闘う戦闘態勢を整えては、奴らの目につかないように後ろに駆け登った。ちよつと安全そうなところで私たちは密林の間から奴らの行動を探った。敵は私たちのテントを発見した。奴らはテントを探り、テントに火をつけながら四方を騒々しくひっくり返した。奴らは四方に向かってやたらに銃を撃った。

テントが火に包まれて燃え上がるのを眺めて立つ我々の心臓は敵に対する憎悪で高鳴った。

奴らはテントに火を放つては、銃剣を逆立てて、人間が隠れそうなところをくまなく探し始めた。私たちははらはらした。それは何よりも部隊に送らねばならない冬服と綿をテントの前の小川の向こう側の岩の隙間に隠しておいたからだだった。

冬服を命を賭けて守り抜かなければならなかった。

私は決心した。もしも奴らがそっちの方を探し始

ついで語り合った。

めさえしたら、銃を撃つて奴らをこちらの方へ誘導する積りだった。そこで私はトンムたちをさらに避難させた。ところが幸いにも奴らは私たちが隠しておいたところには近づかなかった。奴らはわいわい騒ぎながら探し回っては、何も得るものがなかったのか、ばらばらに集まって下りていった。

テントは灰になり、汁を沸かしていた鍋やアルミの器はめちやめちやになってしまった。奴らはそれぞれに八つ当たりをしていったのである。

急に曇り始めて薄ら寒くなつた空からはしまいにポタン雪が降り始めた。

しかし私たちは少しも落胆しなかつた。かえつて敵に対する燃えるような敵愾心で体には力がいっそうみなぎつた。

私たちは奴らが踏みつけてだめにした鍋やアルミの器を石で叩いて伸ばして食事の準備をした。

この日の夜も私たちは赤々と燃え上がる焚き火の光に互いの顔を照らされながら、明けてくる明日に

11 タバンチョン密営で

キム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争時期にあつたことである。

私たちパルチザンの女隊員たちは想像を絶する隘路と難関の中で負傷した革命の同志たちを看護することが多かった。

深くて陰気な密林の中に一刻を争う重傷者を横たえた時、彼女たちの前には何の医療施設も、薬品もなかった。

ただ自分の前にゆだねられた革命の任務に対する忠実性、革命の戦友に対する熱烈な愛情、そこから生まれる真心―この一つでもって革命の同志を死の淵から蘇生させ、彼らを全て隊伍に再び復帰させることができた。

一九三七年私は部隊から遠く離れたタバンチョン密営に一人残って、ソナホ戦闘で負傷したオ・ウン

チョン・スニ

リョン、ハン・ゼヨンファン、キム・ゼヨンヒョプ同志たちを看護する任務を引き受けるようになった。私たちには軍医もないし、何の医療器具もなかった。薬といえは私が部隊を離れる時に持ってきたヨードチンキーびんがあるだけだった。

一人でもない重傷者たちを医療器具も、薬品も、経験もなしにどうやって治療することができようか？
初めのうちは心配になつて自信が湧かなかつた。
しかし革命が私に与えてくれた戦闘任務！ これを
実行できないならば革命戦士の資格がない。どんな
ことがあつてもやり遂げなければならないとまず自
分自身を鞭打ち、自分自身が確固とした信念を持つ
ように努力した。

私は同志たちを看護し始めた。毎朝早く起きて同志たちの傷口を塩水で洗い、薬を塗ってから包帯を

取り替え、いくらもないとうもろこしを少しずつ石臼でひいて粥を炊いて食事を保障すること、そして薪を取ってきて病室に火を起すこと、このようなことが私の重要な日課だった。

しかし一人でこれらのことを担当したので、明け方から夜遅くまでほとんど座することもできずに忙しく走り回らなければならなかった。

背丈を超える石臼を一人で一日に三度回し、呻吟する重傷者を看護して夜を明かせば、起き上がる気力さえなくなることも一度や二度ではなかった。

しかし呻吟する同志たちのことを思うと、自身の疲れなど何でもないように思われて、しばしも休むことができなかった。

同志たちは同志たちで私に少しでも苦勞をさせまいと苦痛をこらえながら、横になつてでも何か私を助けてやれないのをもどかしがった。

オ・ウンリョントンは痛みがちよつと和らいだ時には、文字を学ばなければいけないと言ひ聞かせてくれながら、私を横に座らせて一字一字教えてく

れた。私はどんなにありがたいか知れなかった。そんな時には私の目の前には、幼い頃に味わった辛い記憶が一度によみがえって喉が詰まった。

敵に土地を奪われ、生きる道を求めて見知らぬ異国の地をさまよう私たちの一家には、どこに行つても貧窮と虐待、蔑視だけが待っていた。

家族を引き連れて当てもなく彷徨していた父は、私が七歳の時ヨハ県ソヂェハのトンチョンというところで再び小作暮らしを始めた。しかしここでもよくなるはずはなかった。日本の官憲と地主の二重三重の搾取によつて負債は年々増えるばかりだった。

秋収を終えた次の日からイヌビエの穂をむしりとして粥を炊いて食べるありさまだったので、学校に行くことなど思いも寄らなかつた。

私は指が節くれ立つほど草取りをしなければならなかつたし、険しい峠を越えて地主が経営する阿片畑に賃仕事に通わなければならなかつた。

私が十三歳になった年に父が病にかかつて呻吟し、薬一つ飲めないまま亡くなると、そんな生活さえ維

持することができなかつた。借金取りたちはいつべんに襲いかかつてきて家財道具を掠め取り、しまいには粗末な藁葺きの家まで壊していった。雪寒風が吹き荒れる路上に放り出された私たちの一家には、もつと恐ろしい運命が迫ってきていた。私たちの家からもう掠め取るものがないのを知った借金取りは、私をミンミヨヌリ〔将来嫁にするために婚家に連れていって養う女子〕として引つ張つていこうとした。私が必死になって反対すると、そいつは母の目の前で私を柱に縛りつけて刃物を振りまわしながら脅した。

その日の夜母は私の縄をほじめて早く逃げなさいと言いつながら泣きじゃくつた。私は母のそばを離れるのはとても辛かつたが、離れないわけにもいかず、当てもなく家を去つた。

こうして一晩のうちに私たちの一家は散り散りになつてしまつた。

この苦痛、この不幸、これがどうして私たちの一家にだけ限られたことであつたらう！ 生きようと

て生きられず、死のうとて横たわるところさえないのがまさに祖国を奪われたかつての我が人民の境遇だつた。

愛する母と別れた後、私は金持ちの家を回りながら子守りをした。しかし子守りとはいつても実際には奴隷と変わりなかつた。満足に食べさせてもらえないまま一日三度のご飯を作つたり、子守りをしたり、お使いに行つたり、また畑仕事をしたりと、しばしも休む間がなかつた。

そうするうちにも下手をすれば髪の毛をむしられ、死ぬほど殴られた。

一度だつて安心して眠つたことはなかつた。いつ一度だつて人間らしい待遇を受けたことがあつたらうか！

かつてこのように生きてきた私にまさに隊員たちは同志と呼んでくれ、実の妹のように大事にし愛してくれ、文字を教えてくれるではないか！

このように考えた時私は胸が熱くなり、重い責任感を感じるばかりだつた。

（私は革命が与えた任務に忠実でなければならぬ。私が味わったあのよう不幸と苦痛を二度と繰り返さないために、あの呪わしい日帝と地主、資本家の世の中を打倒して祖国を解放するために最後まで戦わなければならない。まず私が引き受けているこの同志たちにあらゆる誠意を尽くして、彼らを一日も早く戦闘隊伍に送り出さなければならない。）

私は同志たちの負傷を治療するためならばどんな困難なことでも尽くしたかった。私は歯を食いしばって寒さをこらえながら石臼を回し、同志たちのそばで夜通し看護した。

余りにも疲れてうとうとするうちに、夜が明けるとばかり思つて真夜中に朝の食事を作つて待つたこともあつた。

このように一日二日が経つにつれて、ハン・ジョンファントナムとキム・ジョンヒョプトナムの傷はだんだん治つていった。しかしなぜかオ・ウンリョントナムの傷はだんだん悪化した。足の傷がぶくぶく腫れ上がり、起きるところか動くこともできなく

なつてしまった。骨と皮ばかりになったオ・ウンリョントナムが呻吟するのを見ると、今にも胸が張り裂けそうだった。

ある日オ・ウンリョントナムが独り言で、

「キムチを食べられたらなあ……」と言つた。私はその瞬間顔に焼き火をかぶつたようだった。

私は何としても白菜を手に入れて、キムチを漬けてオ・ウンリョントナムにあげようと固く決心した。しかし雪寒風が吹き荒れる樹林の中で白菜がどこで手に入ろうか！

すぐにでも村に駆け下りていきたい気もしたが、軽率に行動することはできないことだった。敵に密営が発覚する恐れがあるのだ。私はあれこれ考えた末に、秋に白菜を植えた畑の雪をかき分け始めた。全身が凍りつき、力が抜けたが、同志の願いをかなえてやれるという一つの念願で心はかえつて熱くなるばかりだった。

一日中雪と取つ組み合つた時、そこには案の定数株の凍つた白菜があつた。白菜を発見した時どんな

にうれしかったか知れない。私はこれでキムチを漬けてオ・ウンリョントンムに少しずつ勧めた。

数日間ひどい苦痛に呻吟していたオ・ウンリョントンムはある朝私に次のように言った。

「スニトンム、私の傷は中まで深く膿んでいるに違いないから、鉄の串を熱して刺して膿みを絞り出してください。」

この言葉を聞いた時、私はしばらくの間言葉が出なかった。

こんな時にはたしてどう答えたら良いのか、私は長い間ためらうばかりだった。

しかしいくら考えてみても、こんな原始的な方法による手術以外には、これといった方法は浮かばなかった。そうかといつて放っておくわけにはいかないことだった。しかしいずれにせよこのことをやるべき人間は私しかないなかった。

私は台所に行って悲壮な決心をしながら鉄串を火に入れた。

（オ・ウンリョントンムの傷が悪化したのはまさ

しく私の責任だ。私の真心が不足していたせいだ。そんな私が今オ・ウンリョントンムに耐えがたい苦痛を与えようというのか）

このように考えると胸が痛んだ。オ・ウンリョントンムの言うとおり熱した鉄串で彼の傷口を刺す自信は湧かなかった。

私は鉄串をつかみ出して入り口の外へ思いきり投げ捨てた。（しかしどうするんだ！ 今私には何の医療器具も薬もない。ただ一つ私の真心でもって千方の医療器具や優れた医薬に代えなければならぬ！）

私は涙を流しながら再び鉄串を拾って火に入れた。ハン・ジョンファントンムとキム・ジョンヒョプトンムにオ・ウンリョントンムの足をしっかりと押さえさせてから、私は真つ赤に焼けた鉄串を持ってオ・ウンリョントンムの前に行った。手が震え、額からは玉のような汗が流れ落ちた。しかし唇をかみ締め、手に力を込めて傷口に刺した。

瞬間オ・ウンリョントンムが「うーん！」と力みながらぱつと起き上がったせいで、私とトンムたち

は後ろにばたつとひっくり返ってしまった。

傷口からは血の膿みが流れ落ちた。私は両手で容赦なく傷口をぎゅっと押さえつけて膿みを絞り出した。

傷口を塩水で洗って包帯を巻くと、オ・ウンリヨントンムは蒼白な顔で歯をがたがたさせながらぶるぶる震えていた。私は涙が込み上げるのをこらえきれずに外に飛び出してしまった。

オ・ウンリヨントンムは一日一晚悪寒に震えた。私は連日夜通し台所に火を起こして部屋を暖めた。

三日目から腫れあがっていたオ・ウンリヨントンムの腫れたところはだんだん治まり始め、腫れたところには赤い新しい肉がつき始めた。

〈手術〉をしてからちようど一週間が経った日の明け方、「スニトンム…スニトンム！」

と呼ぶ声に立ち上がった私は、オ・ウンリヨントンムが壁に寄りかかって中腰の姿勢で立っているのを見るや、にわかに駆けよって彼を抱き上げた。

あれほど心配していたオ・ウンリヨントンムがと

うとう立ち上がったのだ。

足の負傷のためにあの呪わしい敵を打ちのめす戦闘の隊伍に戻れないことを、どんなにいらだつていたオ・ウンリヨントンムだったか！

そんな彼が今床から立ち上がった。

私たちは皆どうしてよいか分からないほど喜んだ。私たちは久しぶりに思い切り笑い、騒ぎながら、どこかで敵に火雷を浴びせている同志たちのこと、祖国を解放して恋しい故郷に帰るその日のことを話し合った。

その後何日も経たずにオ・ウンリヨントンムは全快した。連日吹き荒れた吹雪も止み、北満の冬の天気としてはめつたにない暖かいある日の朝、私たちは部隊に向かって出発することにした。鼻歌を歌ったり冗談も言い合いながら出発準備に上機嫌になっているトンムたちを見た時、私は三ヶ月の間の数々のことが回想されて感慨無量だった。

私たちがちようど背のうを担いで入り口の外へ出ようとした時だった。先頭に立って庭に出たオ・ウ

ンリヨントンムが、

「トンムたち！ 〈討伐隊〉の奴らが来ました。」

と急に叫んだ。すでに数十名の敵が家を三面から包囲して「生け捕りにしろ」と叫びながら迫ってきていた。

私たちは向かい側の樹林に向かって突っ走った。

「奴らに捕まってはならない。」

オ・ウンリヨントンムの太い声が聞こえてきた。

私はその声に力を得ながら思い切り走った。私がちょうど樹林の中に入ろうとした瞬間、敵が放った軍犬が冬服のズボンにがぶりとかみついてぶら下がった。私は犬と一緒に雪の中を転がりながらオ・ウンリヨントンムを呼んだ。

瞬間オ・ウンリヨントンムがすばやく振り返りながら続けざまに拳銃を撃った。犬と一緒に私たちの後をびったりとつけてきた敵の数人がいっぺんにひっくり返った。その瞬間に私はぱつと立ち上がって山の尾根に向かって駆け登った。後ろからは敵に向かって発射するオ・ウンリヨントンムの銃声が続けざま

に聞こえてきた。

このようになるや生け捕りにするのを断念したように敵は銃を撃ち始めた。銃弾がびゅんびゅん飛んできて木に突き刺さった。私は夢中で走り続けた。

山の尾根に登り立ってやつと私は、オ・ウンリヨントンムはどうしたろうか？ という思いが浮かんだ。

追撃に失敗した敵は、私たちが入っていた家に火を付けて退いていった。

私は奴らが消えるや、オ・ウンリヨントンムが奴らを撃ち倒していた場所に向かって駆け下りた。

しかしその場所には私より先に駆けつけてきたハン・ジョンファンとキム・ジョンヒョプとンムが立っているだけで、オ・ウンリヨントンムは見えなかった。

私たちは三人でその一帯を暗闇に包まれるまでくまなく探し回った。

「ウンリヨントンム！ ウンリヨントンム！」

呼べども呼べども私の声はこだまとなって返って

くるばかりだった。

て再び歩みを急がせた。

私はその場にべたつとへたりこんでしまった。(オ・ウンリヨントンはひよつとして亡くなったのではないだろうか? :あの時なぜ私は呼び止めたのか! 病み上がりで体も完全に回復していないトナムをあの危急な瞬間に呼び止めるなんて! もしも彼が亡くなっていたら!)ここまで考えた私は目の前が真っ暗になって再び立ち上がる元気を失ってしまった。

(いや、決してそんなはずはない―彼はきつと生きています。私は必ずオ・ウンリヨントムと一緒に隊伍に帰ろう。)このように新たに決心を固めてトナムたちと一緒に第二集合場所に突っ走った。

そこで生死が分からずに気が気でなかったオ・ウンリヨントムを見た時、私は「ウンリヨントム!」と一言叫んでは、それ以上言葉が続かなかつた。

(私たちは生きています。私たちは隊伍に帰って敵に百倍千倍の復讐をしよう!)

私たちはこのように決意を固めながら部隊に向かつ

12 トンファの樹林の中で

キム・ミヨンファ

抗日パルチザン闘争時期を考えるたびに胸の熱くなる話が数限りなく回想される。

その中で今でも私の目の前にありありと浮かんでくる話の一つある。それは一九三八年の早春にあったことである。

チョウセンカラマツ、チョウセンマツが密生したトンファの深い樹林の中の底はまだ雪が解けていなかった。風が吹く時にはうっそうとしたこの樹林は「インーイン」と叫び声を挙げた。すると樹林の中は吹雪に包まれてもうもうとなった。

ある日私が属していた連隊はちょうどこのトンファの樹林の中を行軍する途中で休息した。隊員たちはおよそ一と月を越える強行軍ですっかり疲れていた。糧食はなくなつてから既に久しかった。しかし私たちパルチザンはそのひどい苦難の道をくぐり抜け

ながら敵を求めて険山の樹林の中を通つてきた。

私たちは焚き火をあちこちに起こしてそのまわりに集まつて座つて休息していた。連隊長は焚き火が燃える近くの倒木に腰掛けて私に話していた。その時私は裁縫隊員だった。

連隊長の声は深く太く震えていた。「…ピトンムの病勢が危急になりました。日が経つほど悪くなるばかりです。私たちのように健康な体でもぐたつとなる状態なのに、足に重傷まで負つたのですからどうして苦痛でないことがあります。しかしあのトンムは歯を食いしばつて苦痛をこらえています。それをどうして目を開けて見ていられますか。…」連隊長は口髭を震わせると、私の手を固く握りながら話を続けた。

「ピトンムを安静させなければなりません。彼を

この樹林の中で安静させましょう。私はミヨンファ
トムムがそのようにしてくれると信じます。」私は
胸が重苦しかった。どのように答えたら良いのか分
からなかった。獣の足跡さえ稀な、昔話に出てくる
ようなそんな日も当たらない樹林の中だった。そん
な樹林の中で戦友たちと離れていなければならぬ
ことを考えるととてもつらかった。そのうえいつ帰っ
て来るかも分からない連隊を心うつるに待ちながら
徒手空拳で患者を救護しなければならぬことを考
えると、いつそう重い責任を感じた。焚き火はばち
ばちと音を立てながら続けて燃え上がった。連隊長
は私の手を固く握ったまま黙って座っていた。私は
考えにふけた。

この厳粛な瞬間に私の頭には一つの昔の追憶が浮
かんだ。：一九三二年陰曆八月四日私が遊撃根拠地
に入ってくる直前であったことである。

その日の夜〈討伐隊〉の奴等がポンリムドン（ヨ
ンギル県）に攻め込んできて私たちの下の方の家に
火を放った。

私は裏山で燃える家を見下ろしながら

「革命の同志たちよ！ 私は女の身であっても同
志たちの魂を受け継いで最後まで闘います。」と誓っ
た。

その日の夜私の夫も奴等に逮捕され、その後獄死
した。夫の父はその日の夜燃える家の庭で「革命万
歳！」を叫びながら虐殺された。：

私は頭を上げて連隊長に決心を語った。「革命に
助けになることならば水火をいけません。私にピ
トムムを任せてください。」

こうして険峻なトンファの樹林の中に私はピトン
ムと一緒に残るようになった。戦友たちは残る人間
のために小屋を作ってくれ、各自小麦粉の中着をは
たいて二枘になるかならないかのとうもろこしの粉
を残してくれた。そして頬が平べったい（その時は
やせて細かったが）ある戦友は、シラカバの皮の中
に大事にしまつて持ち歩いていた石マッチ（何でこ
すつても火が点く）二つを私の上着の内ポケットの
中に入れてくれた。連隊長は最後に私に言った。「十

日後には私たちは帰ってきます。十日の間だけ辛抱してください。…」

連隊は出発した。連隊が出発した後私はこれからこのことを心配して考えにふけた。十日の間と言うが、どんな難関にぶち当たるかもしれない連隊がその日にちに帰って来れないことを予想しなければならなかった。どうしても倍に見て二十日は辛抱しなければならぬと私は考えた。それならば二十日の間の糧食問題をどのように解決したらよいか―

私は巾着をはたいて戦友たちが残してくれたのもろこしの粉を匙で数えてみた。五十四匙だった。五十四匙ならば一日三匙ずつとして十日で三十匙、二十日で六十匙なければならなかった。二十日分には六匙足りなかった。私は考え抜いた末に、足りない量を匙に少な目に粉をすくう方法で解決しなければならぬと決心した。私が食べる食糧については心配しなかった。私など何を食べてでも生きれそうだった。ピトンムさえ助けることができれば、私は食べなくても生きれるようなそんな心情だった。

火は戦友たちが燃やしておいた焚き火を消さなければよかった。だが患者にどうしても必要な薬がなかった。あるのは患者に対する看護者の真んだけだった。私はこの真心の薬だけは十分に与えてやろうと決心した。

苦難の日々が流れていき始めた。私は朝早くから背のうを肩に担いで小屋を出た。私はまず山の尾根伝いに歩いて頂上に登っていき、〈討伐隊〉の奴等が登ってきはしないかと思つて山の下の方を詳細に探してみるのを一日の最初の日課にした。その後でこの山、あの山を登り下りしながら、雪の中に埋まつた古い松かさを拾い、年を越した木の葉、草の葉を拾い集めて背のうをいっぱいにした。

早春なので、食べられて柔らかく青い草があるはずはなく、年を越して乾いて落ちたヤマブドウの葉、シラヤマギク、ソングンナムル、ムスへ、朝鮮人参の葉などは雪に埋まつていて、拾い集めるのは非常に骨が折れた。

このように苦勞して得た松かさをかさのまま火で

焼いては中の焼けた松の実を取り出し、脂ののった黄色い実を再び火であぶった。それを粉にして一食に二匙の松の粉と一匙に満たないとうもろこしの粉を混ぜ合わせ、水一碗を加えれば、それが患者の一回の食事だった。

私は乾いた草の葉を水でふやかし、その中に松の粉を少しづつ入れて沸かして飲んだりした。

食べるものを手に入れるために朝早く小屋を出ては陽がちょうど沈みかける時に帰って来た。山の中なので午後四〜五時ごろになればもう隅々が暗くなつた。小屋に帰る時にはクヌギ、マユミなどの乾いて固くなった木の若枝を一荷ずつ頭に載せて帰って来た。

日は過ぎていった。日が経つほど難関は増していった。地面に落ちた古い松かさやもうなかつた。松の木の高い枝にぶら下がった松かさを長い竹竿で払い落とさなければならなかったが、食べるものも食わずに力が尽きた体でそれをやるうとするのは文字通り〈決死戦〉に他ならなかった。

そして年を越した葉も人が通れるぐらいの平らなところにはもうなくて、足を移すのも困難な崖になったところにしかなかった。

そこである日行ってみたことのない遠くの山を歩きまわるうちに暗くなつて山の中を一晚中さまよつたことも一度や二度ではなかった。こんな事故のあつた時にはピトンムの声はいつもしわがれてしまった。彼は小屋の扉を開け放つて一晩中「ミヨンファオモ二！」と私を呼びながら夜を明かした。

待ち焦がれた十日が過ぎ、二十日も流れていった。一と月が過ぎたある日だった。

松の粉を水で溶いて患者に差し出した私はぶるぶる震える足をやつと移しながら小屋の入り口を出た。ピトンムは背のうを担いで小屋の入り口を出る私にくれぐれも頼んだ。

「遠くへ行かないで下さい。僕はもう食べなくても生きることができます。ミヨンファオモ二さえそばにいたら生きることができますから、どうか遠くへ行かないで下さい。…」

私は不憫そうに戦友を振り返りながら言い聞かせてやった。

「遠くへは行かないって言うのに。私が帰って来るまでいい夢でも見ていなさい。」

私は山の斜面をよじ登り始めた。足を思うように移すことができなかつた。力が尽きたうえに履物まで破れて、パルサゲ「履物を履く時にぴったり合うように足に巻く布や紙」で足を巻いて歩いた。私はピトナムの履物まで破いてしまった。

しばらく後に私は腹ばいになって山腹をよじ登っていった。やっと山の中腹まで登った私はそれ以上這い上がる力がなかつた。私は斜面にうつぶせたまま周囲を見回した。およそ十メートルほど上がったところに松の木が二本立っていた。私はありつたけの力を尽くしてそこまで這い上がった。

松の木によりかかって体を起こした私は木の上を見上げた。松かさはいくらかもぶら下がってはいなかつた。それでも二本の木にぶら下がったものだけでもはたき落とせば一日の食事は間に合うほどだった。

私は斜面に突き出た小高い場所を選んで立ち、長い竹竿を振り上げた。一番下の枝にぶら下がっていた二つの松かさはたいして苦勞せずに落とせた。ところがその上の枝からは竿が届かなかつた。やむを得ず私はパルサゲをほどいて木に登り始めた。人間の背丈ほどよじ登ると、手足がぶるぶる震えた。そして目の前に火花が起つた。私はめまいがするのをこらえて木に力いっぱい抱きついてしばらく耐えた。そして歯を食いしばって腰紐の内側に差した竹竿を片手で抜いて持って松かさをひっぱっていた。片手で叩くので力が弱く、松かさは何度叩いてもうまく落ちなかつた。私の全身は汗だくになった。とうとう一つが落ちた。その刹那私は目の前がくらくらつた。力ががくつと抜けた私は、崖のように険しい山の下に転がり落ちた。：あらゆる鳥の鳴き声に私は気を取り戻した。かすかに目を開けると、チヨウセンカラマツの青々とした葉の間から青い空が見えた。その青い空はてのひらほどだったが、私にはそれがどんなに広く見えたか知れない。鷹が一羽そ

の青い空を悠々と飛び回っていた。それを眺めた私はこんなことを考えた。

(ピトンムと一緒に私もあの鷹のように青い空を自由に飛び回ることができないだろうか。きつとあの鳥は恋しくて会いたい私の連隊を思いのままに見下ろすことができるのだろう。)

こう考えると私の胸はいっぱいになった。そしてたまらないほどせつない気持ちになった。私は鷹にそつとささやいた。

「鷹よ！ うらやましい鷹よ！ お前は私の言うことを連隊に伝えておくれ。私たちは死なずに生きているって。連隊が帰って来るまでは絶対に死なないって。鷹よ、そのように伝えておくれ。…」

だんだん私は心を落ち着け始めた。体を動かしてもみた。しばらく後に私は上半身を起こそうとしてぎくつとした。左側の足がずきつと痛かったからだ。やっと体を起こしてみると、軍服のズボンの股が鮮血でべつとりと濡れていた。そして裂けた頭からも血が流れ落ちた。私は急に恐くなった。私まで病

身になったらどうしようという心配が胸を苦しめた。

私はこの不幸な事実を信じたくなかった。私は地面から立ち上がるうとした。何度も立ち上がるうとひどく苦労したが、結局は無駄だった。私は石が散らばっている地面に再び倒れてしまった。意識が昏迷した。私は深い深淵の中に落ち込んでいくような感じだった。…雲がむくむくと湧き上がる。その下にうっそうとした大樹林が展開する。

樹林の中—小屋が現われる。その小屋に向かって〈討伐隊〉の奴等が狼の群れのように押し寄せる。

そして今にもピトンムに襲いかかろうとする瞬間：「あつ！」と言う一声に驚いて私は起き上がった。

そして何も考える余地なく小屋がある方に向かって足を踏み出した。いくらか足を踏み出した私はそれが夢であり、自分の声に驚いて目を覚ましたのだということに気がついた。その時やっと私は深い安堵の息をついて岩にもたれて腰を下ろした。

たくさんの鳥がそれぞれきれいな声を自慢しながら鳴いていた。私が腰掛けた岩の隙間に根を差し込

んで少し曲がつて伸びたクヌギの枝からも鳥の鳴き声が玉を転がすように下に流れてきた。

クヌギの枝には小さなヒワの巣があった。母さんが食べ物を手に入れてきて巢に飛び込むと、ひなたちがそれぞれ口をちゅちゅと開いて鳴く。

母さん鳥は本当に休みなく働く。私の目の前にはふと小屋の中のピトンムの姿が浮かんだ。ピトンムはただ私が帰って来るのだけを目が窪むほど待ち焦がれながら餓えたはらわたを抱えているのだった。私はひどく良心の呵責を感じながらその場から立ち上がった。

私が二本の松の木の下で落ちた松かさをつ拾って小屋に這い下りていく時には既に四方は薄暗くなっていた。小屋の近くまで来た私は泉のところに行つて血のついた顔を洗った。ピトンムに心配をかけないためだった。そして手ぬぐいで頭を包んだ。

小屋の近くで私はしばらく小屋の中の動静を探った。静かだった。私はそつと腹ばいで進んで小屋の入り口の横にうつぶせた。やはり静かだった。

不吉な予感に包まれた私は入り口の柱にもたれながら中に入った。

ピトンムは目を閉じたまま横になっていた。

三つの松かさで夕食を用意した私は部屋の中をいまつを点してピトンムを起こした。彼はびつくりして目を開けた。私だと分かる、彼は体をがばつと起こして「ミヨンファオモニ！」と叫んだ。

私は彼に松の粉を水で溶いたものを出しながら何事もなかったかのように低い声で「早くおあがりなさい。おなかがとても空いたでしょう。」と言って勧めた。

ピトンムは松の汁をしばらく見つめるとぼつりぼつりと話すのだった。

「僕だけでも食べていてどうします。半分ずつ分けて食べましょう。」

彼は松の汁が入った食器を私の方に差し出しながら同じ言葉を繰り返した。立場に困った私は彼にこんなことを言った。

「私は体が悪くないからいいのよ。私は菜っ葉で

も食べれば大丈夫だから。…」

それでもピトンムは頑として聞かなかつた。薄い松の汁の半分の椀をめぐつて私たちは押し問答をして少なからぬ時間を送つた。しかしどうどうピトンムは涙を呑んでその松の汁を飲んだ。

：私たちは二ヶ月と十七日の間（七十七日間）をそのトンファの樹林の中で過ごした。その間のことを全て話そうとしたら余りにも長くなる。だから最後にもう一言だけ言つて話を終えようと思う。

その日も私は山の中を這い回りながら青々と茂つた草の葉を摘んでいた。時は既に四月ごろだった。急に山の下から聞こえてくる異常な騒音に私は耳を傾けた。ぶつぶつと話す声が山の下の方からはつきりと聞こえてきて、枯れ木を叩く音が聞こえてきた。私は我に返つた。私はやつと枯れ木を二本手に入れて「タツ！ タツ！」と叩いた。パルチザンの暗号だった。すると山の下から「ミヨンファオモニ！」という激した声が聞こえてきた。そして一人の人間が急いで山腹をよじ登つてきた。

その人は連隊長だった。続いて連隊の戦友たちが走つてきた。こうしてあれほど恋しんだ連隊はトンファの樹林の中に七十七日ぶりに帰つて来たのである。

その問連隊は言葉で表現しがたいほどの苦難の道歩んだ。ほとんど毎日のように敵と真つ向から戦わなければならなかつたし、奴等の兵舎を奇襲しなければならなかつた。武器と食糧を戦取するためには水火を辞してはならなかつたし、革命の勝利のためには命も惜しみなく捧げなければならなかつた。

しかしそのような日々にも連隊は一時もこのトンファの樹林の中を忘れたことがなかつたという。

連隊長は私の手を握つて言つた。

「信じていました。こうして生きているといつも信じていました！」そしてピトンムは連隊長の横で声を詰まらせて言つた。

「連隊長トンム！ 僕はこのオモニを永遠に忘れることはできません。」

13 中隊の姉

キム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争時期にあつたことである。

私が属していた部隊にリ・スンヂョルという女隊員がいた。

彼女はフアン地方のある地主の家で下女暮らしをした後入隊した若い娘だった。

ひどい虐待と飢えの中で苦しみ虚弱になつた彼女は、尋ねる言葉にやつと答える程度の寡黙な性格だった。彼女が初めて銃を受け取つて抱いた時に唇をぎゅつと噛みながらこみ上げる感激の涙を流した姿が今でも私の目にはつきりと浮かぶ。

一日二日と過ごす間に我々は彼女が経てきた辛い生活のあれこれをさらに詳しく知るようになった。そしてたとえ年のゆかない娘ではあつても他人に劣らず勇敢に戦えるということを感じるようになった。

ユン・テホン

一度はモンガン地方で大道路を行進していく敵を襲撃するために我々が山道の曲がり角に埋伏したことがあつた。

この時彼女は誰にも言われないのに銃の先に銃剣をつけるのだった。

「…銃撃でも充分消滅できる敵なのにどうして銃剣をつけるの?…」と訊いてみた。

しかしスンヂョルトンは何も答えず、近づいてくる敵をにらみつけているだけだった。

「…興奮してはいけないよ!」と重ねて彼女に言い聞かせた。

するとこちら以上にいぶかしかるのはスンヂョルトンの方だった。

「…獣のようなあいつらを銃だけで打ち倒さなければいけないの?!…乳飲み子や幼い子供まで銃剣で

突き刺して火の中に投げ込むような敵には本当に弾ももつたないわ！…銃剣で奴らの心臓を片っ端から突き刺してやるわ。…奴らが悲鳴をあげて倒れるざまを私の目で千べんでも万べんでも必ず見てやるわ。…」激怒した声だった。こみ上げる敵愾心で全身が火となつて燃え上がるように彼女の眼光はぎらぎらと輝いた。

やがて敵が山道の曲がり角にさしかかった時だった。

にわかには山が崩れるような我が軍のすさまじい銃声と炸弾の破裂する爆音が振動した。四列縦隊をなしてきた敵がこちらに目を向ける間もなく道路上にばらばらに倒れていった。

ところがこの時敵に向かって銃を撃っていたスズキトムは、数名の敗残兵が子ねずみのように道端の溝を這つていくのを見た。

「…こいつら！ 絶対に生きて帰さないぞ！…」銃剣を斜めに構えたスズキトムは銃弾のように飛び出していった。

初めて戦闘に参加する幼いトムだと誰が言えようか！

その後には急いで続いた数名のトムたちと共に彼女は日帝の奴らを銃で撃ち、銃剣で突き刺しながらすつかり倒してしまつた。

このように彼女は革命の隊伍に入つてから鋼鉄の闘士に成長していった。その後も彼女は困難な皆さんの戦闘でいつも勇敢に戦つた。

しかし私が話そうと思うのは彼女の勇敢な闘争の姿だけではない。

遊撃隊のトムたちはいつのか彼女を「我が中隊の姉さん」という愛称で呼ぶようになった。

それほどに彼女が革命の同志たちを貴重に思いながらあらゆる隘路と困難を恐れずに戦つた実例は限りなく多い。

一九三八年一月三日だった。

我々は敵の〈討伐〉を退けながらリムガンの密宮を出発した。

この時一部の負傷者たちを護送しながらサムチャ

ヂャ嶺を越えていた我々の前には少なからぬ隘路と難関が横たわっていた。

ここは第一に敵の〈討伐〉が厳しいところだった。そのうえこの年は例年になくひどい寒さと深い雪で東北の山野は覆われていた。

どれほどたくさん雪が積もったか、サムチャヂャ嶺の谷の入り口からは二、三尋〔ひろ。背丈ほどの高さ〕にもなるカラマツさえやと頭が見えるほどだった。

ソルピ〔底に縄などを編んでつけた履物〕を履かなくては一步も歩みを移すことができなかった。

このような険しい道の上に我々は食糧までなくなつて何日も腹をすかし、敵の〈討伐〉が非常に厳しいために火さえ思うように焚くことができなかつた。そのため負傷者たちに湯さえ満足に沸かしてやることができなかった。

頂上に登ると吹雪はいっそう激しくなつた。下手すればはるか谷底の雪崩の中に転がり落ちる危険があった。

この時スンヂョルトンムはとりわけ苦労した。銃を担ぎ背のうを背負つたうえに炊事道具まで重ねて担いだ彼女の荷は非常にかさばつた。そのためまるで帆をあげた船のように激しい風にしきりに駆りたてられた。

トンムたちは何度も彼女に荷物を分けて担ごうと言つた。しかし彼女は終始応じなかつた。

「：スンヂョル姉さん！ どうか荷物をちよつと分けて担がせてください。…」

風に駆りたてられて倒れそうになるスンヂョルトンムに手を貸してやりながらキム・テンマントンムが重ねて頼んだ。

するとスンヂョルトンムはかえつてテンマントンムに言い聞かせるのだった。

「：危険な道だから遅れずに早く歩きましょう。…いつでも敵が現れたら私は負傷者たちを助けてや

らなければならぬし、トンムたちは敵と戦わなければならぬじゃないの。…それなのにこんな荷物を担いでいてどうやって戦うの。…」

しかしスンジョルトンムを助けてやろうというトンムたちも簡単には引つ込まなかった。

何人ものトンムたちがとびかかつて彼女の荷物を奪って分けて担いだ。

「何をするの。…それじゃ私を馬鹿にしているじゃないの。…三日もご飯も炊けず、今では熱い湯一飲みさえ沸かしてやることのできないんだから…
へそんな女が炊事道具を持ち歩いてどうするんだ。いっそ放つてしまえ」と言っているように私には感じられるわ。…早くこつちへちようだい。…」

まだ幼い娘だった彼女は泣きそうにしながら再び自分の荷物を取り戻してから歩き始めた。

彼女の背中に担がれた背のうの上には大きなトタンの容器が風にぐらぐら揺れ、片方の肩に担がれた歩兵銃が歩みを移すたびに厄介そうに見えた。

スンジョルトンムのこのような後姿を眺めるトンムたちは、彼女がどんなに戦友たちの寒くて腹をさせた境遇に胸を痛めているかをいつそう深く感じた。

「…今度日帝の奴らとぶつかつた時にはまず将校の奴をやっつけよう。そしてそいつの拳銃を奪って、スンジョル姉さんの重たい旧式歩兵銃と取り替えてやろう!…」

スンジョルトンムの苦勞をただいくらかでも減らしてやりたい気持ちでテンマントンムはこのように一人つぶやいた。

スンジョルトンムはこのように中隊の姉さんのような女性隊員としてトンムたちの篤い信望を得た。

しばし休息する時にも彼女は背丈を超える雪をかき分けて凍った地面を掘つてくずの根を掘り出して戦友たちの空腹を減らしてやることに努めた。そのため幼い娘の手はいえる間もなくひび割れ、手の指は凍傷にかかつてぶくぶくと腫れ上がったまま引かなかった。もう感覚さえ鈍くなった凍った手で銃を握るうちに金属に触れて皮がくっついてしまうのを、そのまま我慢して見ていることはできなかった。

これは一人や二人のトンムだけの心情ではなかった。彼女を本当の姉か妹のようにこの上ない尊敬と

愛情でもって対する全ての戦友たちの心情だった。

(どうすれば彼女にそんなことをさせずに我々が代わってやることができるだろうか。彼女の手にノロの脂でも塗ってやれないだろうか。…)

このような我々の心情にいつの間にも気づいたのか、彼女は、

「…私の手がどうしたというのよ！ 今に見ていて御覧なさい。…後日革命が勝利してテンマントムやトンファトムがお嫁さんをもろう時には私がこの手で絹の服を自慢げに作ってあげますからね。…」
と言って自然に笑い流すのだった。

そうであるほど彼女が耐えてゆく苦痛を我々はいっそう考え、さらに胸を痛めた。

同志を愛し、全ての苦しみを笑いに替えていく彼女の純粋な気立てと頑強な闘志は、また遠い後の日のことを願うだけではなかった。彼女は艱苦な戦闘と行軍の後にくる短い休息时间にも針を取って座り、隊員たちに鉛筆入れの袋や弾入れのようなものをきれいに作ってくれるかと思えば、膝下まで上がる大

きくて厚い足袋や手袋を作っておいて、トムたちが冷たい道を歩く時には、「足を凍らせないようにしなくちゃいけないわ。」と言いながらきちんと出してくれた。

こうして我々がサムチャヂャ嶺の中腹に登った時だった。

激しい吹雪の中から突然敵の機関銃と歩銃が狂ったように火を噴いた。

危急な瞬間だった。

指揮官の命令によってリ・スンヂョルトムとその他の一部の成員はまず老弱者と負傷者を安全な崖下に急いで退避させ、ほかのトムたちはすばやく戦闘位置を確保して敵情を探った。

敵は吹雪が巻き起こる向かい側の尾根の上と崖の上に軽機を据えて撃っていた。一方ほかの奴らは半円形に包囲態勢を取りながらだんだん我々のいる崖下に迫ってきていた。

状況はだんだんさらに不利になった。

しかし我々はこのような中でも沈着に敵情を探り

ながら、敵の企図と弱点を利用して奴らを掃蕩する
戦闘計画を立てた。

傲慢な敵が我々を包围しようと迫ってくる隙に、
我々は吹雪を利用して奴らが思いもしない崖を這い
登ってまず敵の機関銃手をやっつけようというのだっ
た。

狂ったように火を噴く敵の機関銃が据えられてい
る絶壁を這い登るといのはもちろん容易なことでは
ななかった。

しかしためらっている時ではなかった。

我々は危険を顧みず雪の中に身を隠しながら崖の
上に這い登った。そしてキム・テンマン・トムと私
がそれぞれ敵の軽機射手をやっつけて軽機一丁ずつ
をろ獲した。こうして我が軍の火力は崖下に押し寄
せる敵の頭上に火雷を浴びせることができた。

もちろんその間に少なからぬ危険があった。しか
し我々はこの戦闘で百二十余名の敵（リムガン憲兵
教習隊）を完全に殲滅した。

そして再び行軍をするために隊伍を調べた。

ところがスンヂョルトンムと彼女が護送していた
負傷者二名が見えなかった。

「どうしたのか?!

苛烈な戦闘を経た後なので我々の心配は格別だっ
た。

「スンヂョルトンム!」

「スンヂョルトンム!」

激しい吹雪の中で同志たちを求めて呼ぶ熱い声は
我々の胸をいっそう焦燥させた。

今まで一度も指揮官やトムたちを心配させたこ
とのなかったスンヂョルトンムが見えないので、心
配はなおさらだった。

この時キム・テンマン・トムの手には敵の将校か
らろ獲したヘモーゼル拳銃一丁が握られていた。
それはスンヂョルトンムにやろうというものだけ
だ。

トムたちの切ない叫び声はあちこちに連なつて
響き渡った。

しかし終始スンヂョルトンムの返事はなかった。

このようにしばらく探しまわっていた我々は、戦闘が始まった山のふもとの方から一人の負傷者が這い登る途中でうつ伏せているのを発見した。

彼はスズゴロルトンムが直接護送していた負傷者の一人であるヤン・イチョントンムだった。

我々が彼の傷口を縛ってやつてしばらくさすってやつた後にやつと気を取り戻した彼は、目を開けると声を詰まらせて次のようないきさつを知らせてくれた。

…戦闘が始まったしばらく後にヤントンムは敵弾に当たって倒れた。そして彼が敵弾が引き続き降り注ぐ中で再び頭を持ち上げた時だった。

すぐそばも見分けるのが困難な吹雪の中で負傷者たちの名前を呼びながらさまよっていたスズゴロルトンムが、雪の中に倒れているヤントンムを発見した。

敵弾が雨のように降り注ぐ中を急いで這い寄ってきた彼女は、ヤントンムの片方の腕を自分の首にかかけ、片方の肩を押し入れて担いだ。そして前後から

飛んでくる敵弾を避けながら這い進み始めた。

この時すでにスズゴロルトンムは敵弾で片方のわきの下を負傷した後だった。しかしヤントンムはスズゴロルトンムが自分のひどい傷の苦痛をこらえながら自分を救おうとやつてきたのだとはまだ知らなかった。

ヤントンムは自分のひどい苦痛で目を閉じていたので、スズゴロルトンムがどうして早く走っていかずにもどかしく這っていくのかについても察してみるひまがなかった。

姉さんの背に負われた弟の気持ちそのままだった。彼はスズゴロルトンムの片方の肩の上に体を預けたまま引きずられていた。

その時、「あつ!…」というスズゴロルトンムの急な呻吟の声にヤントンムは再び目を開けた。

その時やつと彼はスズゴロルトンムの片方のわきの下から流れる血が彼女の服を濡らしているのを見、また彼女の片方の足首も敵弾に当たったことを知った。

ヤントナムは余りにも驚いてどうしてよいか分からなかった。

(…いつそ僕は戦って死のうともスンジオル姉さんは救わなくてはいけない!…) という思いにヤントナムは銃をつかんだまま雪の上に転がり落ちてスンジオルトナムを突き放した。

それ以上スンジオルトナムを苦しめることはできなかった。

「スンジオル姉さん!…危険ですから早く逃げてください。…」

するとスンジオルトナムは自分の足首をふりかえってみてからヤントナムの言葉にびつくりしながら彼を引き寄せた。

「だめよ!…あなたがどうやって戦うの?!…」

と言って、片方の手ではヤントナムをつかみ、片方の足と手では雪の中を蹴りかき分けながら再び這い進み始めた。

ヤントナムは自分の背のうの中にある包帯を取り出してスンジオルトナムの傷をしばっていいこうと言っ

ても、スンジオルトナムは応じなかった。

「…もうちょっとだけ行けば大丈夫よ。敵弾が降ってくる中でいつ足を縛っていられるの。…早く私にしっかりとつかまって。…」

ヤントナムはスンジオルトナムの助けを受けながら自分の力の限り雪の中をかき分けて這い始めた。

しかしヤントナムは元々負傷して非常に衰弱していた体だったうえにさらに負傷したので、いくらも進まずに氣力を失い始めた。

そしてとうとう精神が昏迷してしまった…

しばらく後に彼が再び我にかえって目を開けた時だった。自分ではどこなのか見当がつかない大きな岩の横によこたわっているのに気づいた。彼はさらによく自分の周囲を探った。

激しい風も敵弾も心配のない奥まったところだった。彼の目には炊事道具がいつしよに縛つてあるスンジオルトナムの背のうも見えた。ところがスンジオルトナムは見えなかった。そればかりでなくスンジオルトナムの銃もなかった。そしてついさつき誰かが

敵弾がうなり、吹雪が吹き荒れる丘の上に這い登っていった痕跡が雪の上についていた。

「あつ！…スンヂョル姉さんは僕をここまで引張ってきておいて、自分は戦いに行ったのか！…あんなひどい怪我をした体でどうやって戦うというのだろう?!…」

ヤントナムは思わず銃を探ってつかみ、体を起こした。苦痛をこらえる彼の額からは太い汗がぼたぼた落ちた。

「僕も戦わなくては…」

しかし思うように行動できない彼だった。何度も倒れては再び起き上がってヤントナムはスンヂョルトナムが這い登っていった丘を這い登っていた。ところがしきりにくらくらする彼の目の前には、敵陣に飛び込んでいく戦友たちとスンヂョルトナムの姿が浮かんだ。

この時ヤントナムが雪をかき分けながら見上げる丘の上には下に這い下りるスンヂョルトナムの姿がまるで夢の中のようにぼんやりと見えた。

「スンヂョル姉さん！…」

この時スンヂョルトナムはある一人の隊員を雪の上に寝かせたまま片方の手で引つ張りながら降り積もった雪の中を抜け出そうと必死になっていた。

考えれば考えるほど驚くべきことだった。その時やっとヤントナムには全てがはつきり分かった。

あんなにひどい怪我をしながら敵弾が降り注ぐ中に飛び込んでいき、負傷者を見つけ出して引つ張り出すスンヂョルトナムの姿を見た時、ヤントナムはさらに熱い同志的衝撃を感じた。

ヤントナムは自分の傷の苦痛を忘れ、思わずびくくりするような声を挙げながらさらに力いっぱい丘の上に這い登った。

このようにして彼がしばらく丘に這い登るようになった時、スンヂョルトナムは息が切れて言葉は出せずに、ヤントナムに登ってきてはいけないというように二、三度激しく手を振った。

健康な人間ならば一息で駆けて行って手を取り合える近い距離なのに、負傷して疲れた彼らには千里

のようにはるかな距離だった。ヤントナムはスンジョルトナムの手を取って助けてやろうと必死になったが、その場でもがくだけのやるせない心情をどうすることもできなかった。

しかし互いの距離がいくらかささらに近づいた時、スンジョルトナムは疲れきってそのまま雪の中に頭をうずめてしまった。

ヤントナムはいっそうやるせなくなつた。そして彼がそこに着いた時にはすでにスンジョルトナムはほとんど意識を失っていた。

負傷した隊員を引っ張って下りてきた姿勢そのままスンジョルトナムは片方の手を雪の中に深く突っ込み、もう片方の手は負傷した隊員を引き寄せたままかかとを上げてうつ伏せになっていた。そして傷口から流れる血はまだ破れた裾を濡らしていた。彼女はいまだに自分の傷を縛れなかったのである。

これを見たヤントナムは、「スンジョル姉さん……」と声を詰まらせて呼びながら急いで抱き起「こそうと努めた後、我々のいるところに這ってきていたのだっ

た。：

トナムたちがスンジョルトナムを探してそちらに行つた時、彼女はすでに目を閉じたまま冷たい雪の上に静かに横たわっているだけで、キム・テンマン・トナムやり・ドンファトナムがどんなに切なく呼びながら揺すぶつても何の返事もなかった。

我々はスンジョルトナムの前に厳肅に頭を垂れた。自分の傷も生命の危険も顧みずに革命の戦友のため最後に最後まで戦つて倒れたり・スンジョルトナム！

その火のように熱い同志愛と不撓不屈の闘争精神の前に、トナムたちは泣き出しそうになるのをこらえながら唇をかんだ。

そして彼女を静かに抱えて場所を移す時にキム・テンマントナムが泣き出してしまった。

「スンジョル姉さんをどうしてこの地面の中に埋めることができるのでしょうか？」

トナムたちは哀惜の心情を禁じ得ず、スンジョルトナムの手を再び握つた。

奸悪な日帝を退けるためにひびわれた年ゆかない

娘の荒れた手にキム・テンマン・トムは拳銃を握らせてやった。

そして彼女を南方の空、祖国の空が見え、朝には日光が真つ先に差し、春には花が真つ先に咲く日向に安葬した。

その時からすでに永い時日が流れた。

彼女の心臓深く抱かれた美しい歌と夢がすでに現実となった今日、我々は彼女をいつそう追慕するようになる。

想像を絶する艱苦な闘争の道で、同志の苦痛と喜びを自分の苦痛と喜びと思い、同志を危険から救うために自己の生命の犠牲をもためらわなかった彼女の高潔な革命精神は、今日我々の胸をいつそう燃やしてくれている。

14 パルチザンの女将軍

— ホ・ソンスクトンムを回想して —

ファン・スニ

抗日パルチザン闘争時期に私たちはホ・ソンスクトンムの大胆性と勇敢性に対して自分のことのように自慢するのを好んだ。

ある日宿営準備を終えた私たちは、痛快な戦闘談に盛んに興じた。

「まったく、電信柱のてっぺんにいつの間に登ったというのかしら！」

ホ・ソンスクトンムと一緒に食糧工作に行ってきたキムトンムが口を開くや、ざわめいていた場がしばらく静かになった。

「荷物はおそらく私たちの三倍は担いでいたでしょうに！」

彼女はどのようにソンスクトンムの自慢をしなが

ら次のような話をした。

一部落で食糧工作をしてから帰ってくる途中で彼女たちは樹林の中でしばらく休息した。ところが歩哨に立っていたトンムが〈討伐隊〉の奴らが現れたと叫んだ。

ソンスクトンムがそちらのほうをうかがった時には五、六名の討伐隊の奴らが近くに接近してきていた。ソンスクトンムは隊員たちが全部樹林の中に姿を隠すや自分はいつの間にか電信柱のてっぺんに登っていったのだった。

しばらく後に奴らは電信柱の近くに接近してきていた。

ソンスクトンムは機会を逃さずに奴らに手榴弾の

雷を浴びせた。

奴らはそのまま声も立てずにその場でニンジンの皮のように伸びてしまった。

「まったく、どんなにすばやかだったか、リスが来ては鳴いて行くようだったわ。」

キムトンムはこのように数日前にあった話を得意になって言った

話が終わると今度は片手で歩銃を持ち上げる競争が行われた。

三八式歩銃の先を片手でつかんで水平に持ち上げるということはたやすいことではない。みんながやがやと騒いでいるところへ夕食を作っていたソンスクトンムが加わってきた。

「私にはその先に歩銃をもう一丁付けられるわよ。」
このように言うソンスクトンムの自信満々の態度に、

「まあ、大きなことを言って…もしも持ち上げられなかったら夕ご飯はなしよ。」とあるトンムが皮肉った。

「持ち上げたらどうするの。あなたはおなかをすかせる？」

ソンスクトンムは負けずに言い返してにつこり笑ってみせてから、連結させた歩銃を片手で悠々と持ち上げた。

彼女が銃を持ち上げるや私たちはそれぞれ約束でもしたかのように

「わあ、本当にやるんだから將軍だわ！」

このように大胆かつ力の強いことで、彼女を知る隊員たちはよく彼女のことを「赤將軍」と呼んだ。

彼女は幼い頃から児童団の指導を受けた。彼女は組織から教育を受けながら、強盗日帝に対する憎悪と階級的自覚が高まり始めた。だんだん自分が進むべき前途に対する目が開けると、彼女は遊撃隊に入隊することを唯一の希望にしていた。

しかしその時彼女の父親は日帝の奴らが作った自衛団の団長をしていた。そのために父親と彼女との間には鋭い思想闘争が繰り広げられた。彼女は自分の父親に日帝の走狗の役割をやめるように何度も懇

請するように言った。しかし父親はどうとう幼い娘の懇請を受け入れなかった。ある日父親に頑強に言った。

「もしもお父さんがその走狗の役割をやめない日には銃で撃たれると思ってね。」

このような娘の厳しい態度にも父親が動かないのを見ると、彼女はついに家を脱出してサムドマン遊撃区に入った。ここで引き続き活動するうちについて彼女の宿望どおり一九三三年に遊撃隊の戦闘員として入隊するようになったのである。まだ十七歳の若い身ではあったが、ソンスクトナムはこの時すでに人並みはずれて成熟して大胆だった。入隊していくらも経たずに、戦闘のたびの彼女の大胆性と勇敢性は多くの戦友たちの話題に上るようになったのである。

彼女は日が経つほど遊撃隊の鋼鉄のような隊伍の中で成長し、無数の戦闘と苦難の行軍を通じて戦友たちの厚い愛情と高い尊敬を受けるようになった。

彼女は女性の身ではあってもかえって男性隊員た

ちをいつも助けてやった。機関銃手が苦しそうにしている時にはその機関銃を交代して担いでやり、宿営する時には率先して食事の準備をした。

隊員たちがひどく疲れている時には先頭になって娯楽会を開き、自ら踊り、歌を歌って彼らの疲れをほぐしてやるのに努めた。

一九三九年夏に進められたハンチョング戦闘の時だった。

この時彼女が属していた小隊には新入隊員たちが多かった。突撃戦が繰り返されるや戦闘経験がない新入隊員たちはなかなか頭を上げられなかった。この時ソンスクトナムはチマをまくり上げてスローガンを叫びながら猛虎のように先頭に立って突進した。

これに鼓舞された新入隊員たちも飛び出して突撃戦に突き進んだのである。

この戦闘でも日帝の奴らは醜い死体を山積みに残したまま惨敗を喫した。

「立派な指揮官だったよ！」

「ひげがあつたら間違いなく將軍だ……」

戦鬪を勝利に結束させた戦友たちがこんな話を彼女のそばで交わしている時には決まって彼女は

「三十になれば立派にひげも生えるから見てらっしゃい、えへん！」とひげをなでるまねをして笑わせた。このように彼女はいつも戦友たちの愉快な話題の種になった。

ホ・ソンスクトナムについて話す時、私はカンサムボン戦鬪のことを話さざるを得ない。

一九三七年六月三十日の朝だった。キム・イルソン同志の直接の指揮の下に進められたこの戦鬪は、我が戦鬪員たちに特別な大胆性と榮譽感と勝利に対する信念を抱かせてくれた。

キム・イルソン同志の指揮下に六百余名の朝鮮人民革命軍は、ソガン高原カンサムボンに戦鬪陣地を取った。戦鬪のたびに惨敗を重ねた日帝の奴らは、東北に駐屯している部隊では到底朝鮮人民革命軍に立ち向かえないということを自認するや、ラナム第十九師団所屬ハムフン七十四連隊の二千余名の正規

軍を動員した。

日帝の走狗キム・ソグオンはおよそ百台のトラックに兵丁を分乗させ、アムノク江を渡ってカンサムボンに向かつてきた。

この日の明け方歩哨所から敵情の報告を受けたキム・イルソン同志はすぐに山の下の傾斜した稜線にそれぞれの部隊を配置した。

ホ・ソンスクトナムが属した連隊は第一前縁に陣地を取った。この日の朝は雲が低く垂れこめ、濃い霧が山を包んでいた。日が薄明るくなり始める頃歩哨台がある方からけたたましい機関銃の音が聞こえてきた。

霧を利用して敵の先発隊は我々の鼻先に近づいてきていたのである。情勢が非常に危急になった瞬間だった。

その瞬間射撃命令が下った。

我々は敵陣に向かつて復讐の命中弾を浴びせた。奴らはびっくり仰天して後ろへ逃亡してしまった。

この火力戦でもホ・ソンスクトナムはチマを腰ま

でまくり上げて猛烈な射撃戦を展開した。惨敗を喫した日帝の奴らは愚かにも三方向に包囲陣を敷きながら再びかかってきた。

我々は二、三百メートルの射撃圏内に奴らを追い込んで百発百中の命中弾を浴びせた。

奴らは再び山になつて倒れた。倒れる奴らを眼下に見ながら戦う我が戦闘員たちの士気は天を衝くように高かった。

しかし敵も手ごわかった。奴らは山になつて倒れた自分たちの死体を踏みつけながらかつとなつてかかってきた。

第一前縁高地の最先頭で奴らを沈着に接近させていたソンスクトナムは、奴らが顎下まで接近するや、「まさにお前たちこそが私たちの祖国山川を強奪し、父母兄弟を苦しめる敵だ。さあ、復讐の火雷を受けてみよ！」と叫びながら手榴弾の雷を浴びせた。それに続いて彼女のそばに埋伏していた六名の女隊員たちも奴らに手榴弾の雷を浴びせた。

山地の四方で奴らをなぎ倒す手榴弾、擲弾筒、機

関銃、歩銃の音が天地を震わせた。奴らは寄つてきては腐つた垣が崩れるように倒れた。

奴らは攻撃するたびにこのように惨敗を喫した。

奴らはやむなく東側の川のほとりに配置していた兵力まで差し向けて最後のあがきの攻撃を加えてきた。

このように苛烈な戦闘のうち夕方になつた。垂れこめていた雲から雨粒が落ちると土砂降りに降り始めた。

やがて奴らの最後の突撃のラツパの音が谷間中を騒がした。

ところがまさにその時に我がラツパ手たちはいつせいに「エアラン」を悠々と吹き鳴らした。狂つたような奴らの突撃ラツパに答えるかのように響き渡る私たちの「エアラン」のラツパに敵はただ啞然として顔色を失つた。

ホ・ソンスクトナムはこの時そばにいた女隊員たちとともにラツパの音に合わせて「エアラン」を声高く歌い始めた。

アリラン　アリラン　アラリヨ
アリラン　峠を　越えてゆく。

最後のあがきをする敵のわめき声に答えて悠々と歌う我が女隊員たちのアリランの歌声は奴らの肝胆を寒からしめた。

ソンスクトナムは歌を歌いながらも恐ろしく光る視線で敵をにらみつけていた。一日中最前線で敵の突撃を退けた彼女の全身は弾煙にくすぶっていた。

憎悪と復讐で霜のついた銃剣のように光る彼女の瞳からはそのまま敵撃滅の恐ろしい炎がめらめらと燃え盛っていた。

奴らは歌声とその恐ろしい氣勢に圧迫されながらも〈督戦隊〉の銃口に脅されてあたふたとかかってくる。

ホ・ソンスクトナムは再び歯で手榴弾の安全ピンを抜きながら奴らを鼻先まで接近させていた。顎下まで敵が寄ってきて、まさにキム・イルソン同志がこの戦闘を指揮しておられるということを考える

と、彼女の心は丈夫だった。彼女は敵が最短距離まで接近してくるや、

「突撃前へ！」と叫びながら殲滅の手榴弾を投げた。敗走する敵を追撃して最先頭で反突撃戦に立った。彼女のあとに続いて堰を切ったように我が部隊が突進した。

私たちの反突撃部隊を援護する機関銃がいつそう強く火を吹いた。

私たちはこのように奴らの〈三面包囲攻撃〉を完全に挫折させた。

幾人も残らない敵は死体を回収するまもなくちりぢりに逃げ出してしまった。私たちはこの戦闘で千五百余名を見事に殲滅した。このように奴らは我が朝鮮人民革命軍の前に大惨敗を喫してしまった。

この勝利はひとえにキム・イルソン同志の卓越した指揮によって達成されたのである。

このようにソンスクトナムはこの戦闘でも〈ホ将軍〉という別号のとどりの英雄性を発揮した。

無数の戦闘と苦難の行軍が連続する日々が流れて

いった。

一九三九年八月朝鮮人民革命軍はへソ連を武装で援護しよう！というスローガンの下に日帝に新たな打撃を加えることになった。この時我が部隊はハリンゴルに侵攻した日帝に打撃を加えるためにこのスローガンの下にテサハーテヂャンガン戦闘を進めた。

テサハーテヂャンガンはアンドとミヨンウオルグの中間にある城市である。当時アンドとミヨンウオルグはハリンゴルに侵攻した敵の後方力量の集結処だった。そのために我が人民革命軍部隊は奴らの両方の力量をテサハーテヂャンガンに誘引して殲滅する計画だった。我が部隊は八月二十三日早朝から二日間にわたつてこの戦闘を進めた。私たちはこの戦闘で予期したとおりに敵に甚大な打撃を与えた。

二十三日戦闘を無事に結束させた私たちの一部の部隊は指揮部とともにトンヤントウンに入った。ここで私たちは夕食をして次の日の戦闘の準備をする計画だった。この時ホ・ソンスクトナムは一人の年

取った隊員とともに城門の中で歩哨に立っていた。ところが薄暗くなると急に敵のトラックが現れた。

事態は緊急だった。早く手を打たなければ指揮部が危険な状態に陥るかもしれない。ソンスクトナムは一緒に歩哨に立っていた年取った隊員に命令するように言った。

「早く指揮部に走って行って知らせてください。」

「あなたが行きなさい、私が奴らに銃で対抗します。」

年取った隊員は死を覚悟する荘厳な任務を自分が引き受けると言い張った。しかしソンスクトナムは譲歩せずに無理やり彼を指揮部まで走らせた。そして指揮部が無事に脱出するまで単身肉薄戦をすることを覚悟した。

敵のトラックが近づくとソンスクトナムはいつものまにか命中弾を浴びせ始めた。

これに慌てふためいた奴らは自動車から降りるやあちこちに埋伏して抵抗し始めた。

ホ・ソンスクトナムが敵の不意の襲撃を迎え撃つ

て戦う間に指揮部の成員たちは無事に高地に登った。指揮部がすでに安全な山の高地に到着した頃に自分も接戦をやめて山に登ろうとしたが、すでにこの時彼女は足に重傷を負っていた。

到底動くことができなくなった彼女は、奴らに生け捕りにされるよりいつそ戦って死のうと決心した。彼女は自分が持っている二百五十余発の歩銃弾が尽きるまで戦った。

銃弾がなくなると彼女は手榴弾を抜いて握り、城門の横にうつぶせていた。彼女の対抗射撃が止むと、奴らは死んだものとはばかり思つて群れになつて寄つてきた。

自分の近くに敵が押し寄せてくるやソンスクトンムは最後の手榴弾を破裂させた。

襲いかかつてきた敵はそのまま重なつて倒れてしまった。

その恐ろしい爆音とともにソンスクトンムはもう動かなかつた。

このようにいつも戦友たちから「女將軍」と呼ば

れながら愛情と尊敬を受けていたホ・ソンスクトンムは壮烈な最期を遂げた。

我が部隊は彼女の復讐戦を計画した。夜の間にテサハ部落に押し寄せていった敵が、夜が明ければミンウオルグのほうへずらかるだろうと看破した指揮部では、大道路の横の曲がり角に埋伏することにした。

夜が白み始めると、予想したとおりブルンブルンという自動車の音が聞こえてきた。

我が埋伏班員たちは復讐の歯をきしらせながら自動車が見えるのを待った。ついに敵を乗せた自動車が最速度で走ってきた。我が埋伏班員たちは機会を逃さずに埋伏圏内に入った自動車に命中弾を浴びせた。

そして我々は稲妻のように飛び出して奴らをすつかり打ち倒してしまった。

このように私たちはソンスクトンムの仇を千倍万倍に討つてやった。

その後分かつたことだが、その部落の人たちも彼

女の英雄性と高貴な精神に感嘆したあまり、彼女の死体をひそかに隠して埋めておいて、一九四五年に解放を迎えるや盛大に葬礼をとり行った。この村の人民は名も知れぬ彼女の墓の前にへ英雄的に闘争した遊撃隊女隊員の墓」という大きな墓碑まで立てた。

このようにパルチザンのへ女將軍へホ・ソンスクトンは二つとない自分の生命の最後の血の一滴まで尽くして二十五歳の甲斐ある青春を祖国に捧げた。朝鮮が生み、キム・イルソン同志が直接育成したパルチザンの女性英雄は死んでも、祖国に捧げた彼女の不屈の闘志と革命思想は、今日チョンリマ（千里馬）で駆ける我々の現実の中に花咲いている。私は共和国の無数の女性英雄たちに接するたびにこのように思う。

キム・イルソン同志の偉大な革命精神を受け継いだ無数の女性たちがホ・ソンスクトンのように革命と首領のために、今日工場と鉱山で、人民軍隊で、協同農場でチョンリマの大高潮を引き起こし進んでいる。

15 未来の幸福のために

リ・ヨンスク

私たちは一九三四年冬からキム・イルソン同志が
領率される抗日遊撃隊にずっとついて歩きながら援
護活動を行った。

テヨプチャとボマヂョンヂャの樹林の中からスパ
サンヂュとソナマの密林の中に行く先々で私たちは
密営をはって遊撃隊と一緒に暮らしてきた。

奴等の〈討伐〉がひどければ私たちは再びこの樹
林からあの樹林へと移って行かなければならなかつ
た。

このようにして私たちは一九三八年の冬まで過ご
してきた。

一九三八年、この年は私たちにとって非常に困難
な時期だった。

当時遊撃隊によって甚大な打撃を受けた日帝は、
ポチョン、プグム、ホリム地方に〈討伐〉拠点を置

き、大々的な兵力を動員して私たちの密営を侵襲し
てきた。そのため私たちはそれ以上後方密営に残っ
ていることはできなくなった。

このような条件の下でそれまで後方密営で生活し
ていた私たち後方の家族たちは一九三八年十二月に
軍部の指示によってここタハルラヂュ密営に集まっ
てきた。

その時私には母と四才になった娘がいた。

私たちはここから再び安全地帯に移って行くこと
になっていた。

ところが上部からは戦える人は武装隊伍について
行っても良いと私たちに言った。

この言葉を聞いた瞬間私の心は、キム・イルソン
同志が領導される抗日遊撃隊に入隊できるという喜
びで高鳴った。

私の前には遊撃隊伍に従うか、そうでなければ母と幼い子について安全地帯に行くかという二つの道が置かれていた。

私はためらいなく前者の道を選んだ。私は私の家族たちにあれほど大きな苦痛をもたらし、私の父を殺した奴等に必ず復讐しようと固く決意を固めたことも一度や二度ではなかった。そうでなくてもいったん革命のために立ち上がった以上、たとえ女の身であっても直接手に武器を取って奴等と戦いたかったのである。そんな私は必ず遊撃隊に入隊する機会が来るはずだと固く信じていた。

私はあれほど願っていたことが実現して遊撃隊に行くようになったのだと考ええると、胸がときめいて到底心を鎮めることができなかった。

しかしいざ出発しようとする、家族たちと別れるのがまた名残惜しかった。しばしでも離れては生きられないようなこの人たちと別れなければならぬと考える時、そしてこの道がいつ再び会えるか分からないそんな道なのだと考える時、私の心はたま

らなく寂しかった。

その日の夜私は最後の家族と一緒に寝床に就いた。私はいろんな思いで到底寝付くことができなかった。

出発する前に幼い子に何かしてやりたくて、私は再び起きて座り、荷物をほどいた。荷物をほどいて布切れを探す私の目の前には、吹雪が吹き荒れ、骨をえぐるような寒さに、続けて三日もおなかを空かせた母親の背に負われて、おなか为空いたと泣いていた幼い子の哀れな姿が浮かんでくるのだった。

私は幼い子を何とかしてちよつとでも温かくしてやらなければという思いで、綿入りの足袋を繕うことにした。私は綿入りの冬服からすっかり綿を抜き取り、布切れを集めて幼い子の綿入り足袋を作り始めた。しかし足袋を作る私の手は震えてちゃんとかめなかった。この夜が明ければ明日はこの子と永遠に別れるような気がして心はしきりに泣きだしそうになった。

私は眠っている子供の顔を穴のあくほど見つめたが、見れば見るほどなお見たくなる気持ちをどうす

することもできなかった。泣いていても敵が来るとい
う言葉さえ聞けばびたっと泣きやんで私のそばに黙つ
て駆け寄って抱かれたこの子、敵が銃剣で私を脅し
た時にも、その小さな手で私をぎゅゅとつかんで胸
に顔を埋めながらしがみついていたこの子と私がど
うしてしばしでも離れて暮らすことができるという
のか！

私は何も知らずに眠っている幼い子を穴のあくほ
ど見つめながら、子供の頭をなでてやったり、口を
合わせたり、頬をさすってやったりした。眠ってい
る子供の息の音と温かい体温が私の胸に情愛深くし
みこんだ。すでに夜はかなり更けて明け方が近くなっ
てくるようだった。私は針を動かす手を早めながら、
この夜がもうちよつと長かったならばと願った。

時間は容赦なく流れ、過ぎし日の追憶は絶え間な
く連なつて浮かんできた。

〈討伐隊〉の奴等が襲つてきて私の父を銃殺し、
母に乱暴を働きながら私たちを引つ張つていったこ
と、遊撃隊に従つて奴等の〈討伐〉を避けてあの険

しい樹林の中を抜けて歩いていったことなどが走馬
灯のように目の前を過ぎていくのだった。

その中でも忘れようと忘れられない革命闘士キ
ム・チュナトムのあの崇高な姿が思い浮かんで私
の胸はいっぱいになった。そして彼の声が私の耳元
で今にも響くようだった。私は目を閉じていつのま
にか数年前の回想に深くふけつてしまった。：

それは一九三六年の晩秋にあつたことである。当
時私は五名のトムたちとともにテヨプチャ区から
二里離れたウアンスピョンという谷間に縫衣隊工作
のために密営をはつていた。

ところがある日ここで〈討伐隊〉の奴等の襲撃を
受けて私と他の五名のトムたちは逮捕され、トサ
ンヂュ監獄に監禁された。

奴等は私たちに数日間ひどい尋問を尽くした末に、
「何のために山でそのような苦勞をするのだ。街に
下りてきて家族たちと一緒に平穩に暮らしたくない
のか。早く山に行つた夫たちに手紙を書いて連れて
こさせる。」と言いなから懐柔し始めた。

私はそいつらの言うせりふが余りにもとんでもない呪わしいことだったので、「山で生まれて山で育った人間がどうして街で暮らせるのか。」と皮肉った。

奴等は一九三七年の正月には〈宴会〉まで開いて私たちに〈新しい生活〉を重ねて強要した。

そうしながら奴等は〈パルチザンの隊長〉を連れてきたが、彼の健康を回復させるために病院に入院させたので、お前たちが会って看護してやらなければいけないと私たちに言った。

〈パルチザンの隊長〉という言葉に私たちの胸はどきっとした。(本当にパルチザンの隊長が奴等に逮捕されてきたのか?)このように考えると一刻も早く駆けつけたかった。しかし一方奴等が何か奸計を企んで私たちをだまそうとしているのではないかと疑心も少なからず浮かんだ。私たちは奴等の強要にやむを得ず従うふりをしながら、びくびくした気持ちを抱いて〈パルチザンの隊長〉のところにいった。行ってみるとそこは病院ではなく、病監だった。私たちはどきどきする胸を抑えながら

病監の扉の前に近づいた。どんなことが私たちの前で起るのかという思いで私たちの心は震えた。疑惑と恐怖が入り混じった気持ちで静かに扉を開けて入った。瞬間血なまぐさい臭いが鼻をつんと突いた。

部屋の中は薄暗かった。部屋の中を注意深く探るうちに一隅に目が届くと、私はどきっと驚かざるを得なかった。ただセメントだけの床に藁を敷いて、雑巾のようにぼろぼろになった毛布で半身を覆った、骸骨のようになった人が横たわっているではないか!

この時私の頭には(狡猾な奴等が私たちを死んだ人間が横たわっている部屋に押し込めて閉じ込めようとしているのではないか?)という考えもとっさに浮かんだ。

その次の瞬間、私は横たわっている人が本当に私たちの人間に間違いないと分かると、勇気を出して一歩一歩その人のところに近づいた。横たわっている人の顔は血と傷で見分けるのが困難だった。服はずたずたに破れ、現われた肉は赤黒く腫れ上がっていた。やけどを負ったうえにひどい拷問に苦しめら

れたのに違いなかった。彼は口をぎゅつとつぐんでいた。歯を食いしばってひどい苦痛に耐えているのに違いなかった。私はその顔を注意深く眺めた。見れば見るほどどこかできつと見たことがあるそんな見覚えのある顔だった。

しばらく後に私は彼の体を抱きしめてすすり泣き始めた。彼は勇敢な遊撃隊員で、私たちの後方密営にしょっちゅう出入りしながら嬉しい消息を伝えてくれたキム・チュナトナムだった。

「あつ！ キム・チュナトナム！」私は思わず大きな声を挙げながら彼を呼んだ。チュナトナムは目を開けた。彼は喜びと驚きの眼差しで私たちをよく見ると、再び目を閉じて呻吟の声をあげた。

私たちはこの時初めて奴等の陰険な術策を知ることができた。奴等は私たちをここに送ることで、私たちと私たちの夫たちの運命が、共産主義者の運命が結局はどうなるかをしっかりと見ろというのだった。そのようにして私たちに恐怖を与えることよつて私たちの心をくつがえそうという陰険な術策だった。

た。

私は激憤をこらえきれずに涙を飲んだ。すぐにもこの魔窟を飛び出してこの恨みを百倍千倍に晴らそうと決心した。

私たちが皆黙ってチュナトナムの顔を見つめていると、しばらく後に彼もそつと目を開けて私たちをしばらく眺めてから、裂けた唇を震わせながら、やつと聞き取れるぐらいの低い声でぼつりぼつりと話すのだった。

「奴等が…私をこのようにしたのです。…」そして彼は歯ぎしりした。彼の両目には憎悪の炎が燃えさかり、全身に痙攣を起こした。私たちは急いで彼を鎮静させ、手ぬぐいを冷たい水で濡らして額に載せてやった。

彼は私たちが泣くのを見ると、泣いてはいけなうと言いつつ、奴等に絶対に屈服してはならないことと、共産主義者らしく最後まで闘わなければならないことと話した。彼の一言一言は私の胸がいつぱいになるほど響き、私は声が詰まって何も言

えなかつた。

病監から出てきた私たちはその日の夜彼の姿を目の前に描きながら一晩中眠れなかつた。火のように熱い彼の言葉、人の胸を掴んで放さない彼の言葉は、私の心の中に無尽蔵の力と勇気を湧き立たせたのである。

このように奴等が企んだ術策は逆効果をもたらしていたにもかかわらず、これに気づかない敵は次の日からずつと一人ずつチュナトムの部屋に送り込んだ。

ある日私は再び病監に入るようになった。しかしこれが私が彼に会える最後の機会になろうとは知る由もなかつた。

チュナトムは私を自分の横に座らせて手をぎゅつと握つて優しくなでながら言うのだった。

「トナムたちに会いたい。：彼らが恋しい。：戦友たちと一緒にこれ以上闘えずに死ぬのが悔しい。本当に残念です。：しかし私は泣きません。：死ぬまで堂々と生きる積もりです。：革命がそれを私に

要求しているのですから！ それを守るということが私にとつては大きな幸福です。：」

このように話す彼の顔には紅潮が巡り、笑みの浮かんだ眼光は輝いていた。その後私たちは再び彼に会うことはできなかつた。

深い回想にふけていた私は窓が薄明るくなる頃にやつと回想から覚めた。

私は両手を合わせて固く握り、心の中で固く誓つた。キム・チュナトムは私たちと私たちの後代の未来の幸福のために闘つて死んだ。彼は死ぬ最後の瞬間まで闘争の中に幸福を求めた。

私も彼のように闘争の炎の中に幸福を求めよう。心を大きく持つて、ただひとえに彼があれば願いに願つた未来の幸福のために闘いの道を堂々と進んでいこう。それが私のかわい子供、私の愛する母を本当に喜ばせる道ではないか！

このように決心すると、私の胸は膨らみ、翼の生えた鳥のようにふわふわと飛ぶようだった。

私はその日の昼間出発の準備を終えて、母に遊撃

隊伍についていくことになったと話した。それまでまさか私が離れはしまいと思ひ、またそのように信じようと努めてきた母は、私のこの言葉を初めはそのまま信じようとはしなかった。大切に伸ばしてきた垂らし髪を切つて母に記念に差し出しながら、

「オモニ、これを受け取つてください。そして勝利して再び会うその日まで、どうかお体を大切にしてください。」と言つた時やつと私の決心を信じてくれた。そして母は涙を流しながら、

「子供は私が引き受けるよ。安心して行つて立派に戦いなさい。」と言つて声を詰まらせ、それ以上言葉を続けることができなかつた。

私は子供の古いチマを記念に持つていくことにして荷の中に入れた。そして子供に縛入りの足袋を履かせ、日が暮れると私たちは遊撃隊員たちと後方の家族たちが互いに別れることになっている川辺に向かつた。私の背中に負われた子供は時々寒くて目を覚ました。私はそのたびにもうちよつと行つたらおばあちゃんに負ふさつて行かなければいけない、泣

いてはいけなひと言ひ聞かせてやつた。

實際〈討伐隊〉の奴等に発覚される心配があつて、話も耳打ちでする状態だつたので、幼い子の泣き声は禁物だつた。うたた寝から覚めた子供は、私が言い聞かせるたびにすすり泣くのをびたつと止めて静かにしていた。そして泣かないと返事までした。この言葉を聞く私の心は痛んだ。

私たちは深い山林の中の雪道をかき分けながらおよそ三、四里も歩いてきた。私たちはそこで互いに別れるようになった。

私は子供を母に渡して背負わせてあげた。娘はその時目を覚ましたが、黙つて祖母に負ふさつて頭を背中に埋めていた。

私は母にどうか気をつけていってくださいと言つてその前におじぎをした。そして私の子を最後にもう一度見つめた。その瞬間に、涙を流すまいと何度にも心に決めていたのに、絶え間なく流れ出る涙を私は止めることができなかつた。しかしこの涙は悲哀の涙ではない。希望と幸福を約束する熱い誓ひの涙

でなくてどうしようというように、私は母の胸に頭を埋めて泣き続けた。母は私の頭をなでてくれ、涙をふいてくれながら、「きつと生きてまた会おうね。その日だけを信じて力強く生きていくよ。」と言った。私たちは別れた。

雪に覆われた河の向こうに遠く消えるその黒く点々とした人々の後ろ姿を眺めながら私は心の中でこのように叫んだ。

「皆さん！ さようなら。良い日が必ず来ることを一時も忘れずに生きていってください。その日のために！ 私たちの美しい未来のために、この身は歯を食いしばって闘い抜きます。敵を討ちます！」

16 遊撃隊の娘

リ・ヂョニン

私がリ・ギョンヒ同志を知ることになったのは、一九三三年ヨンギル県ウイラングでだった。

その時十七歳だった彼女は、年よりもどこか幼く見える天真爛漫なかわいらしい少女だった。

しかし彼女は誰にも劣らぬ剛毅な闘志と革命に対する忠実性を持った闘士だった。

私が彼女と一緒に活動していたある日の夜だった。自衛隊室の前につないでおいた馬が夜中にどこにも見当たらなくなった。

トンムたちは馬を探そうとあちこち飛び回り始めた。しかし皆馬を見つけられずに手ぶらで帰ってきた。ところがいつのまにか馬は再び元の場合に戻ってきてブルルと鼻を鳴らして立っているのを発見して、皆驚いた。私たちは馬をしげしげと眺めた。手綱がほどかれているところから見、誰かが夜中に

馬を引いていったのは明らかだった。そればかりでなく、馬の全身には汗がびっしり浮かんでいた。

どういう訳かさっぱり分からなかった。ところがまた不思議なことに、片方の足を怪我して自衛隊室で臥せていたギョンヒ同志もどこに行ったのか姿が見えなかった。その時やっと私たちはその訳を推察するようになった。そこで私たちは村の入り口にある歩哨所に行ってみた。案の定ギョンヒ同志はそこに行っていたことを知るようになった。こんなことが起こったのには次のようないきさつがあった。

ギョンヒ同志は自分が足を怪我して数日間活動できなくなったのを悔しく思いながら、責任者に望遠哨勤務にでも立たせてくれと重ねて提起した。

こうして望遠歩哨勤務に出るようになった彼女に、自衛隊の幹部たちは馬に乗って行かせたのである。

しかし彼女は馬に乗っていく途中で馬を送り返して、自分は歩いて歩哨所に行ったのである。

かわいらしくて天真爛漫に見える彼女だったが、このように彼女の胸の中に燃えている敵に対する敵愾心は、彼女をしばしも闘争から退かせなかった。

彼女の故郷はハムギョンブクト（咸鏡北道）のある山間の村だった。貧乏ではあっても善良で勤勉な彼女の父母は、一年中血汗を流しながら背骨が曲がるほど働いても、ぼろをまとい腹をすかせるのを免れることはできず、増えるのは借金ばかりだった。そんなある日、「借金を返さないならおまえの娘を連れていって売り飛ばすがどうだ」という地主の督促を何度も受けた。家族は皆涙とため息の中で日々を送った。そのうちにととう彼女の父母は家族を引き連れて夜中に住みなれた故郷山川を去ってトウマン江を越え、ヨンギル県ウイラングに移ってきた。しかしこどもギョンヒの一家が安心して暮らせるどころにはならなかった。悪辣な日帝とその走狗たち

は、この東北の地にまで押し寄せて私たち人民を苦しめた。ギョンヒの父母は奴らの耐えがたい搾取と抑圧に反対して闘ううちに無念にもこの世を去った。

特に幼いギョンヒ同志の心臓の中に日帝に対する燃えるような憎悪と復讐心をかきたてたのは、一九三一年ブアムドンで起こった敵の残忍無道な暴行だった。不意にこの部落に襲い掛かってきた〈討伐隊〉の奴らは、家々に火を放ち、逃げ遅れた人民を手当たり次第に虐殺した。

この時樹林の中に隠れていたギョンヒは、悪鬼のような奴らが襲ってきて、自分の祖母と祖母の背に負われた四歳になった幼い弟を銃剣で刺して燃える家の中に放り込んで殺した事実を知りようになった。ギョンヒは地面をひつかき草をかきむしりながらのどが裂けるほど泣くうちにそのまま気を失ってしまった。

彼女が再び気を取り戻した時、そこに駆けつけてきた彼女の兄は、彼女を抱き起こしながら言った。

「…ギョンヒや！…敵を忘れずに闘わなくちゃい

けない。僕たちの手で仇を討たなくちゃいけない。…」

「お兄ちゃん！…百倍千倍に仇を討つわ。…」

その後兄妹はこの厳肅な決意を抱いて一心全力で革命の道で水火を辞さずに敵と闘った。

その次の年の八月だった。再び敵が村に押し寄せた時、共産党員であった彼女の兄は奴らの蛮行から人民を救うために敵と勇敢に闘って犠牲になった。

村の家々が燃えてしまい、人々が悲憤に浸ったその日、プアムドンでは犠牲になった同志たちと父母妻子たちを追慕する集会があった。

この時十六歳だったリ・ギョンヒ同志は、悲憤に包まれて真つ先に群集の前に歩み出た。

「皆さん！」

やや震える声で群衆に向かって叫ぶ彼女の目からは炎が起こるようだった。

「…私は今日たった一人しかいない兄まで失いました。…愛する父母も、年老いた祖母も、かわいい弟ももう私にはいません。私は二度とこの人たちに会うことはできません。…」

幼い彼女を眺める人々の胸は張り裂けそうだった。集会に参加した人々は皆すすり泣き始めた。

この時ギョンヒ同志のしつかりとした声が響いた。

「…皆さん！…泣いてはいけません！ 私はもう泣きません！ 私たちが泣いているのを知れば敵は喜ぶではないですか。…私の兄はいつも私に心が弱くては敵と闘えないと言っていました！…」

…皆さん！ 私たちは闘わなくてはいけません！ …奴らが私たちを一人殺すならば私たちは奴らを十人、百人殺して数百倍、数千倍に復讐しなければなりません。

私たち人民の血汗を搾り取り、私たちの父母兄弟を手当たり次第に虐殺した敵を私たちはどうして生かしておくことができますか。…

私たちは皆力を合わせて敵と勇敢に闘わなければなりません。」

追悼集会が終わったその道でギョンヒ同志は村の青年たちといっしょに遊撃隊を訪ねていった。

遊撃隊では彼女の年齢が低すぎるからと受け入れ

るのをためらった。

ギヨンヒ同志は何日も続けて遊撃隊の幹部たちに付いて回りながらせがんだ。

「：私はきつと日帝の奴らと闘います。どうか遊撃隊に入れてください：私はどんなことがあっても仇を討たなければなりません！：」

遊撃隊の幹部たちは初めは彼女に言い聞かせてみたり、だめだと突っぱねたりしたが、彼女の火のように熱い情熱に感動して、ついに根拠地自衛隊工作を許諾し、しばらく後には正式に遊撃隊に受け入れた。

根拠地自衛隊に入隊して初めてトルン(旧式歩銃)一丁を受け取ったギヨンヒ同志は、あまりにもうれしくてそれをしばらく手から離さなかった。

ほかの人たちが皆寝た夜中にも彼女は一人起き上がったては、銃を分解結合してみながら銃をうまく扱えるように努力した。そのためにその後彼女は銃をうまく撃つことで、この遊撃隊と自衛隊で指折り数えられるようになった。

彼女は銃をうまく撃つばかりでなく、戦闘の場でもいつも勇敢だった。

ある日川を越えて押し寄せてくる敵の自衛団の奴らと戦った時のことである。

ギヨンヒ同志はこの日初めて戦闘に参加した。

敵が我々の埋伏線に入った時に、敵に群れ死にを与える殲滅戦が始まった。

前に押し寄せてきた敵は皆倒れ、後ろからきた奴らの中でかろうじて生き残った奴らは慌てて退却しようとした。この時にギヨンヒ同志は初戦闘にもかかわらず一発の銃弾も無駄にせずに敵を撃ち倒し、逃亡する奴らまで追っていつてついにさらに二人も撃ち倒した。

彼女の勇敢性は一九三三年秋のウアンウグ戦闘でも立派に発揮された。この日ギヨンヒ同志はもう一人の女性隊員とともにブルグンラチャ山のとっぺんで歩哨に立っていた。根拠地に押し寄せてきた敵は、ブルグンラチャ山のとっぺんにいるのが女性隊員二人だけだと知るや、見くびって一目散に這い上がり

始めた。

ところが山が険しく傾斜が急なので、敵が這い上がるのできる道は一本しかなかった。

まさにこのような地形条件を計算したギヨンヒ同志は、道の要所にうつぶせて敵をにらみつけながら、彼女の仲間に洋砲に弾を込めてくれと言った。

ギヨンヒ同志は這い上がる奴らを正面から照準して撃ち倒しては、別の銃を受け取ってまた別の奴を撃った。このように横で仲間が弾を込めてくれる洋砲二丁で続けざまに銃を撃つ彼女は、あたかも連発銃で射撃するかのようだった。

相手が女で、それも二名だけだと思って、敵は初めはむやみにかかってきたが、思いのほかたくさんの死者を出すや、それ以上這い上がる気を起こせずには頭をうつぶせた。

ギヨンヒ同志はこの際に炸弾をほどいて前に置き、さらにしつかりと戦闘準備を整えた。

敵も簡単に退きはしなかった。奴らはしばらく後に再び高地の上に這い上がり始めた。

今度は奴らを近い距離まで接近させてから、ギヨンヒ同志はその場からぱつと立ち上がって炸弾を力いっぱい投げた。

急な傾斜を這い上がるうとあがいていた奴らは、群れになって倒れていった。

ギヨンヒ同志は炸弾を投げる合間合間にまた大きな石を転がし落として、高地の下でまごまごしている奴らまで肝をつぶさせた。

こうして敵の一個中隊がほとんど壊滅し、やっと生き残って逃亡した奴らは幾人もいなかった。

根拠地にいた遊撃隊員たちが銃声を聞いて駆けつけてきた時、ギヨンヒ同志はすでに戦闘を終えて自分の仲間と一緒に敵の武器を整理していた。

その後一九三七年リ・ドサン部隊を全滅させたクムチャン戦闘、ムサン地区木材所襲撃戦闘などでも彼女は勇敢に戦って数多くの敵に群れ死にを与えた。

彼女は戦闘のたびにこのように獅子のごとく勇猛であったばかりでなく、いったん戦闘が終われば女性らしい繊細な手並みと真心を尽くして炊事隊員た

ちと裁縫隊員たちを助けてやりながら、歌と踊りで戦友たちの戦闘指揮をいつそう鼓舞した。その後のある日だった。

私はリ・ギョンヒ同志と一緒に食糧工作に出かけたことがあった。その時私たちは何も食べられないまま四日間歩き回った。

私たちは空腹でそのまま芝生に力なく横になっていた。私たちが空腹でそのまま芝生に力なく横になっていた。

こうしてどれだけ時間が流れたか。：

私は口になんか触れたのを感じてやっと目を開いた。

私の横に座っていたギョンヒ同志は、口元にやさしい微笑を浮かべて

「お姉さん…さあ、これでも食べて元気を出しましょう。」とまるでなだめるように言うのだった。

彼女は自分が食べずにとっておいいた塩の袋を開いた。

彼女はいつのまにかナムル（食用になる山菜、野菜、野草など）を取って鍋でゆがいて持ってきたの

である。

彼女を眺めた私は彼女の手をぎゅっと握った。

あらゆる面でそれこそ姉の役割をすべき私が、年のゆかない彼女の世話を受けるようになったのは恥ずかしいことだった。

敵を憎み、人民を愛する彼女の熱情は、根拠地内の人民を助けるのでもよく表現された。

彼女は歩哨勤務を交代して疲れた体で帰る途中で、道端の幼い子供を見れば、そのまま通り過ぎはしなかった。

「…あら、あんたどうしてここに一人で出てきているの…敵が犬のようにうるつきまわってどこでも銃を撃って襲ってくるのに…」

と言つては子供を抱いてその子の父母のいるところまで必ず連れて行ってやった。

また荷物を担いでいく老人や、重い物を頭に載せたオモニ（子供のいる女性）にあった時には、彼女はどんなに疲れた時でもそのまま通り過ぎてしまうことはなかった。

「：私もそっちの方へ行くところです。：」と言つては、必ず助けてやつた。

そのため根拠地の人民は、

「腹こで元気なく横になつていても、ギョンヒさんの快活な声を聞くと、あらゆる心配をみな忘れてしまう。」と言つた。

飢えと死が私たちを脅かした一九三五年のチョチャンヂュ根拠地でも、彼女は人民に勇氣と信念を抱かせてやるために、自分のあらゆる苦痛に耐えながら精力的に闘つた。

彼女は毎日のように雪の中を掘り返して草の根を掘り出しては、腹をすかして立ちあがれない人民に分けてやりながら、必ず生きて敵に打ち勝たなければならぬと言つて力を培つてやり、革命に勝利した後解放された祖国で享受する幸福な生活を、まるで自分の目で見えるように順々に分かりやすく話してやつたりもした。

どんな苦難の中でも彼女はこのように強く夢の多いトンムだった。

彼女は私に次のようなことをよく尋ねた。

「お姉さん、今に私たちの国が解放されたら、その時私は何をしたらいいかしら？」

「あなたは踊りも上手だし、歌も上手だから、芸術家になりなさいよ。」

と私はためらいなく言つてやつた。

すると彼女はかわいらしい顔を紅潮させて希望に目を輝かせながら、

「芸術家もいいけど：最後の一人の敵を倒すまでは手から銃を離すことはできないわー」と言うのだった。

最後まで敵を打ち倒して祖国を解放しよう、抑圧と搾取のない幸福な人民の国、新しい社会を建設しよう！：これがギョンヒ同志がしばしも忘れないでいた思いだった。

一九三七年五月のある日、私たちには新たな命令が下つた。

キム・イルソン同志が与えた祖国進軍に対する戦略的計画に従つて、私たちが属していた四師部隊は

ムサン方面に行軍するようになった。

寝てもさめても忘れられない懐かしい祖国の地を踏むようになった喜びと感激！ 敵に対する燃えるような憎悪と必勝の信念で私たちは行軍途上のあらゆる苦難を乗り越えて、敵の森厳な警戒を突破した。五月十五日ついにトウマン（豆満）江を越えた私たちは、その日の夜にムサン郡ホンアムドン（豆満）の敵を襲撃消滅した。

暗黒の中に埋もれた祖国の空に力強い銃声をとどろかせた私たち遊撃隊員と祖国の人民は、感激的な出会いをして「朝鮮独立万歳！」を声の限り叫んだ。その日の夜ギョンヒ同志はトンムたちにこんな話をした。

「：地主が私を奪って売り飛ばそうとしたその日の夜に、私の母は私を連れて庭の前の泉に行つて髪を洗ってくれながら、『ギョンヒや！ いつでもこの泉のようにきれいな心で生きようね！』と言った言葉がいっそう新たに思い起こされます。」

：母が生きていて敵と戦う私を見たらどんなに喜

んだでしょう。：私は一時も母の言葉を忘れずに敵と戦いました。：」

サムヂョンを過ぎて休息する時私は祖国の空が映る清らかな水で自分の髪を洗うギョンヒ同志を見た。キム・イルソン同志の戦略的計画に従つてムサン地区戦闘の任務を遂行した私たち四師部隊が再び東北に渡つてきてチャンベク県二十五トグに至つた時だった。

一九三七年六月のある日、部隊はチョ・ヂョンチョル同志の指揮の下に、数百名の警察隊が護衛することのタガシ木材所を襲撃する戦闘を進めた。

この戦闘で我が軍部隊は数多くの敵を消滅した。しかしこの時斥候として最先頭に立つて敵の中に飛び込んでいったリ・ギョンヒ同志は、敵弾に当たつて重傷を負つて倒れた。

「ギョンヒトンム、リトンム！」戦友たちの悲痛な呼びかけに答えるように、

「最後まで戦うことができません。残念です。：でも少しも悲しくはありません。恋しい祖国の地を踏ん

だのが幸福です。：」

彼女はこの言葉を戦友たちに残して目を閉じた。

戦友たちは枯葉をかき散らして地面を掘り、祖国の地が見える南方の丘の上に彼女を安葬した。

隊員たちは敬虔な気持ちで同志の高潔な犠牲の前にこぶしを固く握り締め、彼女が残した言葉をもう一度胸に深く刻み込んだ。

こうしてリ・ギヨンヒ同志は敵を撃滅する苛烈な戦闘で壮烈な最後を遂げた。

私は今でもギヨンヒ同志を回想するたびに、彼女のように祖国を熱烈に愛し、敵を憎んで、最後まで革命の勝利のために戦う決意を再び固めるのである。

「必勝の信念」

17 死線を突破して

キム・チュンリョル

キム・イルソン同志の領導の下に組織され展開された抗日武装闘争の全過程において、そのどの時期、どの場所を問わず遊撃隊員たちが歩んできた道はその一つ一つが想像を絶する苦難に打ち勝った過程だった。

我々は時には数名の戦友しか残らないような困難な戦闘もやったし、何日も腹をすかして倒れたりもした。

しかし我々はどんな不利な環境の中でもただひたすら革命の勝利を固く信じ、迫り来る苦難を動揺することなく克服していったし、その道から一步も退かなかった。

この過程で我々は鍛錬され、不敗の隊伍に成長し、

敵に打ち勝つてついに勝利することができたのである。

一九三八年の初春、ヨハ県ソナホ地方で活動していた我が中隊は、指揮部の指示に従ってポチョン地方に急いで移動するようになった。

約二十日後に我々はポチョン県ソテサン付近に至った。この時我々は担いでいった食糧がすっかりなくなつてからすでに三日も腹をすかしながら行軍していた。空腹感で体は凍りつき、手足はかちかちに縮み上がるようだったし、身につけた全てのものが厄介に思えた。一步の歩みが千斤の鉄の塊を移すようだったし、あるトンムたちは行軍中にばたつと座り込んだりした。

「もうすぐだ」、「もうちよつとの我慢だ」

我々は互いに励ましあいながら肩を貸し、手を引つ張りながら歩いた。

夜中にソテサン付近のある部落にたどり着いた我々は、やっと空腹を満たして再び出発した。

我々が村を抜けて約半里ほど来た時、もう夜が明け始めた。この時前方の斥候から前に敵が現れたという報告が聞こえてきた。続いて後方の斥候からも敵が後ろについているという連絡が来た。

（敵の包囲の中に入ったのか？）このような直感が我々の頭をかすめた。

我々は前後に敵をおいていた。

状況は緊迫した。分隊長だった私は指揮官の命令どおりに隊員たちを導いて我々の前にある高地（通称ソテサンという）に向かつて急いで走った。

山の絶頂に登った我々は、敵の包囲線が何重にも張りめぐらされていることを知った。敵の兵力は一個連隊以上に見えた。

いつの間にか山のとっぺんの周囲に敵の砲弾がびゅ

んびゅん飛んできて、機関銃弾が耳元でうなりながら雨のように降り注いだ。

平べったい稜線になっているソテサンには身を隠すだけの木一本、茨の藪一つもろくになかった。このような状況で数十倍にもなる敵と戦うということは容易なことではなかった。しかし我々には一歩も退くところがなかった。我々は岩ならば岩、木の枝ならば木の枝、身を隠せる全てのものを利用して敵と戦った。

しかし敵は砲射撃の援護の下にだんだん包囲網を狭めながら我々に肉薄してきた。手を上げて降伏せよという奴らの怒鳴り声が四方から聞こえてきた。我々の力量をみくびつて奴らがあざけるように怒鳴る声を聞く時、我々はかんしゃく玉が破裂して我慢ならなかった。

我々はすぐさまに射ちたい気持ちをごつとこらえて、奴らがさらに接近するのを待っていた。傲慢にかかってくる敵がちょうど先に来た時だった。一丁しかない機関銃を握り締めた私は、トンムたち

とともに奴らに一斉射撃を浴びせた。奴らは山になって倒れた。

我々の反撃の前に慌てた奴らはおろおろすると山の下に退いていった。

我々はしばし息をつくことができた。

すでに数名のトンムたちが敵弾で負傷していた。

やがて敵の砲射撃が再び始まった。続いて山の下にいた奴らが再び飢えた狼の群れのようにのそりのそりと這い上がるのだった。

四方から弾丸と破片が容赦なく飛び、敵が射つ砲弾で山はすっかりひっくり返った。

敵を射ち倒していた貴重な戦友たちが一人二人と倒れていった。

「革命万歳！」

「朝鮮独立万歳！」

革命の一つの道でともに飢えや寒さと闘いながら敵との肉薄戦に、艱苦な行軍の道にためらいなく突き進んだ戦友たちが最後に告げる壮烈な万歳の声を聞く時、我々の心臓は張り裂けるようだったし、敵

に対する憎悪はいつそう込み上がった。

（このまま皆倒れるわけにはいかない。倒れた戦友たちの分まで戦わなければならない。敵をやっつけて我々は必ず勝たなければならない。我々にはやるべきことが泰山のように多い。…指揮部では我々を待っている。）

私は機関銃をしっかりと握りしめ、込み上げる激憤を込めて敵に向かつていつそう猛烈に射撃をした。

奴らは再び山になって倒れた。しかし奸悪な奴らは屍を積み重ねながらも引き続き執拗に這い上がってきた。

このような緊迫した時、射撃していた私の機関銃がぴたつと止んだ。いくら引き金を引いても弾が出なかった。

「故障だぞ！」私は思わず声を挙げた。

機関銃の射撃が止まるや敵は腰を上げて山の中腹まで接近してきた。

状況はいつそう危急になった。

私はどのように手を打ったら良いのか分からなかつ

た。

この時私のそばで歩銃射撃をしていたパクトンムが頭を上げると、

「チュンリオルトンム！ 早く銃を直しなさい。」
と言つてぱつと立ち上がつて左の方へ走つていつて手榴弾を抜いて投げるのだった。

彼は自分を露出させて敵の攻撃をそこに誘引することによつて、その間に機関銃を修理させようとしたのだった。

私はすばやく機関銃を修理し始めた。

左側の山腹からは繰り返しパクトンムの叫び声が聞こえてきた。

「こいつらめ！ パルチザンがここにいる。死にたければ登つてきてみる！」

敵の注目はパクトンムに集中した。彼は小さな岩に身を隠して、登つてくる奴らを一人一人撃ち倒した。

このようにしばらく時間が流れ、機関銃の修理もほとんど終わった時だった。

パクトンムは敵弾に当たつて重傷を負つた。彼は倒れながらも「機関銃はどうなりましたか？…」と叫んだ。

戦友たちを危険から救出しながらただ革命の勝利のために命もためらいなく捧げたパクトンム、私は彼の高貴な革命精神の前に頭を垂れ、心臓をえぐられるような彼の最後の叫びを聞きながら、修理した軽機を再び力強く握り締めた。

鬱憤を吐き出すように恐ろしく火を噴く私の軽機の前で敵はばたばたと倒れていった。

正午ごろまでにすでに敵の一個連隊以上の兵力のうちほとんど半分を超える死体が山腹に転がった。悪辣な敵はなかなか退こうとしなかった。

やがて山の下にいた敵は再びがむしやらになつてかかつてきた。

このとき副射手だったリトンムが急に、雨のように降り注ぐ弾雨の中をくぐり抜けて山の中腹に這い下りていくのだった。私は射撃を止めて「リトンム！ リトンム！」と大急ぎで呼んだが、彼は返事もせず

に一度後ろをちらつと振り返ってみては、前に進むばかりだった。彼は我々の陣地から約二十メートル先に倒れている敵の死体を探りながら弾を集めていた。私はその時初めて機関銃の弾がなくなりつつあるのを知った。

弾を保障するために弾雨の中をぐり抜けて奴らの死体を探していく彼の闘志の前に、私は新たな勇気を得た。

こんな勇敢な戦友たちがいる限り我々にどうしてあの敵を撃滅できないことがあるうか！

（こいつらめ！ 我がパルチザンのこの気迫を見ろ！ お前たちがどんなにあがこうともこの闘志だけはへし折ることができないのだ！…）私は心の中でこのように叫んだ。

リトムムは弾帯を取り集めて戻ってこようとした瞬間、腰を押さえてその場に倒れた。敵弾が彼の腰を貫通したのだった。私は急いでそこに飛び降りていって彼を抱きかかえた。

致命傷を負った彼は息を引き取る瞬間

「チュンリョルトムム！ この弾を！」と言いなから、弾帯を握った手を私の前に突き出すのだった。弾を受け取った私の手は憎悪で震え、目からも火が起ころうだった。

「リ同志…」のどが詰まって私はそれ以上言葉が続かなかった。

（同志がそれほどにも願い、身を捧げて闘ってきた革命の勝利は必ず来る。

私は必ず復讐する！ 敵を完全にやっつける！）私の胸は暴風雨のように騒いだ。

もう我々のトムムたちは何人も残っていないかった。私は再び機関銃を握って復讐の火雷を繰り返した吐いた

いつの間にか日は西の山にだんだん傾いていた。

「クアン！」と私のそばで砲弾がけたたましく破裂した。その瞬間私の体は土にすっかり埋まってしまった。息がつまり、目の前が真っ暗になって意識が朦朧となった。

（もう死ぬのか！ トムムたちはどうしたろう

か？ ついに祖国の光明を見れなくなったのか？

愛する祖国の江山を踏みにじり、父母兄弟を虐殺したあの敵をそのままにしてどうして死ねるといえるのか！

瞬間私の頭に突き刺さった一つの事実が稲妻のように目の前をかすめた。

それは一九三四年夏のシンホンドン戦闘のこのだった。

戦闘は熾烈に繰り広げられた。不幸にも敵弾が副連隊長の腹部を貫通していった。彼は失神状態に陥りながらも敵と引き続き戦おうと努めた。しかし彼はすでに思うように体を動かすことができなかつた。彼は何度も歯を食いしばって、「チュンリヨル！私を敵が来る方向へ寝かせてくれ。」とやっと言った。私は彼が要求したとおりに場所をとってやった。彼はやっと頭を上げると拳銃を握った。そして数十発の弾を続けて敵に浴びせてから、

「チュンリヨル！ 革命が終わるまでしつかり闘え！」と言つて息を引きとつたのである。…

私ははつとして気を取り直した。

私の胸の中では革命戦列たちが抱いていた革命精神が熱い火の塊となってめらめらと燃え上がった。

（そうだ、まだ私にはやるべきことがある。彼らのように闘わなければならない。）

私はありつたけの力を振り絞つて体を起こしながら再び機関銃を握り締め、這い上がつてくる奴らめがけて復讐の弾丸を浴びせた。

「命がある限り闘わなければならない。」私は射ちまくつた。

時間がかなり流れた。

だんだん敵の射撃が下火になつた。

日が暮れ始めるや我々は高地の後面に移動した。

その時高地の上からぴゅーんと飛んでくるものがあった。我々がとっさにうつぶせると、「クアン！」と爆音が起こつた。その時やっと私はそれが手榴弾だと分かつた。再び手榴弾が飛んでくるのは明らかだった。

（このままでは全てのトンムたちが犠牲になるか

も知れない。そうかといってこの場をただちに逃れることもできないではないか。：私の一身を犠牲に少しでもトンムたちの犠牲を減らさなければならぬ。

このような思いが私の頭をかすめた。

予測したとおり、やがて真つ黒な金属の塊が再び飛んできた。死ぬか生きるかという危機一髪の瞬間だった。私は決死的に敵の手榴弾が地面に落ちる瞬間それをすくい上げて逆に稜線の向こうに投げ返した。すぐにそこから爆音が響き、敵の悲鳴が起った。私は胸がすつとするのを感じてその瞬間非常に痛快だった。

ところがこの時いつの間にか稜線の上に二人の敵が現れた。私は奴らにすばやく弾丸を食らわせた。そして三番目に現れた奴を射とうと引き金を引いたが、銃弾が出なかつた。不発だったのである。

危急なこの瞬間私はそれ以上考える間もなく急いで前に突進しながら銃台でそいつの顔面を殴りつけた。

生き残った七人のトンムが一ヶ所に集まったのは真つ暗になった時だった。我々は互いに固く抱き合つた。

「トンムたち！ 我々は今日貴重な戦友たちを失いました。：しかし我々は失望するわけにはいきません。奴らがどんなにあがこうとも、我々パルチザンの気概と闘志をくじくことはできません。これから我々がやるべきことはたくさんあります。指揮部では我々を待っています。今晚のうちにこの包囲線突破しましょう。そして戦友たちの革命精神を引き継いで奴らに数百倍に復讐して死を与えましょう。」

指揮官はこのように我々を励ました。

我々は戦友たちを失つた悲憤をこらえきれずにこぶしで涙をぬぐつた。試練と峻厳な環境の中でも悲観と失望を知らずにただひたすら革命の勝利のために一歩も退かずに闘った戦友たちの闘志を引き継いでいこうという決意を抱いて、我々はその晩のうちに負傷者を助けながら敵の包囲線から遠く脱出した。この日我々は隣接部隊の騎兵隊のトンムたちに会つ

た。

我々は彼らとともにその日の夜敵が駐屯しているソテサン付近の部落を襲撃した。この戦いで我々は犠牲になった戦友たちのことを思いながら、嚴重な報復の銃剣を敵の胸板に思い切り突き刺した。我々は一人の敵も逃さずにつっかり掃蕩してしまった。

私は今でもその時のことを回想すると目頭が熱くなる。

実に我が祖国の解放と革命の勝利のためにどれほど貴重な戦友たちが聖なるこの道で自己の全てをためらいなく捧げたことか！

今日の我々の幸福はまさにキム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争の深い根から芽生え、結実した貴重な実なのだということを私はいつそう深く感じるのである。

18 トウマン（豆満）江の氷塊をかき分けて

キム・ドンギユ

一九四三年の早春、キム・イルソン同志の命令を受けた我々偵察小組が咸鏡北道のラジン、ウンギなどに派遣されて偵察任務を遂行し、司令部に帰っていく時のことだった。

我々の一行はキム・ヒョクチョルトンムとオ・ガイトンム、そして私の全部で三名だった。

我々は日暮れごろにウンギの後ろの山の谷間を出発して目的地向かった。

すでに何日も止まずに降り続いた雪は腰を埋めた。吹雪は前を見分けることができないうらい吹きまくり、寒さは骨の髄までしみこむようだった。

敵の厳しい警戒網を抜けて険しい山道を歩いてゆくので、いくら進むことができずに我々の力は尽き始めた。

丈夫な人間でも耐え難いこの険しい路でオトンム

は不意に関節炎にかかり、その苦労は並大抵ではなかった。

こうしてヒョクチョルトンムと私は腰まで埋めるまっさらな雪道をかきわけ、オトンムに肩を貸しながら歩いていった。進むほど吹雪は勝気に振舞いながら猛々しくうなりをあげ、雪道はますます険悪になり、歩みはだんだん遅くなった。

しかし我々は一時も早く連絡場所まで行かなければならなかったので、互いに鼓舞し、助け合いながら引き続き前へ歩んでいった。約束した時間までに連絡場所に到着できなければ我々はトウマン江を越えることができなかった。連絡場所には小舟が待機するようになっていたのである。

我々は一晩中吹雪と闘いながら歩みを促したが、夜が明けるまでにやっと半分を少し越えたに過ぎな

かった。しかし連絡場所まではまだはるかに多くの距離が残っていた。

吹雪は夜が明けてさらに猛々しく吹き荒れた。

何日も何も口に入れることができずにこのように激しい吹雪と闘いながらまつさらな雪道をかき分けて険しい山を越えようとするのだから、その困難というのは到底想像を絶するものだった。足はだんだん鉄の塊のように硬くなり、のどからはぬかが燃えるような匂いが漂った。

しかし我々はへたりこまなかった。

我々三人は互いに肩を組み、腰を抱き合って、一身になって歩いた。

三人が力を合わせて一緒に歩くと、吹雪との闘いはより容易だったが、歩みは倍も遅かった。

約束した時間を考えると焦ること限りなかった。

このまま進んでいてはその時間のうちに到底目的地まで行き着けそうもなかった。

やむを得ず我々は相談し、私が先に連絡場所に行つて連絡を取ることにした。

私は彼らがついてくる道をかき分けながら前を歩き、その後ろからヒョクチオルトムがオトムを助けてついできた。

このようにして私は次の日の午後によつと敵の国境警備哨所を抜けてかろうじて連絡場所に到着することができた。

ところがどうだろう！ すでに時は遅く、そこには誰もいなかった。

約束した時間内に必ずたどり着こうとある限りの力を尽くして急いで来たが、結局時遅く到着したのだと分かるや、私は力ががくつと抜けた。

私はいずれにせよ二人のトムムが来るのを待つよりほかになかった。ところがどうしたわけか彼らはなかなか現れなかった。

私はただならぬ思いが浮かんであたふたと彼らを探して、来た道を引き返した。しばらくしてやっと私はかすんだ吹雪の中を彼らが来るのを発見して歩みをせかせて彼らに向かつて進んだ。

近づいてみると、二人のトムムは一、二歩歩いて

は倒れ、しばらく倒れていてから再びやっと体を起こしながら一寸一寸歩いてきていた。

オトムはすでにほとんど意識を失っており、もうヒョクチョルトンムまでも自分の体さえ支えることが困難な状態だった。

二人のトナムは私を見るやたちまち雪の上に力なくばたつと倒れた。

私はすぐにオトムを抱き起こした。彼の顔には血の気がなくなり、ただ唇の周りにやや赤い斑点が残っていた。

彼らは途中であまりにも空腹がひどく、我々を助けてくれた老人からもらったしょうゆを一飲みずつ飲んで雪をつかんで食べたのだった。そうしてでも空腹を満たしながらやっとここまで来ることができた。

しかしもう一步も歩むのは困難だった。私の状態も彼らとほとんど変わりがなかった。

みぞれは引き続き我々を埋めてしまふかのようになり、全身に覆いかぶさってはすぐに凍りつき、我々はま

るで氷でよろいを一丁作って着たようになり、はらわたには氷のかけらが詰まったようだった。

すると外側から内側まで凍ってゆき、体は文字通り氷の塊のようになって、その寒さは言いようのないほどだった。

そうかといってそのままではいられなかった。我々はどうなことがあってもトウマン江を越えなければならず、任務を完遂しなければならなかった。

我々の前には元気を回復することが急先務となった。そこで私とヒョクチョルトンムはオトムを風をよけるところに隠して、食糧を探しに出かけた。

「オトム！ 食べるものを手に入れてくるからちょっとだけ待っていてくれ！」

我々は、話す力さえなくて目で答えるオトムを楽に座らせてその場を発った。

しかし力の尽きた体で進むその道は並大抵の苦しさではなかった。我々は吹き荒れる吹雪にまかれて雪の上に倒れながら重い歩みを移した。

ところが、自分自身もひどく疲れた体だった上に

オトナムを助けながら必死に歩いてきたヒョクチョルトナムまでとうとう途中で雪の上に倒れたまま再び起き上がることができなくなった。

私はヒョクチョルトナムをくぼんだところに連れて行って座らせた。

そして、その場から絶対に動かずに待つていくれと再三頼んで、一人で向こう側にある部落に行った。

吠え立てる吹雪の音だけが高いばかりで、村はしんと静まり返って人の影一つ見当たらなかった。数軒の家を回ってみたが、みな同じだった。

この村の殺風景は私の胸を針で刺すようだった。扉が落ちて転がり、あちこちに家具が散らばっていた。日帝の奴らが侵略戦争のためにこの部落の住民たちを強制的に移住させたのが明らかだった。

この光景を見た私の胸はこみ上げる敵愾心で燃え上がった。そして、最後のあがきをする日帝を必ず撃滅させようという固い決意をさらに胸に深く抱きながら私は歩みを移した。

私はある農家の厩の飼い葉桶に秣が残っているのを何気なく覗いてみた。秣にはうまそうな黄色い豆粒が混ざっていた。

「豆だ！ 豆があるぞー！」

私は両手で豆粒の混ざった秣を一掴みつかんだ。

いくらにもならない豆粒ではあったが、この豆粒が我々三名の命を救ってくれるのだと思うと、私はそれが何にも引き換えることのできない貴重なものに思えた。

私は早く拾って持つていこうと思って腰をかがめた。瞬間気がばおつとなつて私は飼い葉桶の上に倒れてしまった。

どれほど時間が流れたのか……。

ひどい寒さを感じた私はびっくりして目を開けた。あたりはすでにたそがれで薄暗くなっていた。

気を取り戻した瞬間、(トナムたちはどうなっただろうか?) という思いが私を捉えた。

私は体を起こそうとしたが、手足が木のように硬直して動かすことができなかった。大変な苦勞をし

た末にやっと私は少しづつ体を動かすことができた。散らばった秣から一握り残った豆粒を握った私はトナムたちのところに急いで戻った。

「ヒヨクチヨルトナム！ オトナム！……」

私はトナムたちの名を続けて呼びながらあたふたと歩いた。しかし力が尽きて体が動かなくなり、私の呼び声は口の外に出る前に再びのどの奥に引っ込んだ。

ヒヨクチヨルトナムはその場にいなかった。

私はその周辺の谷間と山をくまなく探し回ったが、依然として見当たらなかった。

不吉な予感が不意に浮かび胸が無性に締め付けられた。

（彼はオトナムのところに行ったのではないだろうか？…）私はこのような思いに一つの希望をかけた無我夢中でオトナムのいるところへ走った。

ヒヨクチヨルトナムはそこにもいなかった。私は日がすっかり暮れるころにやっと雪の中に埋まったオトナムを発見した。

急いで手で雪を掘り返してオトナムを抱き起こした瞬間私の胸はどきつとした。

彼の体は氷のようで、温かみはどこにも感じられなかった。

「オトナム！ オトナム！」

急いでゆずぶりながら呼んだが、彼は終始何も答えなかった。

「オ・ガイ！」

私はのどがむせんでそれ以上声を出せなかった。あまりにも悲惨なことで涙も出てこなかった。

雪の上には同志たちと与えようと持ってきた豆粒が散らばって、降り積もる雪にすでに半分以上覆われていた。

それを見た瞬間積もっていた鬱憤がいつぺんにこみ上げてきて息が詰まった。そして同志たちに生じた不幸があなたも私の誤りから生じたかのように思え、胸が裂かれるように苦しかった。

「オ・ガイ！ もうちよつとだけ持ちこたえてくれたら…私が…私が遅かった…」

私はオトンムを抱きしめて身をもだえた。そして悲憤に震える胸を抱いてこの日の夜を眠らずに明かした。

次の日私は明け方早くから四半日の間ずっと雪の中をかき分けながら探し回ったが、とうとうヒョクチョルトンムの行方を探し出すことができなかった。ヒョクチョルトンムが雪に埋まって犠牲になったということを私は後になってやっと知った。

力が尽きて戻ってきた私は雪をかき集めてオトンムの死体を心を込めて埋めた。熱い涙が止めどもなく流れ落ちた。

あらゆる風霜と辛苦をなめながら十年を一日のごとくただ祖国の光復のその日のために、革命の勝利のために勇敢に闘ってきた戦友たちとこのように離別することになるとは誰が知ったろうか！

考えれば考えるほど悲痛な思いをこらえがたかった。

しかしいつまでもその場に座していることはできなかった。私の前には彼らが残した革命の任務が待つ

ていた。

敵に対してこみ上げる敵愾心、同志たちを失った悲痛な気持ち、必ず任務を遂行しなければならぬという重い責任感——これらの全てが私に勇気と新たな力呼び起こしてくれた。

（そうだ！ 悲しんでばかりいる時ではない。敵に百倍、千倍に復讐するために、彼らがあれほど願った自由で幸福な祖国を一日も早く取り戻すために、どんなことがあっても部隊に帰らなければならぬ！ 戦友たちが命と引き換えにした偵察資料を遅れることなく上部に報告しなければならぬ！ 行こう、トゥマン江を越えよう！）

私はこみ上げる敵愾心で胸を燃やしながら、彼らがかねえられなかった革命の道、祖国光復の道を受け継いで、悲壮な決意を固め、トゥマン江のほとりへ歩いていった。

昼の三時ごろだった。

山野を覆いながら川の上を吹きまくる強い吹雪で、川の向こうはもろろん、近くにある日帝の奴らの哨

所からも私を発見することは困難な状況だった。

凍りついた手足をさすつていざ水に入ろうとする
と、同志たちに対する思いが不意に浮かんできて、
なかなか足が進まなかった。

後ろを振り返り、目を瞑って同志たちともう一度
永訣する私の目の前にはヒョクチョルトンムとオ・
ガイトンムの姿が浮かんだ。そして彼らとともに過
ごした数々のことが目の前をかすめていった。

回想すればするほど胸は痛み、敵に対する敵愾心
と任務を遂行しなければならないという重い責任感
がいつそう強く沸き上がった。

(…私は必ず任務を遂行しよう！ 必ず日帝を掃
蕩して同志たちの仇を討とう！…)

私は川の方へ向き直った。

早春で、川には大きな氷のかけらがぶつかっては
壊れ、騒がしく音を立てながら流れ下っていた。泡
を立てて互いに逆さに落ちながら流れ下る黒々とし
た川の水は見るからに恐ろしかった。

しかし私がいまさら何をためらおうか！

川の水が猛々しいとてそれがどれほど猛々しく、
それが恐ろしいとてどれほど恐ろしいのか！

私は、ただ祖国の幸福な前途のために自己の全て
を捧げて闘った戦友たちの、鋼鉄よりも固く、火よ
りも熱いその精神を持つてためらいなく川に入った。
川の水は私を容赦なくあちこちに押し、倒した。

しかし私は川の水に押されることも、氷のかけらが
流れ下ってくることも考える暇もなく、かまわず前
へ、さらに深い水の中へどぼんどぼんと入っていつ
た。

私の体はいくらも進まずにかちんかちんになり、
心臓はそのまま止まってしまいそうだった。

しかしもうどこへ退くこともできなかった。

私はなんとしても川を越えなければならぬとい
う一念で、ある限りの力を尽くして体を動かし始
めた。歯を食いしばって前へ進んだ。

いくらか水の流れに流されていって一息ついては
再び手足を動かして泳いだ。

このようにしてやっと川の真ん中ほどに来た時、

もうそれ以上泳ぐ筋力がなかった。それに加えて手足は痙攣を起こし、舌までもつれた。

あつぷあつぷしていた私は渦巻く水の中にそのまま頭まで沈んでしまった。必死になって水の中からやっと浮かび出てもすぐまた沈んだ。最後には耳がぼおつとなり、何も見えなくなった。

まだ対岸まではるかに遠かった。再び水の中に沈んだ瞬間、私の頭の中にはヒョクチョルトンムとオ・ガイトンムの姿がはつきりと浮かんだ。そして、偵察資料を一時も早く上部に報告しなければならぬという彼らの声が耳元で響くようだった。

私は心の中で叫んだ。

（生きなければならぬ！ 偵察資料を持って必ず帰らなければならぬ！）

私は大変な苦勞をした末に再び水の上に浮かび上がった。ちょうどその時私は流れてきた氷塊の一つをつかむことができた。

氷塊をつかんでしばらく流されていった私はありったけの力を尽くして別の氷塊に移った。こんなこと

が数回反復された。

こうしているうちに凍った肉は刀のような氷塊の角で裂かれ、切られて、いつの間にか全身は血まみれになった。

しかし私はそんなことを省みる余裕がなかった。

私の頭の中には（同志たちの意志を受け継いで必ず川を越えなければならぬ！ 億千万べん死のうとも必ず同志たちの復讐を果たさなければならぬ。）というただこの一念だけだった。

押し寄せる氷塊をかき分けながら冷たい水の中でもがいていた私はとうとう川を越えてしまった。

川岸が上がった私は倒れたままびくともできなかつた。私はしばらくしてからやっと頭を上げ、周辺を探った。

もしやトンムたちでも見えはしないかと思つて見回してみたが、何の人の気配もなかった。

私は起き上がることができなかった。しかし一時も早く同志たちに会わなければならぬという思いで、最後の力を振り絞つて這い、転がりながら前へ

進み始めた。

体を動かすたびに氷塊に裂かれた傷が固い地面に触れて耐えられないほどひりひりと痛んだ。声を挙げてみようとしても舌を動かすことができなかつた。

しかし私は歯を食いしばって休むことなく這い、転がりながら続けて前を急いだ。

私が雪の上で一、二度転がってしばし頭を上げた時、私の目の前には何かがちらつくのが見えた。瞬間思わず右手が腰に差した拳銃に触れていた。

しかし次の瞬間ぼんやりと見える映像の中から私は顔なじみのトナムの姿を発見した。

「ハン・チョンチュトナム！」

懐かしいトナムの名を呼んでは、私は急いで近寄ってきたハントナムに身をゆだねた。そして顔を彼の胸にうずめたまま気を失ってしまった。私は次の日の午後によつとトナムたちが囲んで座つた中で意識を回復した。

今でも私はその時のことを回想すると、どのよう

に、どんな力で川を越えたのかよく分らない。

しかし一つだけは言うことができる。それは、キム・イルソン同志の領導の下に、祖国の光明の差す未来のために最後まで屈せずに闘つた革命の戦友たちの不屈の闘争精神、彼らの崇高な意志を受け継いで最後まで任務を遂行し、同志たちの仇を討ち、必ず祖国を解放しようという固い決意―まさにこの革命的意志の力によつて、私は猛々しく激浪を起こしながら流れるトウマン江を越えることができたということである。

その後私は困難なことにぶち当たるたびに、常にトウマン江で経験したあの時のことを考えながら、そこから新たな力と勇気を得て闘争し、解放後祖国の地を再び踏むことができた。

19 難関を突破して

一九四〇年十一月だった。

当時私が属していた小部隊はトンニヨン県オペー帯で地方人民としつかりとした連携を結んで地下政治工作を進めていた。

この時期敵の〈討伐〉は極めて甚だしかった。我々の部隊が活動を展開していたトンニヨン、ニョンア、ウアンチョン県などでは敵の大部隊が犬の群れのようにうろつき回りながら山と部落をくまなく捜索し、地方人民を〈通匪者〉だといつては逮捕虐殺し、部落を燃やしてしまう蛮行を敢行した。

こうして地方人民との連携は徐々に断たれていき、食糧の補充を受けるところさえなくなった。しかしこのような中でも我々の小部隊は活動を止めなかったし、人民を勝利に呼び起こす地方政治工作と敵に対する偵察活動を止めなかった。

チ・ギヨンス

そんなある日だった。我々の小部隊は引き受けた任務を終えて指揮部があるニョンアン県テフアリャングに移動するようになった。

この時我々の小部隊が置かれた状況はさまざまな危険に直面していた。

我々の小部隊の成員は全部で十八名で、その中には負傷者と患者が少なくなかった。その上闘争経験が少ない新入隊員まで七、八名もいた。

このような力量で数百倍に達する敵と闘うこともできず、また敵と正面衝突をするのは我々の小部隊の任務ではなかった。なんとしてでも我々は敵を避けながら指揮部を訪ねていつて遂行した任務とトンニヨン県一帯の敵情についての報告をしなければならなかった。

我々の小部隊は行軍を始めた。私は二名の隊員を

連れて隊列の前に立つて進み、その後ろにはパク・ソンウ軍医ほか数名のトムムが四名の患者をおぶったり肩を貸したりしながら従った。

樹林の中には〈討伐隊〉の奴らがうろつき回った足跡があちこちに散らばっていた。夜が更けると〈討伐隊〉の奴らは四方で焚き火を焚いた。

我々は奴らの焚き火の合間合間をかわしていきながら行軍を続けた。このようにしながら我々がモンルン県とトンニヨン県の境にある密林地帯に入ったある日だった。

休みなく降る雪は腰をうずめ、吹き付ける吹雪は歩く人間の頬を容赦なく殴りつけ、前を見分けるのが困難だった。このような時だった。我々の前から急に「誰だ！」という声が聞こえた。

「お前は誰だ！」と私はためらいなく真つ向から怒鳴った。

しかし奴らはやみくもに銃を撃ち始めた。

この時パク・ソンウトムムと私は不意に遭遇した敵に対抗して戦いながら患者たちと新入隊員たちを

急いで後退させた。そして我々を追ってくる敵に向かって猛烈な反撃を加えながら後衛を担当した我々も後退を始めた。

苛烈な戦闘は約三十分間も続いた。暗闇が覆い我々が頑強に応戦するようになると、敵もそれ以上追撃できなかつた。このような遭遇戦は三度も繰り返された。

しかし難関は敵としようちゅう戦闘をしたり腹をすかせたりすることではなかつた。零下三十余度の酷寒が続く中で〈 Cholera 〉(栄養不足と寒さから来る病気で手足が引きつって体を動かすことができない)患者たちを看護しなければならぬ問題だった。ところが薬や粥はおろか雪を溶かして熱い湯を一飲み勧めることさえできなかった。

そこで我々はあるだけ〈 Cholera 〉患者をずつとおぶって歩き、しばし休む時にも彼らを間にはさんで座って自分の体で彼らの体をほぐしてやったり、手足をさすってやるのに努めた。その中でもキム・マンストムムは行軍の初日から〈 Cholera 〉が生

じて一步も歩くことができなくなった。彼は必死に自分を樹林の中に置いていくようにと言った。

「僕一人のために：時間が遅くなったらどうしますか！」

しかし我々は患者たちのために時折危険に直面はしたが、そうかといつて敵がうろつき回る樹林の中に同志を残しておくことはできなかった。軍医トナムとオ・ヂュノクトナムは彼を説得しながら引き続きおぶつて歩いた。

「もうちよつとだけ辛抱しなさい！ もうテファリヤングまではいくらもないからそこに行けば体を休める場所もあるし、我々がこの前埋めておいた食糧もあるはずだ！」

軍医トナムのこの言葉はただキム・マンストナムにだけ言っている言葉ではなかった。何日も穀物一粒食べられないまま、はてしない深山の樹林の中を患者たちをおぶつて進むトナムたちを鼓舞する言葉でもあった。

冷たい雪と松葉をむしり食べながら我々は十余日

ぶりにテファリヤングの近くの樹林に到着した。

しかし〈討伐隊〉の奴らはここでも山をくまなく探しながら、我々が埋めておいた食糧を掘り返していき、小さな鉄釜まで破壊してしまつた。

我々は奴らが掘つてこぼした稲の粒を拾い集めた。それはわずか一握りかふた握りに過ぎなかった。

夜が更けた後に我々は雪を掘り返して乾いた木の枝に火を付けて壊れた釜のかげらで稲の粒を炒つた。何日もの間冷たい雪と松の葉で食事を続けてきた時だったので、稲の粒を炒る火の勢いと香ばしい匂いがたまらないほど胸の中をひっくり返した。

このとき軍医トナムとオ・ヂュノクトナムは黒く点々ができた熱い稲の粒を手握つてこすつた。そしてそれをまた別の釜のかげらを利用して粉にして、雪を溶かした水に溶いた。そしてそれを患者たちに少しずつ分けて飲ませた。ところがわずか一椀を過ぎない重湯は四人の患者たちが残らず口をつけてもほとんどそのまま残つた。キム・マンストナムは震える手で重湯の椀を握つてはじつと見つめてから二

に戻して置いた。何度も重ねて勧めたが、彼は口をつぐんで拒絶した。貴重な食べ物を希望のない自分に勧めずに別のトンムたちに元気をつけさせてやれと言うのだった。

軍医トンムは血の気のない彼の顔を胸が痛むように見つめてから、道義上から見てどうして革命の同志を後に残していくことができるかと言いながら、キム・マンストムの手足をさすってやり、胸もさすってやった。そうしながら彼は横に集まって座った別のトンムたちも皆聞ける言葉で話をした。キム・イルソン同志が親率した朝鮮人民革命軍の一部隊は一九三八〜一九三九年の冬に敵が幾重にも包囲した中で、一日に十余度も戦闘をしながらもついに苦難の行軍に勝利した話や、早春から秋まで十ヶ月間も飯に満足にありつけず、ついには草の根、木の皮までなくなった時にも希望を失わずに戦い抜いた一九三五年のチョチャンヂュ遊撃根拠地の人民の不屈の闘志などを想起させた。彼はさらに革命の勝利に対する確固とした信念を持たなければならないという

ことと、〈チョルラ病〉や飢えぐらいは十分克服できる難関だということを言い聞かせた。

次の日我々はいくつかの組に分かれて指揮部を探して出発した。その次の日も探した。しかし数里の周囲を探したが、樹林の中は行く先々に〈討伐隊〉の奴らが狂犬の群れのようにうろつき回るばかりで、指揮部に会うことはできなかった。

しかし我々は闘争を止めるわけにはいかなかった。なんとしても敵中から脱出しなければならぬし、指揮部を探して任務を報告しなければならなかった。

我々は再び敵の中をくぐり抜けて夜を明かしながら大密林地帯を歩いていた。患者たちを背負い、新入隊員たちに肩を貸しながら引き続き歩いた。おそらく五、六日は歩いただろう。しかしわずかに歩けなかった。その間にも〈チョルラ病〉患者たちの症状は時々刻々とひどくなり、新入隊員たちは数歩歩いては倒れた。

あるトンムたちはただ一日だけでも体を休めてから行こうと懇請したりした。

しかし軍医トナムは休まずに続けて歩かなければならないと強調した。飢えて疲れた体であり、特に〈チヨルラ病〉患者たちが酷寒の中で運動を停止するということは自ずと危険を招来することであるからだった。そして敵が我々の足跡を発見して後を追ってくるかもしれない。――我々は革命家だ。我々の行軍は革命のための行軍だ。前途にはこれ以上に大きな難関があるかもしれない。我々はあらゆる難関を突破して日帝と戦い抜かなければならない。――我々はこのように互いに鼓舞しながら、山の尾根から東の方に突き出ている大きな高地に向かって登っていった。約二十分ほど行軍した時だった。オ・ヂュノクトナムが小便をしようと振り向いた。ところが敵が大勢山に這い登っているのが見えた。彼は「敵だ！」と大声を挙げた。

軍医トナムは数名のトナムに〈チヨルラ病〉の患者たちに肩を貸して進ませ、私とオ・ヂュノクトナムを呼んで部隊の後衛を担当するようにと言った。敵は我々が後退する尾根と両側の谷間から包囲体

制を取りながら悪辣に襲いかかってきた。敵との距離はわずかだった。敵はかかってきては我々の強い反撃の前に倒れた。

我々は倒木に隠れて撃ち、またいくらか進んで隠れては撃った。こんな時に〈チヨルラ病〉がひどかったキム・マンストナムは自分のために部隊の前進が遅れて危険な状況にあるのを知って同志の背中から転がり落ちた。彼は我々の手を払いのけながら座った場所です倒木に隠れて拳銃で襲いかかる敵と戦った。敵はキム・マンストナムに投降せよと怒鳴った。しかし共産主義者は投降を知らないと叫びながら襲いかかる敵に引き続き復讐の火雷を浴びせた。このような時にキム・マンストナムは我々に早くこの場を離れてくれと叫んだ。するとこの声を聞いた敵はマンストナムに火力を集中した。

「キム・マンストナムを救え！ 敵に死を与えよ！」という声が四方から起こった。樹林の中をいくらか脱出していた新入隊員のトナムたちも立ち戻ったのである。この強力な反撃に敵は退いた。

この間に我々は互いに援護しながら山の峰に登った。我々は東の方に広がっている果てしない広葉樹林の中に姿をくらました。

しかし我々の勇敢な戦友キム・マンストナムは何箇所も負傷していつそう危急になった。我々は彼をかわるがわるおぶって約束した地点に至った。しばらく後に後ろに離れていたトンムたちも到着した。我々はここに長くどまることはできなかった。

たとえ敵の包囲状態からは脱出したとは言っても、我々の貴重な戦友であるキム・マンストナムの生命を救うためには、いやそれよりも活動報告と敵情報報告を指揮部に一分でも早く伝え、敵に百倍千倍の復讐をするためには我々のわずかな遅れも赦されなかった。

再び行軍を始めた我々はトンニョン県二トグの近くでとうとう部隊の指揮部に会った。

このように我々は何重もの難関を突破して自分たちに与えられた任務を完遂した。

何が、どんな力が我々をこの何重もの包囲の中で

二十余日も腹をすかせながら、そして四名の患者までおぶったり手を引いたりしながらついに難関を突破させたのか！

それはキム・イルソン同志の英明な領導に従う我々の共産主義偉業は必ず勝利するという確固とした信念、億千万べん死のうとも敵を討とうという一念、愛する祖国を踏みじり、人民を奴隸化する日帝侵略者に対する抑え切れない憤怒が我々の胸に燃えていたからである。

もしもそうでなかったならば我々は一步も前進することができなかつただろうと今でも考える。

チャン・サンリョン

私が属していた部隊が北滿のソンガン一帯で機動戦を展開していた一九三九年の初冬にあつたことである。

当時部隊の後方活動の責任を負っていた私は、キム・チェク同志の指示を受けてチョヨン地方に小部隊工作に出かけるようになった。

それはまずチョヨン地方の人民との連携を強化しながら、彼らを通じて冬の間に必要な食糧、弾薬、被服などを準備するためだった。

ところがチョヨンに行く途中で敵の大部隊の追撃を受けて我々のトンムたちの一部が戦闘で負傷した。

私もこの時数ヶ所を負傷した。

しかし我々は傷を治療する余裕もなく、いかなる困難をも克服しながら負傷したトンムたちとともに目的地まで急いで行かなければならなかった。

それは当時敵の〈討伐〉作戦と〈集団部落〉に対する監視と搜索が甚だしかつたので、途中でどの部落の人民にもうかつに接近できない状況だったからである。そこで我々は敵の追撃を受けながらも負傷したトンムたちに手を貸しながら困難な行軍を続けた。

我々が目的地であるチョヨンの二里ほど手前のソnfア江のほとりに至つた時だった。

敵が自動車に乗つて我々を追撃してきた。

我々には避ける道がなかった。敵と戦いながら暗くなるのを待つて川を渡る他になかった。

我々は秋収を終えた後にきびの茎を立てたままにしてある広い畑に入つていつて急いで戦壕を掘りながら戦う準備をした。

我々の人員がわずか数名にしかならないのを知つ

て追ってきた敵は、最初から銃を撃たずに、「生け捕りにしろ!」と怒鳴りながら我々のいる畑に忍びこみ始めた。

我々は戦壕にうつぶせてだんだん近づいてくる敵を沈着に狙った。きびの莖があちこちに押しわけられる隙間から奴らの下半身が見え始めた時に我々は一斉に射撃をした。

奴らはきびの莖にさえぎられている我々の位置に気づくまもなく続けざまにぶつ倒れた。

前に立つて入ってきた奴らが倒れると、後ろの奴らはしばらくざわめいていたが、それ以上入ってくることもできずにしばらく黙って立っていた。

我々もやはりきびの莖にさえぎられて敵の位置を知ることができなかつたので、それ以上射撃をせずにひそかに場所を移した。そしてすばやく畑の畝間を掘り返して数ヶ所に戦壕を作った。

しばらく後に敵は再び接近し始めた。

先ほどとは違って今度は空砲を撃つてみたり、あゝる奴は叫び声を挙げたりした。

我々は敵の銃弾が飛び交う中でも沈着に敵の行動を探った。

我々が隠れている後ろのほうにも敵が忍び寄っていた。

我々も両方に分かれて伏せた。

やがてチュ・ソンデントンの機関銃が猛烈に火を噴き始めるや、我々は歩銃と手榴弾で敵に群れ死にを与えた。

敵も我々の位置を知ると前後から狂ったように射撃を始めた。

こうして敵の銃弾は我々を間において両方から飛んできた。

この時を逃さずに我々はきび畑の深い畝間を利用しながら横に逃げていった。

結局敵同士で戦わせて我々はきび畑の中にさらに深く入っていったのである。

しかしこのような方法だけでは敵に決定的な打撃を与えることはできなかった。

数量上で優勢な敵は群れ死にをこうむりながらも

引き続き猛烈な射撃を浴びせながら我々にかかつてきた。

力に余る苛烈な戦闘は続けられ、我々のトンムたちも一人二人と倒れていった。

しかしどのトンムもただで倒れはしなかった。

チュ・ソンデユン機関銃手のそばにうつぶせて敵に手榴弾を投げていたあるトンムは、両腕をすつかりやられてそれ以上戦うことができなくなるや、手榴弾を胸に抱いたまま敵の中に飛び込んでいって最期を遂げることによって敵を群れにして倒した。

彼の最後は我々のトンムたちに敵に対する敵愾心をいつそう激発させた。

我々は一発の銃弾で二、三人の敵を撃ち倒す火のような闘志で戦った。

ところが敵は我々がいよいよとしまいと構わず畑の畝間をことごとく縫うように機関銃を撃ち、手榴弾を撒き散らしながら迫ってきた。

このように二時間以上も戦うと、その広いきび畑も身を隠すところがなくなった。そればかりでなく

我々には弾もほとんどなくなった。

「トンムたち……」

私は一人二人と倒れるトンムたちを振り返りながら何度かこのように叫んだ。

しかしそれ以上私は何も言えなかった。ただ敵を倒して一人でも多くのトンムを救って任務を最後まで完遂しなければならぬという一念に燃えていたが、前からかかつてくる敵をさえぎる銃弾がないので激憤がこみ上げるのをこらえることができなかった。

チュ・ソンデユントンムの機関銃まで弾がなくなり、彼が最後に敵を撃ちながらトンムたちを援護してくれていた拳銃の弾ももうなかった。

すると彼は、「生け捕りにしろ！」と叫びながらかかってくる敵の一人を拳銃の柄で殴り倒し、二番目の奴を抱きかかえたまま倒れるともう起き上がることができなかった。

私の銃にもわずか数発の弾しか残っていなかった。ほかの数名のトンムたちの事情も同じだった。

日はだんだん暮れていった。二、三十歩ほどの地点にうつぶせた人間と草株さえも見分けにくくなる頃に、我々は広い沼の近くに至った。

私はなんとしてもそこに行つてトナムたちを隠さなければならぬと考えた。

いくらもない銃弾を惜しんで我々は暗がりの中で立ち向かう敵を撃ちながら沼に向かつて進んだ。

沼のふちに至つた時私には銃弾がたつたの一発しかなかった。

ところが真つ暗な中で我々の後ろについてくる敵の銃声は引き続き激しく聞こえてきた。

もうためらうことはなかった。私はそばにいた分隊長ハントナムを押しようにして急いで沼に入らせた。

「早く沼のふちにある木の下に隠れなさい。…」
そして私は敵を引きずつて沼を回ろうと思つた。

しかしたつた一発だけの銃弾で敵を誘引するといふのは無理だつた。

やむを得ず私も沼に飛び込む覚悟をし、最後の一

発だけの弾を込めて、暗がりの中から近寄つてくる敵を狙つた。しかし私は万一の場合を考えてたつた一発だけの弾を惜しまなければならなかつた。

私も沼に飛び込んで木の下に隠れた。敵弾が飛んできて落ちるたびにあちこちで跳ね上がる水滴が顔にかかつた。

しかし我々は一ヶ所にとどまつていることはできなかった。

我々は互いに手を貸し合つて水ならば水、地面ならば地面を這い、かき分けながらひそかに前へ前へと進んだ。そのうちに我々は暗がりの中のどことも知れない斜面の下に転げ落ちた。気をつけてよく見ると、我々が転げ落ちたところは川の斜面だつた。

(トナムたちは皆どうなつたろうか?…)

敵がうろつきながらあちこちで撃つ呪わしい銃声だけで、どこにもトナムたちは見えなかつた。

川をかすめて吹いてくる初冬の冷たい風で水に濡れた体は凍りついたが、私は寒いのも傷の痛みも省みることができなかつた。同志たちが悲しいという

思い、敵を思い切り打ちのめすことができない悔しい思い、このような思いが炎のように胸の中にこみ上げて心を鎮めることができなかった。

しかし私は努めて心を落ち着けて考えた。

（それじゃ、我々二人だけになったというのか?!
…いや違う。今ここにいるのは二人だけだとしても、我々には組織があり、たくさんの同志たちと人民がいる。

そうだ！ 彼らを探して川を渡らなければならぬ。どんなことがあっても覚が与えた任務を必ず遂行しなければならぬ！…）

このように考えながら私は地面に横たわっている分隊長の手をとって起こした。そしてせわしく息をつく彼に手を貸しながら、薄氷が張ったソニア江の水に入った。

我々は互いに離れないように手を堅く握った。そしてだんだん深くなる水の中に入った。

ぱさっぱさつと割れる刃のような氷が足の傷に触れるのも、寒くてひもじいことも、水が深くなるの

も省みるひまがなかった。ただ敵に対するこらえきれない憤怒で胸を燃やしながら、屈せずに最後まで闘おうという一念だけだった。

「…サンリオントムだけでも…きつと生きて…部隊を訪ねていってください。…」

我々が川を半分ほど渡って島のようなになったある地点に上がった時、分隊長はやつとこんなことを言うて気を失って倒れた。

私もぼおつとして冷たい地面の上に倒れている時に、誰か私を呼ぶ声が聞こえた。やつと目を開けてみると、チャン・ウォルリントムが負傷した腕を垂らしたままやつと体を支えながら私のそばに近寄ってきた。

我々は互いに抱き合い顔をすり合わせた。

そしてまだ気力を取り戻せない分隊長を起き上がらせてまた歩き始めた。

我々が一步步けばそれだけ目的のチョヨンが近づき、任務を遂行できるというこの熱い思いは我々皆の同じ心情だった。

我々はすでに先にここに来ていたヤン・タルリョントナムとともにもう一名の隊員に会った。

皆で五人のトナムが一ヶ所に集まったが、皆負傷した身だった。そしてどのトナムの銃にも皆約束でもしたかのように弾は一発ずつ残っていた。

彼らの銃を触ってみて弾を数えてみた私の胸の中からは頼もしさと新たな力が湧き上がった。

「…トナムたち！ 最後まで任務を完遂しましょう！…！続けて歩きましょう。…」

私はしきりに地面にひっくり返りそうになる体を起こしながらこのように言った。

ほかのトナムたちも各自必ず生きて闘うことができるという確信を持つて互いに鼓舞しながら立ち上がった。互いに手を取り腕を組んだり肩を貸しながらやつと一歩一歩歩み移した。

たとえ全身が水にぐっしり濡れ、肉をえぐるような北風の初冬の冷たい風が傷に深くしみこもうとも、誰も呻吟の声一つ口の外に出さなかった。

このようにあらゆる困難に打ち勝ちながら我々は

一度も地面にへたり込むことなくずっと踏ん張って明け方まで歩いた。しかし二キロにもならない草原をやつと歩いたに過ぎなかった。我々は再び川を一つ渡らなければならなくなった。

激しい川の水に打ち勝つだけの気力はなかった。そうかといつてその場にそのままいることもできなかった。夜が明ければ敵に発見されるだろうし、発見されれば避けるところのない平らな草原だった。

しばし歩みを止めてどうしようかと我々が考えている時だった。川上の方から一艘の船が我々に近づいてきた。

その方を注視すると、十余名が乗れる船だった。艀をこいでいた船頭が我々の方を注意深く眺めると、二、三人が船からすつくと立ち上がった。そしてすぐに船先を我々のいる方に向けるのだった。

我々は皆黙つて銃を取った。

私は「誰だ？…」と声を挙げようとしたが、なぜか声が口の外に出なかった。

「これが最後の戦いではないのか？…」とあるト

ンムが言うのを聞いたが、私はそれを否定も肯定もせずただ船に視線を集中していた。

緊張した瞬間が流れた。船はだんだん近づいてきた。船から一人の人が「…もしもし！ あんたたちはどなたかね？…」と先に訊いてきた。

我々は銃を握ったままにらみつけるだけで、何の返事もしなかった。

水際に着く前に止まってしまった船から一人が下りて先に薄氷をかき分けながら我々のところに歩いてきた。

その時やつと我々は彼らが敵ではないということを確認することができた。彼らはこの地方の船頭だった。

「…もしもし！…あんたたちはどなたかね？」

しばし歩みを止めてもう一度このように訊いた船頭は、「あっ！ あんたたちは遊撃隊じゃないかね？！」

と言つては我々のところに急いで近寄つてきた。

「…これはどうしたことだね…」

船頭は我々の手を取り肩を貸しながら船のあると

ころに急いで戻った。

我々を船に乗せた後に船頭たちは、夜中に人家もないこんなところに立っている人だから何か気の毒な事情がある人か、遊撃隊だろうと思つて、我々のところに近寄つてみたのだと言いながら一生懸命をこいだ。

夜が明けるまで川を下つていった我々は、ある地点に至つた。ここで我々は船頭の案内である家に入つて横になった。

聞いてみるとここは我々が目的としたチョヨンと最も近い部落であつたばかりでなく、ウアントンムが政治工作をしていた部落だつた。そして我々を救つてくれた船頭たちもここに住む革命組織の成員たちだつた。

我々はその後十五日ほどここで彼らの真心こもつた看護を受けた。我々は治療を受けながらも地方組織を通じて人民との連携を強化し、部隊の越冬準備に奔走した。

我々はチョヨンにいる敵の状況を偵察して後方の

倉庫の位置を確定する一方、ある程度健康が回復すればすぐに奴らの倉庫を襲撃する準備を整えることが必要だった。その中でも最も重要なことは我々の力量を強化する問題だった。我々は地方革命組織で活動する青年たちのうち三十余名の入隊志願者を受け入れて訓練させた。しかし我々に武器はやはり五丁しかなかった。

このような時にチヨヨンに派遣されて活動していたウアントンムが、チヨヨン城内の敵情を持って我々のところに来た。

城内には若干の偽満軍がいたが、それも我々遊撃隊がこの地方で〈完全殲滅〉されたという日帝の欺瞞宣伝を信じて極度に安逸に過ごしていた。

このような条件で我々が不意に襲撃すれば十分に敵を完全に武装解除し、城内にある敵の機関と倉庫を占領することができるはずだった。

襲撃する前に我々はチヨヨン城の内外を再び了解し敵情を確認した。その結果我々は少ない力量でも十分に戦闘の目的を達成できるという確信を持つよ

うになった。それは敵がこの付近に遊撃隊がいな
と思つて正門の歩哨を一人だけ立てているに過ぎな
いからだつた。

そのうえ裏側の土城は崩れたところまであつて、
そこからは座つた人間の肩を踏んでも楽に越えるこ
とができた。

そして我々は工作員たちを通じて敵の指揮官の奴
らと地方官吏の奴らがある宴会を準備しているとい
うことまでもあらかじめ知るようになった。

我々は奴らが酒を飲むその日の夕方にひそかに行
動を開始した。

私とチャン・ウォルリントンムは城の下にトンム
たちを接近させ、そこで待たせてから先に城内に入つ
ていった。

敵の指揮官の奴らばかりでなく、兵卒たちもあち
こちに固まって酒を飲んだりすでに酔つてひっくり
返つていた。

私はチャン・ウォルリントンムとともに歩哨の武
装を解除して軍号を探り出した。

やがて城の下で待機していたトンムたちを敵の兵舎に進入させた。

極度に放心して酒に泥酔した敵は我々の前で身動きできずに手を挙げた。

我々は敵の武装を解除してから日本の指導官二人を縛っておいて尋問をした。奴らの話によれば、倉庫の鍵を持っていた者が逃亡したというのだった。

我々は日本の指導官の奴らを処断してしまい、敵の倉庫と武器庫の扉を壊した。食糧、被服などほもちろん、武器庫には重機十丁、軽機一丁、拳銃七十丁、歩兵銃千余丁と弾数十万発があった。

敵の兵営を襲撃掃蕩すると同時に、我々はこの日一部の力量を派遣して警察署を襲撃し、監房の扉を開けた。そこには三百五十余名の罪のない人民が監禁されていた。

彼らのうちの青壮年たちは大部分が我々についてきながら、武器を取って敵と闘わせてくれと嘆願するのだった。

我々は彼らをその場で選抜して受け入れることも

できたが、地方革命組織に対する人民の認識を高めるために、革命組織の推薦をもらってきなさいと言った。

こうして我々の隊伍は地方で入隊した人たちまで合わせて二百五十余名に拡大された。

ヤン・タルリントンムが隊伍の責任を負うようになり、チャン・ウォルリントンムが政治指導員になった。

我々はもう部隊を訪ねていかなければならなかった。そのためには騎兵隊で行動しなければならなかったので、馬を準備する問題が提起された。

この事実を知るようになった人民はそれぞれ自分たちが農耕に使っていた馬まで引いてきて我々にくれようとした。

しかし我々は人民の馬を受け取ることはできなかった。我々は人民の真心に感謝はしたが、馬を接収することはできないと言うと、彼らは日帝の奴らが育てた馬二百頭がこの牧場にいるということを知らせてくれた。

こうして五十名を除いては我々のトンムたちの全員が馬に乗ることができるようになった。

敵から獲した毛布を二枚ずつ畳んで馬の背に乗せ、ろ獲したそのほかの物資は全部人民に分けてやった。

そして武器と弾は敵からろ獲した四台の貨物自動車と三台の馬車に積んで出発した。

ところがこの時人民が我々の前をさえぎりながら、まだ五十名の我々のトンムたちが馬に乗れないでどうやって深い雪道を歩くのだというのだった。だから是非自分たちの馬の中から五十頭を借りても乗っていくようにというのだった。

我々は人民の熱い誠意をあらためて胸に深く感じながら彼らの馬五十頭を借りて乗り、皆一緒に部隊に向かつて走った。

その後我々はタグミヨというところで敵を襲撃して馬二百余頭をまたろ獲した。そして地方人民から借りて乗ってきた五十頭の馬は元通り返してやった。

行軍の過程で我々は激しい風に出くわした。道は

雪に埋まり、電柱も倒れ、我々が荷物を積んでいった自動車も運転していくことができなくなった。

自動車を運転できなくなると、我々はそのたくさんの荷物を馬に分けて載せ、残りは背中にしよって運びながら、とうとう目的地まで皆無事に到着した。

私はキム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争の時期にあつたこのようなことを感銘深く回想しながら、どのような逆境でも革命家的闘志と黨員であるという高い自覚を失わずに闘うとき、克服できない難関などありえないという真理をもう一度胸に深く感じるようになる。

「革命的信義で結ばれた同志たち」

21 熱い心臓

キム・イルソン同志の戦略的方针によって我が遊撃隊が大部隊活動から小部隊活動に移行した一九四一年頃のことである。

その時我々の小組はニヨンアン県ヘルランホに宿営地を定めていたが、一度は日帝軍警の奴等が我々の宿営地を包囲した。

奴等は雪が深くて我々のいるの上には這い登ることができずに「遊撃隊を飢え死にさせる」と言いながら山の下で何日も監視ばかり強化していた。我々の小組は敵のこのような包囲の中で五、六日を過ごした。唯一の食糧だったねぎの葉と白菜の葉までみな食べてしまったのでそれ以上そのまま留まっていたことはできなくなった。そうかと言って下手に山

を下りて行ったり包囲を突破しようとして我々の位置と力量を敵に暴露させることは一層危険なことだった。

このような時にチャン・ボクトンムとウアントンムが食糧工作に行こうと進み出た。

しかし小組の責任者は二人を自分の位置に戻してしばらく待たせてから夜が更けるのを待った。そして雪の中をかき分けて下りて行った彼は、敵情を更に細心に研究して通路を確定した。それから二人のトンムを食糧工作に派遣した。「：トンムたちは食糧工作で特に次の事項に留意しなければなりません。それは敵に会っても極力戦闘を避けながら絶対に人員の損失を出してはならないということです。そし

キム・リヨンヨン

て人民から食糧を購入する時にもその家に食糧が十分にあるかを確認してから買うようにしなければなりません：もちろんトンムたちがみなよく分かっている問題ですが、もう一度強調するのです。：」

そう言いながら小組責任者はさらにしばらく彼らが行動すべきことを細かく指示してやり、万一の場合を考慮して予備の通路と連絡場所まで指摘してやった。

トンムたちは小組責任者の注意事項を銘心しながら、奴等の監視と包囲を無事に抜けて五里離れた部落に到着した。その部落は我々遊撃隊が何度も敵を退けたところで、革命大衆が多い部落だったが、二人のトンムは自分たちが遊撃隊だということを表に出さずに普通の通行人に変装してから金をやって米を購入した。そして彼らが部落を出発したのはその次の日の夕方だった。彼らは急いで戻ってきたかったが、小組責任者の指示を一層銘心しながら敵を避けて夜になるのを待ち、わざと遠回りをして歩いた。

しかし敵の狂暴が極度に甚だしかった時だったの

で、彼らはある樹林地帯で敵と遭遇するようになった。暗がりを利用して急いで身を避けたが、追撃してくる敵がむやみに撃つ銃弾でウアントンムは足と肩を負傷した。

チャントンムの肩を借りながら奴等の射撃圏内から脱出して山の尾根に登った時には、ウアントンムは傷のひどい出血のためにそれ以上歩くことができなくなつた。その上寒さはひどく雪は深く、ウアントンムの苦痛は甚だしくなつた。しかし彼は自分の傷の苦痛よりも任務の遂行を遅らせることが一層心配だった。

「ウアントンム！ あまり心配することはないですよ！ さあ私の背中につかまって！」

このように泰然として言いながら自分の上着を脱いでウアントンムの傷口をさらに包んでやって慰めはしたが、チャントンムもやはり胸がしめつけられた。

チャントンムはウアントンムが味わう苦痛が何か自分のせいのように思われて、一人心の中で泣きそ

うになりながら彼を背負い、米の中着二個を首にかけて深い雪をかき分けながら歩き始めた。

しかし初めから背負われるのを嫌がっていたウアントンムは、わずか数歩も行かずに下ろしてくれと駄々をこねた。そして彼はとうとうチャン・ボクトンムの背中を押しつけて雪の上にはばさつと落ちた。

「一時も早く持つて行かなくてはならない食糧じゃないですか、チャン・ボクトンム！…早くトンムが先に行つて食糧を渡してください！ 僕はしばらく休んでから這つても後からついて行くから…」
彼からこんな思いがけない言葉を聞いたチャン・ボクトンムは、どきつとした。「ウアントンム、何を馬鹿なことを言っているんですか！ トンムなら僕をここに置いていくことができますか？ さあ！ 早く背中につかまって！」

互いに押したり引いたりするうちにまたいくらかの時間が流れた。ついにチャン・ボクトンムは彼をつかんで起こしながら背中を向けた。しかしウアントンムはチャン・ボクトンムの背中を押しつけなが

ら背負われようとしなかった。

「チャン・ボクトンム、だめです！ ちよつとの距離ではない五里の雪道をどうやって僕を負ぶたままで行けますか。そんなことをせずにトンムは一時も早く先に行つてトンムたちに食糧を渡してください。」

ウアントンムを負ぶつて行けば遅くなるのはチャン・ボクトンムももちろんよく分かつていた。しかし革命の戦友であり、まして重傷を負つた彼を後に残しては一步も進むことができなかった。骨が砕けることがあるうとも負傷者を負ぶつて行かなければならなかった。彼は自分の首に巻いていた絹の襟巻きをほどいてウアントンムの腰をしつかりと縛つてから食糧の袋を首に掛けて、ウアントンムをむんずと背負つて襟巻きをぎゅつと締めた。それからウアントンムが何を言つても彼は応対せずに歩き続けるだけだった。ただ彼の手だけが背中に負われたトンムの体をあちこち探りながら彼の傷口が凍らないようにしようとしきりに動くばかりだった。

二人の重さで雪道をかき分けながら歩くチャン・ボクトンムの体は一步歩むたびに深い雪の中に腰まで沈んだ。そして首に掛けた食糧の袋が胸の下にしょっちゅう垂れ下がった。しかしチャン・ボクトンムはウアントンムがわがままを言わずにおとなしく背負われているだけでもありがたいと思い、彼の温かい体温が自分の背中に伝わるのが、まるで自分が幼かった時節に弟を負ぶってやったことのように感じられた。

曲がる腰にしょっちゅう力を込め、また前に垂れる首をしょっちゅう後ろへ反らしたりしながら彼は一度も休まずに山を一つ越えた。

ところがこの時背中に負われたウアントンムは、チャン・ボクトンムの両肩をつかんだままだんだん昏睡状態に陥っていった。寒くて苦しい中でも背中に負ぶった戦友の息の音一つ聞き逃さずに歩いていったチャン・ボクトンムはこれにすぐ気がついた。

彼は自分の激した感情をぐっと抑えながらただ戦友を救おうという一念で休まずに引き続き雪道を歩

いた。このようにしばらく歩いていた彼は、だんだん足の力と手の力がなくなっていく、背中に負ぶった負傷者の体重が力に余るようになっていった。それに加えて激しい吹雪と腰まで埋める雪道は、しょっちゅうチャン・ボクトンムの体をぶつ倒そうとした。そのたびに彼は自分が倒れてはならないし、時間を遅らせてはならないと自身を鞭打ちながらさらに息せわしく歩みを移した。しかしだんだん彼の力が尽きていくのはどうしようもなかった。

彼の目の前は火がついたようで、喉からは靱殻をいぶす時に出る鼻をつくような臭いがして、手足の感覚はほとんどなくなった。

しかし彼の強い責任感と同志に対する熱い友愛の精神だけはいささかも衰えなかった。彼は思わぬ瞬間に目の前が真っ暗になってばたつと倒れたりした雪の中に埋まった彼の顔が冷たい雪の感触を感じるやいなや、心臓からは小組責任者が言った言葉がよみがえった。

…人員の損失を出してはならない！ 同志を救わ

なければならぬ!

火のように熱い欲望が彼を立ち上がらせた。

彼はウアントンムの凍り付いた手足をさすってやり、また彼の両足を自分の懐に入れてほぐしてやっ
てからしばらく走ったりした。そうしながら彼が最
後の山の中腹にさしかかった時だった。

チャントンは再び目の前が真っ暗になって目に
火が漂いながら雪の中にはたつと倒れた。

彼が再び気を取り戻した時に背に負われていたウア
ントンも雪の中に体を突っ込んだままおし黙って
いた。

「あっ!?!」

チャントンは急いで頭を上げて腰の紐をほどこい
てからウアントンムをさすってやり、彼の手足を自
分の懐に入れてみた。しかししばらく前まで感じて
いた温かい感触はなかなかよみがえらなかつた。革
命の同志を失ってはならないというのが彼の心の全
てをとらえた一つの信念だった。

彼は自分の手足が凍りつくのを考える間もなくウア

ントンムをさらに力をこめてさすってやり、懐に入
れながら彼を救うのに全力を尽くした。

しばらく後に再び彼を負ふって立ち上がったチャ
ン・ボクトンムは、吹雪の中をかき分けながら山の
尾根を最後まで這い登っていった。一步一步が力に
余り、目の前はしよつちゅう真っ暗になったが、ウア
ントンムがある程度意識を回復して自分の両肩を
ぎゅつとつかんでくれるようになったことが嬉しく
て、彼はウアントンムの両方の足が凍らないように
引き続きさすりながら吹雪を突き抜けて登ってい
た。彼は夜が明ける頃にやつと小組責任者が指摘し
てくれた予備の通路を経て負傷者を負ふって食糧の
袋を首に掛けたまま密営地に着いた。

同志たちがわつと駆け寄ってチャン・ボクトンム
を抱きしめ、彼の背中からウアントンムを抱き下ろ
し、首から食糧の袋をはずすまで彼はその場にまっ
すぐに立っていたが、彼はそれ以上耐えられずにそ
の場に倒れてしまった。

チャン・ボクトンムが同志たちの手を借りて立ち

上がった時、そのそばに横になっていたウアントン
ムも意識を回復した。そして小組責任者と戦友たち
の視線とともにチャン・ボクトンムを眺める彼の両
目からは熱い涙が流れていた。

22 熱い同志の愛情で永遠に生きよう！

パク・トウギョン

一九三六年十一月ニヨンアン県一帯で活動していた我々の部隊は、隣接部隊との連携を結ぶためにサムドグの樹林の中を行軍していた。この時指揮官は苛烈な戦闘で負傷したピョンソントムのを始めもう二人のトムムを看護せよという任務を私に与えた。こうして私は患者たちを連れて深い樹林の中に残るようになった。

ところが何よりも心配だったのは患者を治療した経験と薬と治療道具が全くないことだった。

貫通傷を負ったピョンソントムの足は日が経つほど黒く腐っていくばかりだった。私はよくよく考えた末に、腐ったところにはニレの木の皮をつき砕いてつけるのがよいという誰かの話が頭に浮かんだ。チョウセンマツ、シラカバがびつしり茂ったサムドグの樹林の中は、吹き荒れる吹雪のために前がよ

く見えなかった。山の獣も寒さに震えるそんな天気だった。

私はニレの木の皮を手に入れるために山の斜面に登り下りし始めた。しかしニレの木はなかなか見当たらず、私は何日も雪に覆われたこの山あの山を探し回った。

そんなある日木材所がある裏山に登っているうちにそこでニレの木を一本発見した。私は余りにもうれしくて木を抱えて、

「ニレよ、ありがとう。」と心の中で叫んだ。

その後のある日の夜だった。

体が衰弱しきって身動きできない女性患者の世話をしてやっていた私は、患者の横に座ったまま眠ってしまった。どれだけ時間が経ったのか、私は夢うつつにこんな話し声を聞いた。

「でも私には到底希望がなさそうです。」女性トムのすすり泣くような声だった。

彼女の言葉に続いて、「そんなに気を弱くしてはいけません。へこれしきの病気が何だ」と気を大きく持たなくちゃ。固い意志と熱い同志たちの愛情以上が良い薬は私たちには恐らくないでしょう。」と言うピョンソントムの声は興奮で震えていた。

目を開けてみると、ピョンソントムは身動きできない女性患者にさじで粥を食べさせていた。女性トムはピョンソントムの真情を拒みきれない様子で、黙ってその粥を受け入れていた。それを眺めた私の目にはいつものまにか熱い涙が浮かんだ。

次の日だった。私はピョンソントムの傷口を縛っていた布切れをほどいて膿をしばった。ひどい苦痛を歯を食いしばってこらえようと努める彼の顔には脂汗が噴き出していた。

一緒に脂汗を噴き出しながら私が治療を終えた時やっと彼はその場から起きて座りながらふうつと熱い息をついた。私は彼の顔の汗をふいてやりながら、

横になりなさいと勧めた。しかしピョンソントムは横にならずに開いた小屋の扉の隙から外をしばらく眺めた。そして満足そうな微笑を満面に浮かべた。

外は雪が降った後の晴れ渡った天気だった。枝に雪が積もったチョウセンマツはまるで白い花が咲いたように絵のように美しかった。それを見ると私も幼い時節の故郷の山川が目の前に浮かんだ。

「春の日のように花が咲いたね。」と言ってピョンソントムは祖国を懐かしむように南方の空をうっとり眺めながら、革命の勝利と幸福に満ちた明日についてささやいた。

「今に日帝の奴らを打ち倒して祖国に帰ったら、僕は大工になります。工場や家をたくさん建てなくちゃ。本当にあんな一抱えものチョウセンマツも僕たちの暮らしをたてる立派な材木になるでしょう。」

何と若者らしい美しい夢か！ この美しい夢を一日も早く実現させるために我々は革命の道に従っていつそう力強く前進しなければならぬし、難関の前でいささかも屈してはならないことをいつそう自

覚するようになった。

この時急に谷間から銃声が起こった。そこで私はあわてて身動きできない女性トナムを背負い、もう一人の患者を支えながら小屋の外に飛び出した。すでに十余名の偽満軍の奴らが約一キロメートルへだてた向こう側の尾根伝いにこちらへ向かつてきていた。私は左側の稜線をよじ登り始めた。敵弾が鋭い音を立てながら頭の上を飛び過ぎた。

膝まで埋まる雪の中をかき分けながら二人の患者を助けて登ろうとすると、息が今にも詰まりそうだった。やっと山の尾根に登った私は、すぐに彼らを適当な場所に隠してから、息つく間もなく小屋を駆け下りた。小屋にはピョンソントナムが残っていた。

ところが私が小屋の中に飛び込んだ時だった。斧を振り上げたピョンソントナムが歯を食いしばって私に飛びかかってくるのではないか。彼のかっと見開いた両目には、敵に対する憎悪の炎がめらめらと燃え盛っていた。

「どうしたんだ、ピョンソン！」私は急な声を張

り上げながら、斧を持った彼の手をつかんだ。ピョンソントナムは私を「討伐隊」だと思ったのである。私が誰だか分かった瞬間彼は「おじさん！」と叫ぶと、一時も早く山に登って二人のトナムを助けてくれと頼みながら、自分はずでに覚悟を決めた身だからこの場で最後まで戦うと言った。私は状況が非常に急だったので、「だめだ」という言葉と共に彼を負ぶって山に駆け登り始めた。万一の場合を考えて、私は患者たちがいるところと反対方向の右側の尾根によじ登った。敵弾は容赦なく走る我々の前後を縫って雪の中に突き刺さり、奴らの叫び声もすぐ後ろから聞こえてきていた。

「これでは無理です。どうかお願いします。僕を下ろしてください。こうしては二人とも死にます。」このように叫びながら背に負われたピョンソントナムは私を耐えがたくした。いっそ死ぬならばいっしょに死のうとも彼を下ろしたくはなかった。

私は彼を負ぶったまま走りに走った。

九死に一生を得て奴らの追撃からやっと脱出した

我々が、倒木が幾重にも重なった鬱蒼とした樹林の中に至った時は暗くなる頃だった。私は一人が入れるぐらいの岩の隙間を発見し、そこにピョンソントムを隠した。そして雪の跡を埋めながら一定の場所まで来てから、二人の患者を隠した尾根に向かって歩みを急がせた。

二人のトムは私がたどり着いた時にも雪をかぶったまま死んだように動かないでいた。暗がりが増くなつていく山の下の方からは奴らの騒ぎ立てる声があったときたま聞こえてきて、小屋を燃やす炎が空に上っていた。

私は雪が山のように積もったところに近づいて、もう起きなさいと低い声で言った。そして彼らの体の上にかぶさつた雪を払い始めた。

二人の戦友の体は凍つてかちかちだった。これを見た時私の胸は張り裂けそうで、しばらくはまったくどうしたらよいか分からなかった。しかしどんな寒さも我々の熱い心臓だけは凍らすことができないうという思いで希望を失わず、戦友たちの体を解きほ

ぐしてやるのにあらゆる力を尽くした。

こうしてとうとう気力を回復するようになった時、我々は互いに抱き合い、涙を流した。

私は彼らに手を貸して小屋があつたところに下りてきた。奴らはすでにどこかへ消え去り、燃え残った小屋の柱からは炎が揺らめいていた。

私は二人の戦友を火のそばの平坦なところに寝かせ、私の外衣をかけてやつてから、再びピョンソントムを連れに出かけた。ピョンソントムは元の場所にいなかった。私はマッチをすってあちこち探したり彼の名を何度も呼んでみたが、結局は無駄だった。私はひどく慌てた。

私の目の前には彼の顔がすぐに現れては不意に消え、どこかで私を呼びながら走つてくるような気もした。もどかしいその時の心情は到底推し量ることができないものだった。

その日の夜私は雪に埋まった山の中をあちこちさまよううちに一度崖から落ちた。しばらく後に気を取り戻してみると、木の葉の間には星がきらきら輝

き、白い雲がどこかへ流れていた。そしてどこかで明らかに私を呼んでいるピョンソントムの声が耳元に響くような気がして私は再び山の中をさまよった。

こうして一晩中さまよった私はほとんど明け方頃になつて力なく小屋に下りてきた。しかしピョンソントムがひよつとして這つても小屋まで下りてきているかも知れないという希望まで潰えるや、私は力が抜けて地面に倒れてしまった。

今はたった一つの希望だけが残っていた。木材労働者たちがいる合宿に行つてみよう。彼らが山で働いているうちに雪の中をさまよっている彼を救つたかも知れない……こう考えた私はすぐにその場を蹴つて立ち上がり、「木材所に行つてくるから待っていてくれ。」という言葉を残して歩みを急がせた。木材所までは二里はゆうにあつた。

木材所の合宿がある近くまで至ると夜が明け始めた。

私はどきどきする胸を努めて抑えながら、木材所

の合宿が見える近道に入った。この時すぐ近くで人の気配がしたので探つてみると、誰かが拳を握り締めてこちらへ向かつてきていた。私は木の後ろに隠れて彼の動静をうかがつてから咳払いをしながら彼の前に姿を現した。その人はちようどここの木材所の労働者だった。彼は私を上から下まで注意深く眺めると、ていねいに、私がひよつとしてキム・イルソン將軍部隊の人ではないかと訊いた。そうだと答えると、彼は私を力いっぱい抱きしめて、やつたと叫びながら私を木材所に連れて入った。

かなり暗い明け方の木材所の合宿は静かだった。一部屋にはまだランプの灯がともつていて、外からもその部屋の中にたくさんの人がいることが分かった。労働者の案内で私は灯がともっている部屋に入つた。私が部屋の中に入るや、労働者たちの歓喜にあふれるような視線が一度に私に注がれ、その中でもピョンソントムの涙ぐましいほどうれしそうな視線とぶつかった時、私は喉がぐつと詰まるのを抑えることができなかつた。私は彼の横に近づいて座り、

彼の分厚い手をぎゅっと握った。すると私の目からは喜びと安堵の涙がいつぱんにこぼれ落ちた！ピョントントンムもやはり涙ぐんで私の顔を長い間見つめるばかりだった。

我々の対面を黙って眺めていた労働者たちのある一人は、興奮に震える声でピョントントンムがどのようなしてここまで来るようになったのかを語った。

：山で働いていた労働者たちは急に起こった銃声を聞いていろいろ議論した末に、間違ひなく遊撃隊が奴らと戦闘をしているのだという結論に達し、日が暮れてそりに木を積んで下に下りてきた労働者たちは、雪の中になうつ伏せたまま動けないでいるピョントントンムを発見した。そこで労働者たちは自分たちが着ていたトツチヨゴリ〔チヨゴリの上に重ねて着る大きいチヨゴリ〕を脱いで彼にかけてやり、そりに彼を乗せて木材所の合宿まで来たのだということだった。

当時身を隠していたピョントントンムは戦友たちのことを考えて独力で小屋に下りてくるうちに意識

を失って雪の上に倒れたのだった。彼は明け方頃にやっと意識を取り戻した。そして昨晚のことを知るようになった彼は、極度に衰弱した体ながらもトンムたちが待っているから行ってみなければならぬと言いつ張っているうちに、労働者の一人を山に連絡に送るのを見てやっとあきらめたという：

ピョントントンムは私の顔に自分の頬をこすりつけながら言うのだった。

「僕たちは永遠にこの熱い愛情の中で生きましよう。」

私も黙って彼を力いっぱい抱きしめてやった。彼を負ぶって密営に来ると、もどかしく私を待っていた二人のトンムは、私とピョントントンムをつかんでどうしてよいか分からないほど喜んだ。この熱い同志の愛情で結ばれた我々は、いかなる困難も必ず突破できるという信念をいつそう胸に熱く抱いたのだった。

革命家は自分自身を信じられなくなった時誰もその人間を助けることはできないし、その人間は悲劇と破滅を免れることはできない。それと反対にどんな逆境でも希望を失わず自身を信じ、同志と組織を信じて頑強に闘うならば必ず勝利する。

私はこのような事実を我々の革命先烈たちと同志たちの闘争の足跡を通じて多く見て学んだし、私自身が直接体験したことも少なくない。その中で私は今でも昨日のことのようにはつきりと記憶していることがある。

一九三九年だったと思う。初冬のある日、すでに雪が道を埋めて絶え間なく降っていた。

この時小部隊工作任務を遂行して、キム・イルソン同志がおられる司令部に帰っていく途中で我々はモンガンの樹林の中でしばらく休息をするうちに、

パク・ソンチョル

不意に遭遇するようになった敵の大部隊と力に余る戦闘をするようになった。

敵は数量上の優勢を信じて引き続き我々に接近してきた。

雪に埋まって静かだった樹林の中はたちまち殺伐とした戦闘の場に変わり、双方の銃弾が雨のように飛び交った。前を見分けるのも困難な暗がりの中で我々は近寄ってくる敵を狙って機関銃射撃を集中した。

しかしそのまま戦闘を続けることはできなかった。

私は機関銃手のパク・クンチルトンムと共に、襲い掛かってくる敵の主力をなぎ倒しながら、小部隊の責任者である政治委員同志に我々が防衛するからトンムたちを早く撤収させてくれと叫んだ。

そしてパク・クンチルトンムと私は引き続き敵の

主力に向かつて猛烈に火を浴びせた。我々の強い反撃に多くの敵が倒れた。

我々の前面に現れた敵はだんだん氣勢が衰えていき、その間に我々のトンムたちは安全な地帯に脱出することができた。

しかし敵もいつまでも同じ場所にぐずぐずしてはいなかった。奴らは我々の方に人員が少なく、機関銃一門のほかには私が撃つ拳銃だけなのを知ったのか、我々を包囲しようとした。

「生け捕りにしろ！ 生け捕りにしろ！」

と喉をつぶすような声を挙げながら奴らは暗い樹林の中のをちこちからだんだん迫ってきた。

しかしこの時クンチルトンムが撃っていた軽機は弾がほとんどなくなつてそれ以上射撃を続けることができなくなつた。もしもそのまま射撃を続けて弾をすつかり使つてしまつたら、より決定的な瞬間になつた時打つ手がなくなつてしまう。

そこで私はクンチルトンムに機関銃を持って急いで撤収しろと叫びながら、敵を引きずつて彼とは別

の方向に進んだ。しばらく戦つた時だった。別の倒木の向こう側に場所を移そうとしたせつなに私は何かに腰を殴られたような衝撃を受けて倒れた。

急いで立ち上がろうとしたが、体が動かなかつた。敵の凶弾が腰を貫通したのだった。

しかし私は射撃を中止することはできなかった。クンチルトンムが無事に逃げるまでどんなことがあつても敵を私の方に誘引しなければならなかつた。それで頭をやつと上げて拳銃を握つた。しかしすでに目の前は真つ暗で目標を定めることができなかつた。

(…もうこれ以上戦えないというのか！ いや、そんなはずはない。私は最後まで戦わなければならぬ！……)

私は氣力を振り絞つて、敵の足音がする方向に向かって拳銃を撃つた。

近づいてきた奴らのうちの一人が悲鳴を挙げて倒れた。

私は再度拳銃を撃つことはできなかった。すでにそのような氣力さえ消失していたのである。そうか

といてそのまま倒れているわけにもいかなかった。
：（どうしたらよいか?!）

しかしあれこれ考える必要さえない決定的な瞬間
だった。

私が拳銃を再びつかんだ時に、急に身のすくむよ
うな機関銃の音が樹林の中を揺るがしながら、押し
寄せる敵をなぎ倒し始めた。

敵の中から脱出していったクンチルトンムは、私
の撃つ拳銃の音が止んだのに気づくや、危険を顧み
ず再び敵の中に飛び込んで射撃をしたのだった。

そのため私にほとんど近づいていた敵が群れになっ
て倒れ、そのほかの敵は恐れおののいて退き始めた。
そしてクンチルトンムの機関銃の音もそれ以上は
聞こえなかった。

敵が退却した樹林の中は再び静かになった。

このような時にクンチルトンムは私を探すのに大
変苦労していた。それからしばらく後にやっと暗が
りの中で私を探し出した。

「中隊長トンム！ 中隊長トンム！…」

彼は私の体を抱いてのどの詰まった声でこのよう
に繰り返し叫んだ。

そして暗がりの中で私の顔をのぞきこむと、黙っ
て私を助け起こすのだった。

彼は私が何も話せないでいると、もどかしそうに
何度も繰り返し「中隊長トンム！」と声を詰まらせ
て呼ぶのだった。

私は彼に呻吟の声を聞かせないために歯を食いし
ばって耐え抜いた。しかし彼がしきりに私を呼ぶ時
には返事をするのが非常に困難だった。しかしどん
なに勇気を出して平然と応対して彼を安心させよう
としても、私の声は内にこもってしまっただうする
こともできなかった。

時間が経つほど私の胸と腰からは出血がひどくて
いつそう苦しくなった。

クンチルトンムが片方の手では軽機を担ぎ、片方
の腕では私を支えながらしばらく歩いた時に夜が明
けてきた。

我々はトンムたちと再び会うべき場所とは全く違

うところに来たということにその時やつと気づいた。そうかといつて夜が明けてから敵がうろつきまわっているかもしれないところを再び通るわけにもいかなかった。

その付近にある崖の上に適当な隠れ場所を発見した我々は、まずそこに登っていつて、一昼を過ごすことにした。

まずクンチルトンムが崖の上をやつと這い登っていった。そして脚絆をほどいて下ろした。私はその脚絆を腰に巻きつけて、クンチルトンムが引つ張るままに体を持ち上げられるようにしながらやつと崖の上に這い登った。そして岩の隙間に身をもたれて横になると、ある程度気が休まるようだった。しかしこれは瞬間で、時間が経つほど傷の苦痛はだんだんひどくなつていった。

そこで服をはだけて傷口を見ると、非常に険しくえぐられていて、血が固まった中に土と枯れ葉が乱雑に詰まっていた。

私はクンチルトンムに見られてはと思つてすぐに

裾で傷口を覆つてしまった。そして苦痛をこらえながら目を閉じた。

「中隊長トンム！」

と言つて私のそばに寄つてきた彼の目は濡れていた。

彼はこぶしで涙をぬぐいながら、私の傷口に詰まつた土と枯れ葉をかき出し、自分の下着を裂いて私の胸と腰の傷口を縛つてくれた。

だんだんさらにひどくなる傷の苦痛と、喉が焼けるような渴きが耐えがたい中でも、私は小部隊のほかのトンムたちの姿がしきりに浮かんできていつそうやるせなかつた。

（彼らは無事に行つただろうか！クンチルトンムと私を探すのにどんなに苦勞するだろうか。…私は生きて再び彼らに会えるだろうか。

いや、私は生きる！私は彼らに会わなければならない。）私はぱつと立ち上がろうとしてそのまま「だすん！…」と音を立てて再びその場に倒れてしまった。

敵とこれ以上戦えずに倒れるのかと思うと、悔しくてならなかった。

我々には食糧もなかった。クンチルトンムは二日間も腹をすかせた上に機関銃まで担ぎながら私に手を貸すのだから、力は尽きるままに尽きた。それでも彼は私を助けようという考えを捨てなかった。

「クンチルトンム！ 私をここに置いて君が先に行って小部隊のトンムたちを探してきなさい。…」
私は何度もこのように言ったが、彼はその次の日の夕方になっても、よく動けない私を立たせながらいっしょに行こうと言った。

「隠れ場所も完全でない上に負傷している中隊長同志を一人残してどうして僕が出かけることができますか。…」

「いや…こうして歩いていては二人とも死ぬぞ！」

「僕たちは死にません。…必ず部隊を探し出すようになります。僕は死んでもいっしょに死に、生きてもいっしょに生きてます…いや、必ず生きてさらに

戦うことができます。…」

クンチルトンムが叫ぶように言うこの言葉を聞いた瞬間、私は胸がじいんとなった。どれほど生と闘争に対する確固とした信念を持った戦友の熱い心であろうか！…だんだん気力が尽きていく自分の体力を培い、いつ敵に出会うかも分からぬ丘の樹林の中で、ひどい出血で気力が尽きた戦友を最後まで救おうという彼の燃えるような心情！ 死んでもいっしょに死に、生きてもいっしょに生きようというこんな戦友を前にして誰が空しく死ぬことを考えようか！…そうだ、最後まで生きて戦わなければならぬい。…」

私はクンチルトンムの言葉と行動から最も高貴な革命の戦友の熱い心情を感じ、より新たな希望と新たな力を得た、

私はどんなに気力を振り絞っても一人で歩みを移すことはできなかった。

私を支えて歩くクンチルトンムは、私が一步一步歩みを移すたびにひどい苦痛をこらえているのに気

づき、その苦痛を自分の苦痛のように思つて不憫そうに軽くため息をつきながらこぼしで涙をぬぐうのだった。

彼は私をしばらく座らせ地形を調べると、木を折つてそりを作り、私をそこに寝かせた。

しかし彼もすでに力が尽きてそりを思うように引つ張れなかった。若干の登り坂でも気の毒なほど息を切らした。そうするうちに力が尽きて雪の上にしぱらく倒れたままでいることもあった。

これを見た私の胸からは火が起こつた。私はそのまま横になつてゐることはできなかった。私は彼がうつ伏せて気力を整えている間に一人で雪の上を這つた。

彼の負担になるまいという思い、敵をもつと多く討とうという思い、生きようという思い、このような思いで私はひどい傷の苦痛も忘れてひたすら這つた。

そのうちにクンチルトンムが気を取り戻して起き上がり、私がいらないのに気づいて大声を挙げたので

振り返つてみると、わずか二、三十歩の距離にもならないところにいた。

実に涙の出るような思いを禁ずることができなかった。クンチルトンムの手につかまえられるようにして私は再びそりの上に横になり、衰弱した彼に私の身を委ねなければならなかった。これは全く苦痛なことだった。しかし私はクンチルトンムの熱い同志愛を考えても彼の要求に応じざるを得なかった。

ところが我々が山道の曲がり角を一つやつと回つた時に、不意に前に現れた〈討伐隊〉の奴らを発見した。

「クンチル！…私を下ろしなさい。」

しかしクンチルトンムは聞く振りもせず私を背負うと、よろめきながらそのまま山に這い登るのだった。

どこから彼にそんな力が湧いたのか。

敵に対する憎悪！ 同志に対する愛情！

身動きできずに彼の背に負われていた私は、彼が坂道で転んだ時に、彼が担いでいた機関銃を奪つて

握り、地面の上に転がり落ちた。そして我々の後に
ついてくる敵に向かって射撃し始めた。

こうして目の前に飛びかかってくる敵を退けるこ
とができた。

しかしそれ以上は戦えなかった。

敵は引き続き這い登ってきて、事態は刻々と危険
になっていった。

「中隊長トムム！ やむを得ません。しばらく別
れましょう。」

このように言つてクンチルトムムは落ち葉をかき
分けながら、私に中に入つて身を隠せと言うのだつ
た。

彼が余りにも必死な様子を見せるので、私は彼が
させるとおりに身を任せた。彼は私を落ち葉でうま
く覆い隠した。

「中隊長トムム！ 僕が戻ってくるまできつと
待つていてください。」と言つて彼は敵を誘引しな
がら前へ突つ走つた。

彼の後を踏むように〔討伐隊〕の奴らが私が埋まっ

ている近くに殺到してきた。敵は何かしゃべりなが
らせわしく動き回つていた。

奴らがあるいは私のいる落ち葉をかき分けるかも
しれないと思つて私は拳銃を握り締めた。万一の場
合には血の代償を取ろうと思つたのである。

こんなことを考えた私に不意にキム・イルソン同
志が我々の部隊に來られた時におつしやつた言葉が
はつきりと浮かんた。

「革命家はどんな難関にぶち当たろうともそれに
打ち勝つことのできる闘志を持たなければならぬ。
難関の前から退くということは革命から退くという
ことを意味する。」

瞬間私ははつと気を取り戻して頭を振つた。
（生きなければならぬ。まだ革命は終わつては
いない。生きている限り戦わなければならぬし、
革命が終わるまで戦わなければならない。）

このような間に奴らは何かぶつぶつ言いながら、
クンチルトムムが去つた方へ押しかけていき、どう
とう我々を見つけれずそのままだりていつてし

まった。しばらく後にクンチルトンムが再びやってきた。

奴らの追撃から逃れて生き抜いた我々は、余りのうれしさに抱き合った。

その日の夕方我々は樹林の中を抜け出してとうとう我々のトンムたちの足跡を発見した。

クンチルトンムは余りのうれしさに私を抱きしめて、「中隊長トンム！ 僕たちのトンムたちの足跡があります。」と叫んだ。喜びにあふれた彼の顔を眺めた瞬間、私の目頭は熱くなった。

我々は勇気百倍でその足跡について歩いた。夜通し歩いたが、隊伍は現れず、密営も見えなかった。

我々はそれ以上進めず、夜が明けるや樹林の中に入って火を焚いて休息した。

大きな松の木の根元に寄りかかって座った私は、知らぬ間に昏々と寝入った。

…祖国の美しい山川が見えた。我々の部隊はなつかしい祖国の地、ある一つの村を解放した。私は飢えに苦しむ村人たちの前で、朝鮮は生きており、遠

からず解放されると、江山に響くほど演説を行った。：

ところが急にはらわたがちぎれるような痛みには目を覚ました。私はその時やつと夢を見ていたのだと気づいた。

クンチルトンムもぐつすり寝入っていた。焚き火も消えかかっていた。彼は寒さに背中を丸めて眠っていた。

どんなに寒いだろう、私は焚き火に木をくべようと体を動かしてみたが、思うようにならなかった。

その代わりに私は痛さで悲鳴を挙げた。目を開けたクンチルトンムは私のところに来ようとぼつと立ち上がった。

この時周囲を見回した私の目には大きな木の柱に何かが書かれているのが見えた。

よく見ると、誰かが斧で「十月十七日」と木に刻んでいるのではないか。明らかに我々のトンムたちの仕業だった。

（何の標識か？ この日ここで誰かと会おうとい

うことか？ それならばこれは間違ひなくまた戻つてくるという意味ではないか！ もう二日経てば十七日ではないか！

このように考えた瞬間、我々の喜びは限りなく大きかった。

「クンチルトンム！ 待つてみよう。我々のトンムたちがきつと現れるに違ひない！…」私は戦友たちと会う希望に包まれるようになった。

我々は再び飽き飽きするような時間を過ごした。

ついに十七日の夜が迫ってきた。クンチルトンムは疲れて寝入っていたが、私は傷がうずいて眠ることもできず、ぼんやりと空ばかり眺めていた。そばに焚いていた焚き火は音もなく燃えていた。

この時はさつばさつという怪しい音が近いところから聞こえてきた。私はクンチルトンムを揺すつて起こし、横になったまま銃を前に構えた。

この時向こうで、「そちらは誰だ？」とどなった。私はとっさに「我々だ」と答えた。

再び向こうから「あんたは誰だ？」と訊いてきた。

「ソンチョルだ。あんたは誰だ？」と私は向き合つて言った。すると彼らは、「中隊長同志ではないですか?!」と言つて一目散に走つてきた。

彼らは我々の分隊の通信員のトンムたちだった。私は力が抜けてしばらく彼らを眺めるばかりでどうしてよいか分からなかった。

クンチルトンムは余りのうれしさにトンムたちを抱きしめてすすり泣いた

彼らは木材所を襲撃して帰ってくるトンムたちにここで会おうと文字を刻んでおいたということだった。

私はこの時のことを忘れることができない。それは私が艱苦な日々信念と希望を失わずに耐え抜いたというそのこと以上に、クンチルトンムが自己の誠実性と革命的同志愛を尽くして死の境に処した私に希望を培つてくれ、私を救つてくれたその熱い愛情を忘れることができないからである。

「不敗の隊伍」

24 インターナショナルの歌声を聞きたびに

キム・ビョンシク

一九三九年の冬から四十年の春にかけて五ヶ月余り私はアンド県ホンソクラチャの森林の中で患者たちを看護していた。

患者は全部で五名だったが、彼らは中隊政治指導員を始めとして大部分が虚弱な患者たちで、貫通傷を負ったトンムも一名いた。

このほかに我々の中には責任者であるウアンおじいさんと看護員兼食事を担当したキム・スクチャという一八歳になった女隊員がいて、私と同年の十六歳になるクアンヂェトンムがいた。

部隊は遠征に出発する時、二カ月後に連絡を送ってくれることになっていた。ところがなぜか約束した二ヶ月が過ぎ、三ヶ月が過ぎてひなた側に積もっ

ていた雪が解け始める早春になつても部隊からは何の消息もなかった。

その間患者たちの傷はだんだん回復していった。

しかし食糧がすでになくなってから久しかった。我々は草粥でやっと食事を続けていった。最後の時期には誰が患者なのか分からないほどに我々看護する人間もひどくやせこけた。

部隊との連携が長い間断たれたあまり、我々は時折沈うつな気分に含まれる時もあったが、スクチャトンムだけは常に明朗な気分で患者たちの世話をし、インターナショナルの歌を好んで歌った。

我々はいつ聴いても新たな力が湧くその歌を愛したし、彼女が歌うのについて一緒に歌ったりした。

しかし我々はひどくいらだつ中で今か今かと部隊から連絡が来るのを待っていた。

(…完全に連携が断られたのではないのか! いや、そんなはずはない。不可避の事情で連絡員を送れずにいるのだろう。部隊では我々以上に我々のことを考えているし、必ず連携の手を差し伸べてくれるだろう…)

我々はこのような固い信念を一時も捨てなかった。それほどにも切なく待ち焦がれていた連絡員が現れたのは数カ月後だった。部隊と連携を持つようになった我々の喜びは限りなく大きかった。

我々はすぐに出発準備を急いだ。連絡によれば、全部隊はファジョン県ソンファ江付近にある密営に終結した後、再び別の密営に根拠地を移すことになるので、ちょうどその時に目的地まで到着するためには早く出発しなければならなかったのである。

しかしまだ傷が治っていない患者が二人もいた。彼らを看護しながら道もない険しい峻嶺を越えて、数十里の路程を行軍しなければならぬ我々の前途

には多くの難関があるに違いなかった。

看護する我々は経験がなく年が若い新入隊員なのでなおさらそうだった。

我々の行軍はまたとないほどのろかった。最初の日はやっと三里しか進めずに宿営した。次の日もどうにかこうにか三里近く行軍したが、もう三日目からは二里半に減り、五日目には一日に二里にも及ばなかった。

まだ一週間にも経たずに政治指導員トムの負傷した足が再び腫れ上がり始めた。まだ治っていない二名の患者も、我々の肩を借りながら辛抱強く歯を食いしばってついてきていたが、とても力に余った。

我々はやむを得ず三日に半日、五日に一日ずつ休んで行かざるを得なかった。

しまいには一日にやっと一里しか進めないこともあった。

我々健康な人間も患者の荷を保管して彼らの面倒を見ながら行軍したので、疲れるままに疲れて自分

の身を支えるのも困難だった。

行軍を始めてから二十日ほどして我々はやっと予定した路程の半分を来た。患者たちはしょっちゅう後ろに遅れた。

崖の下に転がり落ちて再び這い上がるうちに倒れたまま身動きできないこともあった。ある日私の前で足を引きずりながらやっと歩いてきた政治指導員トムムが、石につまずいてそのまま横に倒れながらあつという間に崖下に転がり落ちた。

私は急いで彼の後を追って崖下に滑り降りていった。私の後ろからウアンおじいさんも降りてきた。

ウアンおじいさんと私は、倒れたまま起き上がることもできずに呻吟する政治指導員トムムを助け起こした。

彼は痛みをこらえようと血が出るほど唇をかんだ。足からは傷口が破れて血が流れていた。

ほかの患者たちもその場にばたばたと座り込んでしまった。

我々はこの日やむを得ず行軍を中止して焚き火を

焚いた。夕方の食事を終えるが早いか皆びくともせずに寝入ってしまった。私もいつの間にか寝入った。

どれだけ時間が流れたのか、私は私の横でひそひそ話す声が聞こえてぼんやり目を開けた。

「…こんなに遅れてはいけません。もしも部隊が移って行ったらどうします？」

ですから健康な人間だけでも先に行く方がよいでしょう…歩けない私たちはゆっくり後からついていきます。そうしましょう。」

このように話す政治指導員の声には、遅れる行軍をとでもつらく思う心情がこもっていた。

しかしそれに続いてゆっくりとしてよんだウアンおじいさんの声が聞こえた。

「そんな心配は決してしない方がよい。部隊が移っていくとしても連絡をする措置を取るはずじゃないか？ それはだめだ。ほかのトムムたちがそう言っても止めなければならぬ立場なのに、なぜそんなことを繰り返すのかね？」

二人の間にはしばし言葉がなかった。

重い沈黙に沈んでいる彼らのことを思いながら、私は目頭が熱くなるのを禁じることができなかった。遅れる行軍を心配して離れようという政治指導員トナムや、負傷した同志たちをなんとかしてでも一緒に連れて行こうというウアンおじいさんのけなげな心情がしきりに私の心を打つのだった。

つらい行軍は再び続けられた。これはそれこそ血のにじむ闘争だった。一人が倒れば皆が付き添って肩を貸し、肩を貸す力がなければ一緒にもたれられないながら歩いていった。

再び十日が過ぎて我々は険峻な山道にさしかかった。この道は三里を登って二里を下らなければならぬ急な峠だった。

谷間を曲がりくねって流れる小川を何度も越えなければならぬ険しい崖道を荷物を担いで登るところは、健康な人間でも力に余ることだった。ところが一と月を超える苦しい行軍に疲れきった我々が患者まで助けながら行こうとするので、いくらか進まずに力が尽きてしまった。のどからは焦げるよう

な匂い上がり、息が切れ、歩みを移すことができなかった。我々はいくらか先に登って荷物を降ろしておいてまた下りてきて患者たちをおぶって山道を這うように登ったりした。しかしたった五十メートルも登ることができずに患者をおぶったまま座り込むのがしばしばだった。

もうすっかり昼食ころになつても我々はこの日やつと半里しか登ることができなかった。このままでは三日かかっても山頂まで登れそうになかった。

うっそうとした森林の中で昼食を済ませると、我々健康な人間は集まって、午後からは半里ぐらい先に荷物を置いて戻ってきて患者たちを連れて行く方がよいだろうという相談をしていた。

相談がちょうど終わった時だった。

「トナムたち！」と膝を怪我したトナムが前に近寄って座りながら、震える声で言った。

我々は尋常ならぬ彼の顔を振り返った。

「どうしたんだい？」

「私の足ではもうこれ以上行軍できません。我々

負傷者はここに残つて何日か安静してから後からついでいくようにしてください。」

「おや、あんた何を言うかね？」とウアンおじいさんがまず彼をじつと見つめながら言葉を受けた。

「：私もこんなことを口の外に出したくはありませんでした。しかしトンムたちが我々のためにあまりにも苦勞することを思うと：もうとても我慢することが：」と言つて彼は言葉尻を結べなかつた。彼の目からは今にも熱い涙がこぼれそうだった。

その言葉がどれほど懇請するように切々と響いたか、囲んで座つた隊員たちはまるで鉛の塊に押さえつけられたように重い気持ちで黙つていた。

「トンム！」

ちょうど彼の横に座つていた政治指導員トンムが彼の両手を取つた。

私はしばらく前にあつたことを思い出して、彼もやはり同じ意見を言うだろうと思つた。しかししばらくして彼の口から出てきた言葉は私の予想とは非常に異なるものだった。

「トンム！ その心情は私もトンムも全く同じです。しかしそれは弱い考えです。困難の前から退いてはなりません。我々は行かなければならない。部隊は今我々の到着を待ち焦がれています。」

このように話す彼の声は震えていた。

この時耳慣れたインターナショナルの歌声があらから聞こえてきた。小川のほとりに水を汲みに行つていたスクチャトンムが帰つてきながら歌う歌だった。

立ち上がれ 呪いの 印を刻まれ
飢えて 奴隷となつた者の 世界

神も 王も 英雄も

我々を 救うことは できない

我々は ただ 自らの 手で

解放を もたらすのだ

いつも聞きました歌う歌だったが、この時ほどこの

歌が私の心を激動させたことはなかった。

私は思わずその歌について歌った。私ばかりでなくウアンおじいさんも、政治指導員も、そして患者たちも皆ついて歌った。

その歌声によつて我々の手足からは新たな力が湧き上がるのだった。

我々は新たに旅装を整えて歌を歌いながらその場から立ち上がった。患者たちも杖について一歩二歩と力を込めて歩みを移した。

次の日の夕方我々はいいに山頂に登り立つことができた。

我々は汗を乾かすのも忘れて長い間歓声を挙げた。あれほど恋しんだ我々の密営のある山並みが目の前に眺められたのである。その向こうには友が呼んで差し伸べる手のように、ソnfア江の青い帯が陽の光に輝きながら悠々と流れていた。

我々は限らない喜びで休みもせずに密営のある方向に再び歩みを移した。

そしてついに我々を迎えに走り出てきたトムた

ちの懐に抱かれることができた。

インターナショナルの歌声を聞くたびに私は感懐無量の過ぎし日の生活のこの一時のことを考えるようになり、あれほど困難な環境の中で誰一人として落伍すまいと互いに助け合い、互いに先に立ちながら万難に打ち勝った、ウアンおじいさんを始めとする多くの同志たちの姿を胸に熱く描いてみるようになる。

キム・イルソン同志の忠実な革命戦士たちであった彼らのこの高貴な精神は、今日社会主義建設に立ち上がった千里馬騎手たちの英雄的気質にはつきりと具現されている。

流れる 川の水は くねって 下るように

革命の 前途は 曲折も 実に多いことよ

飢えて 死んだ者 銃剣に 傷ついた者

トナムよ 問わん その どれほど多かつたかを

私は時々「革命の道」というこの歌を静かに歌っ

てみながら、キム・イルソン同志の領導された抗日

武装闘争の艱苦な日々を回想してみる。

以下に書こうとする話は我々の遊撃活動において

最も困難だった一九三九年の冬にあったことである。

私が属していた部隊の四十余名の隊員はこの年の

末ごろに「討伐」が集中されるヨハ付近の山林を離

れて、ホリムの方へ行軍を開始した。

密営を出発する時から吹雪が起こり始めた。風は

茂みをなぎ倒し、降りしきる雪を駆りたてながら強

情に吹いてきた。激しい雪の粉のために我々は目も

思うように開けられず、腰まで埋める雪道を水の流

れを遡るように掻き分けて進んだ。

密営を出発してから数日目に我々は敵の大部隊と

ぶつかった。我々は敵を後ろに従えて深い山に入っ

ていった。

高いところに登るたびに風があまりにも強く吹き

つけるので、前へ一步踏み出しては二、三步後ろへ

押し戻された。

その上一度後ろに押し戻されるたびに家一軒ほど

の雪が崩れ落ちてきては我々を埋めてしまった。ト

ナムたちは雪の中でしばらくの間身動きできず、ほ

かのトナムたちが来て手を引っ張ってやってやっと

そこから脱出することができた。

敵は数量上の優勢を信じて銃を撃ちながら時々刻々

と近づいてきた。

全身が汗で水を浴びたようになり、山の尾根に登った時、敵は我々が通過してきた稜線でしきりにもがいていた。

我々は息をつく間もなく奴らに火雷を浴びせた。

その日の夜我々はある深い谷間で夜を過ごすようになった。しかし吹雪がなんとも邪魔をして焚き火を起こすことができなかつた。

我々は雪に穴を掘り、その中に入って寝た。汗と雪に濡れた服は牛の皮のようにごわごわになり、針のような冷気が容赦なく体にしみこんだ。

しかし寒さと疲れよりも耐えがたかつたのは腹のすいたことだつた。この時すでに我々には食糧がすっかりなくなつていた。

そうかといつて、敵が巢食っている「集団部落」に食糧を求めに下りていくことはできなかった。

敵の間断ない追撃を避けてポマデ・ヨンヂャの入り口を過ぎる頃には隊員たちは三日以上も生の雪を呑み下しながら歩いてた。

もう腰がひん曲がり、身に着けた全てのものがわずらわしく思えるほどだつた。

一歩が千斤の鉄の塊を動かすようだつたし、歩くというより同じ所で足踏みしているようだつた。

しかしこんな時でも誰一人苦しいという言葉一言なく、元気を出そう、あの林の中は風が静かだろう、炭焼き場が遠くないところにあるはずだよ、と互いに勇気を培いながら歩いた。

このようにして行軍しながらも、焚き火を焚いて休めるようになると、トンムたちは火のそばに座りこむやいなやいびきをかいた。

空腹をこらえきれずにあるトンムは手にはめていた犬皮の手袋まで火で焼いて食べた。

こんな時には私も全身が地面の中に吸い込まれるようだつたし、指一本動かすのも難儀で、そのままじつと横になつていたかつた。

しかし青白い唇とげっそり瘦せたトンムたちの顔を見る時、私はそのまま横になつてはいることはできなかった。私は立ち上がって木の皮をはいでブリキ

缶で煮た。そしてそれをいくらかずつトムムたちと分けて飲んだ。

するとトムムたちの目には再び精気がよみがえり、唇に血の気がめぐったので、私は非常にうれしかった。

艱苦な行軍は続いた。

ある日我々は途中で我々に先行していた三人の足跡を見つけた。

その足跡は吹雪の続く野原を横切って遠く林の中に跡を隠していた。

それは進むうちにあちこちに分かれたり、時には倒れた跡と混ざっていて、しまいには二人の足跡になってしまった。

我々はその足跡に沿って前へ歩いて行った。そのうち不意に倒木の下で立ち止まってしまった。

遊撃隊員三人が飢えて倒れていたのだった。

彼らの体はすでに石のように固くなっていった。そして周辺には息が絶える時分解してばらまいたらしい歩銃の付属品が散らばっていた。

その前で我々は込み上げる心情をやっと抑えながら長丞（チャンスン）。里数を示したり村の守護神として上部に人の顔を彫って道端や村の入り口に建てた木製の「標木」のように立っていた。

互いに固く抱き合った屈することのない姿、今にも立ち上がって行軍を続けるかのように、歩いていく方向に顔を向けている壮烈なその姿、まさに彼らこそいかなる試練と峻厳な環境の中でも悲觀失望せず、ただ革命の勝利のためにこの道から一步も退かずに闘った勇士ではないか。

彼らが抱いていた崇高な革命精神は我々の胸の中で熱い炎の塊となってめらめらと燃え上がった。

我々は重い沈黙の中で各自こぶしを握りしめ、歯を食いしばった。

そして敵愾心に燃え上がる胸を抱いて、彼らが最後まで行き着くことができなかつたこの革命の道を引き継いで、バンドをきつく締めながら再び前進した。

ついに我々の前にはヨハとホリムの境界線の空を

さえぎるシンヂョン山、ピグク山の山なみが見え始めた。

もうあの山なみさえ越せば我々の行軍は終わるのだった。

トンムたちは歓声を挙げ、以前にない新たな力を手足に込めながら意気揚々となった。

しかし敵の間断ない追跡を避けて困難な道を抜けていくので、トンムたちの力は尽きるままに尽きていった。そのうえ登り坂が始まり、進めば進むほど雪が深くなった。隊員たちの大半が雪の穴にはまっ

て身動きできないこともあった。指揮部ではやむなく行軍を中止させて一日宿営をするようになった。

ところがここで我々は思いがけず軍部から来た通信員に会った。久しぶりに軍部の消息を聞くようになった我々の喜びは限りなかった。

この日の夜指揮員たちは軍部の指示を討議し、隊員たちは別の焚き火を囲んで座っていた。

風は静まり、焚き火がバリバリと音を立てながら

燃えていた。

私は通信員が別に私に渡したメモ切れを火の前で広げた。

火の光に照らされてめらめらと燃えるような紙の上には「パク・キョンオクトンムに」という六文字が書かれてあった。

それはほかでもないチェ・ヨンゴン同志の筆跡だった。

私は彼の手紙を両手に持って読み始めた。

手紙には私に対する安否の問いと、歌詞を一首作って送るからトンムたちに普及するようにという内容の文が書かれてあった。

実際私はしばらく前に軍部の通信員から、チェ・ヨンゴン同志が活動における過労のあまり病床にいたという話を聞いていた。

ましてこのような思いがけない文を受け取ると、なぜか熱い涙が湧き上がるのを抑えることができなかった。

(我々のことをどれほど深く思って、こうして病

床から歌を作って送って下さったことか！

私は流れる涙をぬぐいながら、「革命の道」という題の歌詞をトンムたちに伝え、一小節一小節曲に合わせて歌を歌った。

すると力なく横になっていたトンムたちが起き上がって座り、遠くに座っていたトンムたちが私のそばに集まってきた。そして燃え上がる焚き火を眺めながら、この歌の中からわずかな何かを一つでも逃すまいと耳を傾けるのだった。

：

うつそうとした 山林と 東北の 平原は
我々の 血汗に 染まっているが…

高く低く曲調に乗って静かに響く私の歌声は明らかにトンムたちの胸の中にもどれほどの波紋を呼び起こしたことか！

焚き火の上に力なく落ちていた彼らの視線は、だんだん想像を絶するほどの想念をこめて空の果てに

輝く星の光にも向かい、流れゆく雲を背に負った木のてっぺんにも注がれるのだった。

我々にはいつの間にかかつて祖国の空に暗雲がたれこめた時に両手に銃剣を取って遊撃隊伍へ旅立ったその時のことが回想された。

そして暑さに打ち勝ち、寒さと闘いながら敵との肉薄戦へ、艱苦な行軍の道へためらいなく突き進んだ日々のが思い浮かんだ。

どんなに遠くて困難な革命の道を我々は歩んで来たことか！ どんなに多くの戦友が我々のそばを去っていったことか！

ただひとえに革命の最後の勝利を信じて我々はいつも勇敢に戦ったし、いつも祖国のことを思って一歩一歩前進した。

我々はいつでも自分の同志を愛し、貴重に思うことを忘れなかったし、ただ革命の道から一歩もためらうことなく全ての苦難、全ての悲しみに打ち勝った。また勝利におごったり、失敗に落胆したりせず敵との最後の決戦に一丸となって突進した。

「トンムたち！」 急に静粛な雰囲気揺さぶる声がかえった。それは会議を終えて戻ってきて我々の間に入って座った政治指導員の声だった。深くしわのよった額の下の燃えるような目でしばらくの間隊員たちを見回していた彼は、このようにゆっくりと話し始めた。

「：我々は実に遠い道をあらゆる難関に打ち勝ちながら歩いてきました。実に我々は英雄的な勇敢性でもって泰山峻嶺と奸悪な敵を屈服させながら闘ってきました。」

しかしまだまだ我々が進む道は遠くて艱苦です。我々の前にはこれまで以上の困難があるでしょうし、つらい犠牲もあるでしょう。

しかし何を恐れましょう。我々には革命のために身を捧げる不屈の闘志と必勝の信念があります。まさにチェ・ヨンゴン同志はそれをいつそう呼び起こしてくれるためにこの歌まで送ってくれたのです…」

政治指導員の声は我々の心の隅々に響いた。焚き火にはさらに木がくべられて熱気を噴き出し

ながら燃え上がる強い炎のように、トンムたちの顔には活気があふれ出た。そして静かに胸にだけ歌をなじませていたトンムたちの声はだんだん高く騒がしく周囲を揺さぶり始めた。

歌声はしまいに高らかな合唱に変わった。

叩け つぶせ

帝国主義の 奴らを

打ち破って 建設しよう

朝鮮人民の 新たな 政府を

その歌声は怒れる波濤のように我々の胸の中に闘争の激浪を呼び起こし、密林と暗い夜を響かせながら遠くまでこだましていった。

東の空が明るくなるころ我々は新たな信念、新たな勇気をもって宿営地を出発した。そして昨夜の歌声のように、いかに荒々しく険しい道も難なく越えてただひたすら前へ進んだ。

ついに我々はシンヂョン山にたどり着くことがで

きた。

「神仙」が住んでいるところだからシンジョン山と称するのか？

中空で雪崩の音がしたので見上げると、山頂は星がきらめくところにくつついていてみたいのに、見上げるだけでも大変だった。

我々はしつかりと気を引き締めながら山の斜面にとりかかった。

しかし一冬中解けずに積もりに積もった雪は、最初の一步を踏み出すやいなや砂山のように崩れてしまった。

小さな木の枝を見つけてつかもうと思っても、すでに深い雪の中に埋もれてしまつてなかつた。

我々は険しい斜面を何尋も押し戻されたり、時には雪の中にはまつたりしながら、上へよじ登った。

のどは焼けつき、息が詰まつた。我々は頭を雪中に突っ込んだまま雪を呑み下しながら腹ばいになつて這い上がった。

そんなたびに我々は「革命の道」を声高く歌い、

倒れた三人の同志のことを思いながら、必ず山頂を征服しなければならないという燃えるような決意にあふれた。

我々がこの山頂に登り立ったのはその日の夜の三更（午前〇時から二時の間）をはるかに過ぎてからだった。我々の喜びはまるで難攻不落の敵の要塞を占領した時のようだった。

暗がりの中に遠く広がるホリムの地を見下ろす我々には、抑えることのできない歓呼の声が万歳の声と混じつて沸き起こり、熱い涙が両頬を濡らした。

我々は通過してきた道を振り返りながら、しばらく感慨無量に立っていた。

そして各自銃をいつそうしつかりと握り締め、勝利者の氣勢高く最後の行軍の山道を下り始めた。

26 ロルリ河ほとりの勝利

チェ・ミンチョル

一九三八年秋にあったことである。

当時チェ・ヨンゴン同志の指揮下にヨハ、ホリム、ポチョン県などに根拠地を置いて北滿一帯で活動していた部隊は、秋夕〔陰曆八月十五日〕の数日前にそれぞれ引き受けた任務を遂行するために遠い地方に出発した。

それはこの年の秋に入つて断末魔的あがきをする敵に、至る所で甚大な打撃を加えることによつて奴らの〈威勢〉を地に落とし、その地方の人民の革命的氣勢をいっそう高めてやるためだった。

部隊が出発してからヨハ県ソソサン付近の根拠地には、指揮部を護衛する警衛中隊の一部の力量だけが残っていた。根拠地に残っていた我々は、敵区に進出した部隊が帰ってくる前に越冬するためのしつかりとした準備を急いで整えていた。

そんなある日だった。ムウォン京城付近に出かけていた同志たちから、〈関東軍〉総参謀長という奴が数日内に幕僚たちを引き連れて、ロルリ河流域の大きな集団部落であるソヂェハに来るといふ情報を指揮部に伝えてきた。

その時ヨハ県ソソサンに残っていた我々はわずか十一人にしかならなかつた。しかしこの消息を聞いた我々はそいつらをすつかり消滅してしまおうと思つた。

入手した情報によれば、その〈関東軍〉総参謀長という奴は凶悪極まりない奴だった。

そいつは日帝が朝鮮を強占した時期に義兵〈討伐〉で〈功勞〉を立て、その後には独立軍鎮圧に率先して乗り出した奴として日帝軍閥の間ではうわさが広まって威張っている奴だった。

そしてそいつは〈関東軍〉総参謀長に登用されるや、今度はバルチザン〈討伐〉で特出した〈功勳〉

を立てようという野望を抱いて北満までやってきた。

ムウォン県城に到着するやそいつは〈討伐隊〉と〈守備隊〉の頭目たちを呼び出して、今まで何をしていたのかとのしりを浴びせながら、「この間抜けどもめ、俺が今度現地偵察をした後で一度遊撃隊を〈掃蕩〉する腕前を見せてやる。」といばりくさったという。

そいつの正体を知った我々は敵愾心が込み上げるのを抑えることができなかつた。

チエ・ヨンゴン同志は即座にそいつを掃蕩する命令を下した。

我々は万端の戦闘準備を整え、夜明けと共に軍馬に乗って走り始めた。

我々が目的としたところはソソサンから十九里離れているスピンヂユイヂユというところだった。しかしいくら馬で走ったとしても、道もない険しいところを行く条件の下で、その日の夕方までに目的の

地点に到達しようと思えば相当急がなければならなかつた。

我々は山を越え川を越えながら前へ前へと走った。ヨハ県の樹林地帯を抜けてからは雪がわずかに見える北満の広い平原に入った。ここからもスピンヂユイヂユまではかなり遠かつた。

ひよつとするとそいつはすでにムウォン県城を出発したかも知れない。ぐずぐずしては逃してしまふかも知れない。

我々は馬のたてがみをつかみ、拍車〔靴のかかとに付け、これで馬の腹を刺激して御する金具〕を蹴りつづけた。軍馬はほこりを舞い上げながら矢のよう

に走った。平原は後ろへ後ろへと飛んでいった。しかし私には四足を高く跳ね上げて走る馬ものろく思えた。早くも暮れゆく北満の秋はひんやりした風が吹いたが、人も馬も汗でびっしょりだった。喉がからからに渴いた。それでも誰一人止まろうとせず、互いに遅れまいと稲妻のように走った。

こうしてついに決められた時間内にスピンヂユイ

ヂュ付近から一キロほどの地点に到着した。そこには一望千里の平原の中に樹林があった。

我々がここに来たのは、スピンドュイヂュはロルリ河中流にあつたので、奴がソヂェハに行つてこようと思えばここを通過しなければならなかつたので、その要所を守つていて首尾よく掃蕩してしまう計画だつた。

ところが敵が乗つて登つていつた船がどんなものかそれを正確に知ることができなかった。そのため我々は樹林の中に馬を隠しておいて、再び敵情の確証をつかむためにその日の夕方すぐにスピンドュイヂュに行つた。

当時そこにはロルリ河の漁場で魚をとる労働者たちがいたが、彼らはキム・イルソン同志が領率される我々抗日遊撃隊に対して熱い愛情と尊敬を抱いていた。我々はすでに彼らと緊密な連携を結んでいたところだつた。

彼らは我々をととても喜んで迎えた。

「おや、これはこれは。私たちはこの間あなたた

ちをととても待つていたんですよ。」

彼らは異口同音にこのように言いながら我々の手をつぶれんばかりに握つた。そして自分たちがとつた魚を勝手に奪つていき、罪のない人民をむやみに殺す日帝侵略軍の奴らの蛮行について激憤して語りながら、遊撃隊が一日も早く奴らを掃蕩してしまうことを願つた。

この日の夕方我々が止めたのにもかかわらず彼らは手ずからとうもろこしの粉でパンを作り、どうしても持つていけと勧めた。

そして一人の労働者が我々にこのように言つた。

「今日の昼間ウエノムの将校ばかりをいっぱい乗せた発動船が一艘登つてきました。」

「いつぐらいのことですか？」

「ちょうど昼飯時が過ぎてです。奴らが怒鳴りつけたので網を打つた樺杭をすっかり抜いたんですよ。なんてとんでもない……ところが私が発動船にぴたつと近づいてみると、その中にはすぐ背の高い奴が一人いたんですよ。私がこの前誰かにこつそり聞い

た話では、そいつは今度遊撃隊を〈討伐〉しようともくろんでいるそうです。」

「ふん、愚か者が寝言を言いおつて。我々を誰だと思つてるんだ。」

私がこのように言うと、労働者は「まったく、何の罪もない百姓ばかりを苦しめるあいつらをすつかりやつつけてしまつたらどんなにいいでしょう。」と言つて憤りをこらえきれなかつた。

「心配しないでください。私たちはそのために来たのですから。」

漁場から帰つてきた我々はすぐにこの事実をチェ・ヨンゴン同志に報告した。重要かつ緊急なことに直面するほどいつそう沈着かつ泰然と行動するチェ・ヨンゴン同志はしばし深い考えにふけていた。

やがて我々に皆集まるようにと言つた。

「トナムたち、私の意見としては我々は今晚のうちに川の横に陣地を張るのが良いと思います。そこで奴らが下つて来るのを待ちましょう。」

我々は任務を受けるやすぐに出発した。

ウスリー江の支流であるロルリ河は果てしない平原の中を流れる河で、流域には山など一つもなく、両側は腰まですぶずぶ沈む湿原が果てしなく広がっていた。この川の流れに沿つてムウォン県城からソヂェハを経てポチヨンに行く広い道が敷設されていた。この平原では敵を攻撃するのも容易なことではなかつた上に、奴らを攻撃した後には少なくとも数十里を一気に進まなければならなかつた。しかし我々はどんなことがあつてもそいつを必ず葬つてしまおうと心に誓つた。

我々が陣取つたところは漁場から約一キロメートルほど離れた川の横の急斜面だつたが、この斜面は戦術上非常に有利なところだつた。

この付近の地形を手取るようによく知り抜いているチェ・ヨンゴン同志は、その斜面がどのようになつていて、どこに機関銃を配置し、どこに歩銃手を配置したらよいか、そこから川面まではおよそ何メートルかということまでも詳しく知つていたのである。

チェ・ヨンゴン同志は我々を直接その斜面に連れてきて、戦壕を掘る位置をいちいち教えて指導した。

斜面の中間ぐらいには機関銃の陣地を掘った。そこにはカン・サンホ同志とリュ・ウンサム同志、そして私まで含めて皆で三名がおり、その左右にそれぞれいくらか離れてバク・ウソプ同志ともう一名の同志が配置された。そして残りの同志たちはムウォン京城方向とソジェハの方に通じる大道路の横に埋伏して、それぞれそちらの方向から来る敵を監視していた。

指揮処にはチェ・ヨンゴン同志と副官のハン・チャンドク同志がいた。

我々は陣地を掘った後、夜が明けるのばかりを待った。興奮と緊張で夜がどんなに長たらしかったか知れなかった。全身が湿っぽくなった。そのうちに明け方頃になるとひんやりした風が体に染み込んだ。しかし我々はぴくりともせずにはわすかな兆候も逃すまいと針の先のように鋭い神経で周囲を監視した。

陽が昇った。

我々は奴らが現れるのを今か今かと待った。しかし真昼になっても何の消息もなかった。秋の風に草枝ばかりが騒ぎ、時折空高く雁が飛んでいくばかりだった。

「あいつらいつたい何をしているんだ…さつさと現れる。」

「えいつ、こんちくしょう、じれつたいなあ。」
と言いながら我々は銃床を握り締めながらもどかしく待った。

ところが午後三時頃に遠くから発動船の音が聞こえてきた。我々の視線は一斉にそちらに注がれた。発動船のトントンという音はだんだん高く聞こえてきた。遠くヤナギの木の間に青くペンキを塗った発動船一艘が陽光にきらめきながら川を下ってくるのだった。

(…よおし！ あいつらだな。)

待ちに待った敵が目の前に現れるや、我々はいっそう緊張し、軍帽のつばを後ろに回し、手をこすりながら銃をつかんだ。奴らは自分の天下であるかの

ように、カモをとろうと銃を撃つたりした。

発動船はだんだん近づいてきた。日帝の将校の奴らがひしめく甲板の上には重機四丁と軽機六丁も据えられており、無線機のアンテナまで並んでいるのが見えた。奴らは甲板の上に傲慢にふんぞりかえって立ち、双眼鏡で眺めながら何かしゃべっていた。

後に発動船の船長から聞いた話では、その時へ関東軍へ総参謀長という奴はソヂエハを出発する時、そこに駐屯していた偽満軍部隊がムウォンに到着するまで援護してやるというのを、「こいつらめ、わしを誰だと思ってるんだ、あん?! ここに来る時共産軍など影も見せなかつたぞ。お前たちのような類のものはない。さつさと引つ込め。間抜けどもめ。」と言って目を怒らせたという。そいつの言うとおりにする時は無事だったが、下る時は決して無事ではすまなかつた。しかしそんなことを知るよしもないそいつは、これから新たなへ功勳を立てた後の自分にめぐってくるへ栄誉を夢見ながら、大きくなり鉢ぐらいの腹をいっぱい突き出して、幕僚

たちに何か訓示を垂れていた。

川が曲がりくねっているために、全速力で走ってくる発動船も限りなくのろく思えた。我々は草の葉で偽装して眉毛一つ動かさずに敵をにらみつけていた。ひっそりとした平原は発動船のトントンという音だけが聞こえるばかりで、何の変動もないようだった。

敵がいくらかささらに近づいてくると、ある同志はそれ以上我慢できずに撃とうと言った。しかし我々はこの時ほど沈着でなければならなかつたので、互いに言い聞かせて奴らがびつたり近くに来るまで辛抱強く待った。

発動船はへ己の字型に流れる川に沿って曲がり角を回るたびに遠くなったり近くなったりしながら近づいてきた。

船はどうとう我々の正面にある曲がり角を回った。もう甲板の上でしゃべっているひげを生やした顔と白い歯まで見えた。

(…あいつらが我々の父母兄弟の血汗を吸い取る

不倶戴天の敵だ。…)

我々は一斉に引き金をかけた。

暴風の前の緊張した瞬間だった。

六十メートル…五十メートル…三十メートル…発動船は矢のように走ってきた。

まさにこの時射撃の合図が起こった。我々は機関銃の銃口の前を遮っていた草をさつとかき分けて不意に猛烈な射撃を浴びせた。瞬間平原はけたたましい銃声で揺れ動いた。

一つの弾倉を雷のように吐き出すや、弾をいっぱい込めた弾倉を二個、三個、四個…続けて取り替えながら引き金を引き続けた。青天の霹靂に当たった格好の敵は、何の手をうつ間もなく甲板の上に群れになって倒れた。

慌てた敵は発動船を向かい側のほとりに着けた。

川が広くないので射撃には何ら支障がなかった。

我々は射撃を続けた。生き残った奴らが狭い船の上でうろろしては倒れた。奴らは別段対抗射撃をすることもできなかつた。

我々の中にもぐりこんだ奴らまで残らず掃蕩するために、船の前が蜂の巣のようになるまで弾倉をつないで、我々の父母兄弟の骨髄に染みる復讐のために引き続き撃ちまくった。

我々が射撃を中止した時には甲板の上に立っている奴は一人もいなかった。

周囲はねずみが死んだように静かだった。もう発動船が上がって捜索をする番だった。

ところがしばらく後に発動船の中から何かひそひそ話す人の声が聞こえた。

まだ何人かが生き残っていたのである。

我々は沈着に奴らの動静を探った。風に乗ってはつきりと聞こえる話し声は、何を言っているのかよく分からなかつた。

そのうちちよつとしてから日本軍の将校の服装とは違つた黒い制服を着たある男がよろめきながら甲板の上に這い上がってくると、我々の方に向かって震える声で、「私はこの船の船長です。皆死んだので…すぐ…渡ってきてください。」と言つた。そし

て傾いた船の前に身をかがめて手で水をすくって飛ばした。何かの合図のようだった。船の中に隠れている敵は彼に甲板に出てこのように言えと脅迫したのである。袋小路に陥った敵の将校の奴らは我々をだまして、川辺りに下りてきた時に射撃しようという凶計だったのである。

我々は船長に命令した。

「よし、あなたは早く船の前のいちばん後ろに下がらなさい。そうしないと危険だぞ。」

船長は急いで身を避けた。

我々は発動船の真ん中に向かって再び猛烈な射撃を浴びせた。奴らは何の音も立てられなかった。

この時漁場労働者の一人が漁船に乗って急いで櫓をこいできた。

私とパク・ウソプ同志とリュ・ウンサム同志は船に乗って川を渡り、発動船が上がった。

甲板は憎たらしい敵の死体で足の踏み場もないほどだった。その中には百万の大軍を率いて江山をほしうままにすると言っていた〈関東東軍〉総参謀長と

いう奴のむかつくような体が倒れていた。

我々は発動船の隅々を搜索した。船の中には水がどくどくと流れ込んでいた。

船長室に入ると、手足に三、四箇所貫通傷を負った将校一人がうんうんうめいていた。そいつは我々を見るやおびえて対抗する気も起こせずに今にも息が絶えそうな声で、「赦してください。…赦してください。」と頭が地面に着くほどお辞儀をした。

「この汚らしい奴め、お前は何のためにこまで来たんだ？」

我々が怒鳴りつけると、日帝の将校はどうか命だけは助けてくれと哀願した。我々は込み上げる敵愾心にそれ以上我慢できずにそいつを一発で撃ち倒した。

この日その発動船には〈関東東軍〉総参謀長という奴以下、その随員である幕僚たちと警備兵など四十三名の日帝の奴らが乗っていたが、生き残った奴は一人もいなかった。

襲撃が終わった後、チェ・ヨンゴン同志は付近か

ら集まつてきた群衆の前で感銘深い演説を行った。

「皆さん！ 私たちはあなた方をさげすみ、抑圧し、搾取しながらあなた方の父母兄弟を虐殺している日帝侵略者に反対して戦うあなた方の軍隊、人民の軍隊です。祖国の光復と人民の自由と幸福のために戦う抗日遊撃隊は、広い満州の地の至るところでこうして命をかけて日帝の奴らを打ちのめしています。

皆さん！ 日帝の奴らは我が人民の不倶戴天の敵です。私たちは力を合わせて日帝の奴らを打ち倒さなければなりません。

革命は必ず勝利し、我々が幸福に生きる日は必ず来るでしょう。その日のために最後まで闘わなければなりません。…」

チェ・ヨンゴン同志は火のような情熱を込めて演説した。

喜びと感激に包まれた群衆は涙を流しながらチェ・ヨンゴン同志を見つめた。

その中には発動船の船長もいた。彼は何度も拳で

目のふちをこすった。

女性たちは肩をふるわせながらすすり泣いた。

チェ・ヨンゴン同志は彼らに、奴らの弾圧に屈してはならないという激励の言葉を述べながら、遊撃隊と人民はいつも一つの心、一つの意志で固く団結して闘わなければならないということを述べた。

チェ・ヨンゴン同志の話が終わるや、群衆の中からは、

「日帝を打倒しよう！」

「人民革命軍万歳！」という叫び声が湧き起こった。

彼らと一緒に万歳を叫んだ私は、抑えきれない興奮に包まれ、目頭が熱くなった。

その日の夜我々は漁場労働者たちを皆家に帰してから、再び馬に乗って稲妻のように走り始めた。

その次の日も三日目も続けて走った。こうして我々はそこから一息に六十里にもなるホリム県のチュステインヂュの樹林の中に到達した。

ロルリ河の〈悲報〉に接した〈関東軍〉司令部で

は一大騒動が起こった。奴らはすぐに〈討伐隊〉の大部隊を放ってロルリ河流域を櫛ですくようになくなく探したが、遊撃隊は一人も見えなかった。ただ川のほとりには〈関東軍〉総参謀長という奴が乗っていた発動船が水の中に頭を突っ込んでおり、その上には奴らの末路を呪うようにカラスが飛び回るばかりだった。

敵はやむを得ずとぼとぼと引き返してしまった。

このうわさはすぐに北滿一帯にはあつと広まった。こうして敵のあがきが甚だしかつた最も艱苦な時期にロルリ河での勝利は、日帝の弾圧の下で呻吟している人民に限りない力と勇気を培ってやり、鋼鉄の霊将であるキム・イルソン同志が領率する朝鮮人民革命軍の威力をもう一度広く示威した。

そればかりでなくこの戦闘は、当時ソ連を侵攻しようという企図の下にロルリ河上流に密かに軍用飛行場を作っていた日帝侵略者の凶計を完全に破綻させた。

「革命のつぼみたち」

27 ポンナミとともに

キム・チョルホ

自由の 江山で 我ら 育ち
平和の 楽園で 花咲こうと する
新たな国 幼き トナム 歌歌おう
この世に うらやむもの 何が あろう

キム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争の時期、児童団員たちはこの歌を好んで歌いながら自由の江山、平和の楽園に花咲く祖国の将来のために勇敢に闘った。

この歌を歌いながら闘った児童団員たちを回想するたびに、私にはポンナム少年の姿がはつきりと浮かんでくる。

私がポンナミ（ポンナムの愛称）を初めて知った

のは、抗日遊撃隊に入隊する前の一九三三年の夏だった。

当時サムドマン遊撃根拠地で党区副委として活動していた私は、上級の指示によって敵統治区域に対する工作を担当してトムゴウ地方に派遣されるようになった。

任務はその地方に長くどどまりながら大衆を革命組織に結集させる一方、敵情探知、食糧工作などの活動をする事だった。

まさにこのような地下工作の任務を十二歳になった児童団員のポンナミといっしょに引き受けるようになった。

ポンナミは元々ヨンギル県ウアンウグのチャンラ

クトンで育った時から（当時八歳）児童団員として活動した。

背は歳よりかなり低い方だったが、非常に賢くて私立学校に通っていた時から学生たちの中で勉強がいちばんよくできたばかりでなく、児童団で与えた任務も間違いなく遂行し、ポンナミといえば知らない学生はいなかった。

ところがポンナミはある日の朝父母と家を失って頼るところのない孤児となった。

それは日本帝国主義の奴らの魔手がチャンラクトンにも伸びて、何の罪もないポンナミのお父さんとお母さんを無惨に虐殺したからである。

それからポンナミは根拠地の人民の懐の中で育つようになつた。ポンナミは児童団の分団長として活動しながら、お父さん、お母さんの復讐のためにいっそ熱誠を尽くした。

私はポンナミと一緒に地下工作をするようになった時、何ものをも恐れずにさつと進み出るポンナミが限りなく頼もしかった。しかし一方では子供のこ

とだからひよつとして失敗はしまいか？ という心配もなくはなかつたので、彼に地下工作の経験も教えてやり、活動する時に注意しなければならぬさまざまな点について詳しく教えてやった。

数日後私はポンナミと一緒に、朝鮮では生きられずに東北に渡ってきた母と息子を装って、トムゴウに向かつて出発した。

目的地に無事に到着した私たちはあるお婆さんの屋敷に居所を定めて秘密活動を始めた。

ポンナミの任務はまず村で児童団を組織し、堅実な少年たちをその周囲に広範に結束させることだった。

ポンナミは村の子供たちとよく交わって遊んだり彼らの仕事を手伝ってやったり話もよくしたので、いつのまにか彼らと親しくなつた。しかし児童団を組織するにはいっそ慎重性を期す必要があつたので、私はある日ポンナミと具体的な活動方法を相談した。

私はポンナミに、不慣れなところである上に警察

や自衛団、走狗たちの警戒が厳しく、子供たちの中にも走狗の子供たちが多いから、児童団組織ではいっそう警戒心を高めて慎重に行動しなければならぬと言いつけさせてやった。

一生懸命考えにふけていたポンナミは、「お母さん、こうしたらどうだろう？ 僕が床にふして病気になるたふりをするから、お母さんは子供たちに会って友達になってくれと頼んでください。そうしたらその子供たちが訪ねてくるじゃない。その時その子供たちと交われれば警察の奴らもたまえるでしょう。」

私はポンナミの知恵が並外れていてそれまでただの一度も失敗したことがなかったので、彼の意見の通りにすることにした。私は活動を始めた時心の中に密かに抱いていた心配は余計な心配だったと思いつながら、ポンナミがいっそう頼もしくなった。

次の日からポンナミは床にふしてへ病み始めた。私は村の子供たちに会おうと、「あんたたち！ 今うちの子供ナミが病気になるてあんたたちに会いたがっているの。友達になってやってね。」と言った。

こうして村のたくさんの子供たちが見舞いに来るようになり、ポンナミは計画どおりに彼らとの活動を深化させていった。

ポンナミは話も面白く話したし、手先もかなり器用だった。ポンナミは家に遊びにきた子供たちに朝鮮のお父さん、お母さんたちが味わってきた辛い生活についての話も聞かせてやり、ピリ「縦笛」のようなものもよく作ってやりながら彼らとさらに親しく交わった。

この過程でポンナミは彼らの事情を一つ一つ把握し、児童団に受け入れるべき子供たちに目星をつけた。

その後ポンナミは昼間は彼らと一緒に牛に食べさせたり、まぐさを刈るのを手伝ってやりながら、子供も一つに結束して日帝や地主、資本家の奴らに反対して闘わなければならないと宣伝した。

村の子供たちはポンナミが自分たちの事情をよく知ってくれ、仕事もよく手伝ってくれ、正しいことをよく言うので、彼によく従うようになった。この

ようにしてボンナミはトムゴウに児童団を組織し、そこに二十余名の少年たちを結集させた。

児童団を組織するとボンナミは彼らと一緒に敵情偵察を担当した。彼は仲間たちとともにわざと偽満軍の兵營の横に行つて球蹴りをして遊んでいるうちに球を兵營の垣根の中へすばやく蹴り入れた。

そしてえんえん泣きながら歩哨に球をとつてくるから入らせてくれとせがんだ。このように歩哨をうまくだまして兵營の中に入つては、球を探すふりをしてながら兵營の配置、武器と人員まで残らず偵察して帰つてきたりした。それでも奴らにほつぺたを殴られて頬がぶくつと腫れあがつて帰つてきたことも一度や二度ではなかつた。そんな時には家に帰つてきて「今に見ている！ 今日はおまえたちに殴られたけれども、今におまえたちに復讐の火雷を浴びせてやる。お父さん、お母さんの仇を百倍千倍に取つてやる。」とごうしをぎゅつと握り締め、低くしかし力強く叫んだものだった。

そんな時には私は胸をえぐられるように辛かった。

私は何度も人知れず泣いた。

するとボンナミはいつのまにか気がついて、「お母さん、大丈夫だよ。何でもないよ。」と言つてかえつて私を慰めようとするのだった。

トムゴウで私は主に婦女会工作と遊撃隊に送る物品の購入で非常に忙しい日々を送っていたが、ボンナミは私の仕事も努めて手伝つてくれた。

夜婦女会員たちが会議をする時には歩哨に立ち、遊撃隊に送る物件を買い入れる時には私と一緒に荷を担いでミヨンウオルグの市場まで往復した。これは幼いボンナミには非常に骨の折れることだった。しかしボンナミは一度でも辛いという言葉を口にしたことがなかつた。

こうして活動していたある日ボンナミは「討伐隊」の奴らが遊撃根拠地に攻め込むという重要な情報を探知した。

（早く遊撃隊に知らせなければならぬ。根拠地の人民の生命が私たち二人にかかっている。）

このように考えた私たちは、一時も遅れることは

できなかつた。私は峠の向こうの親戚の家に行つてくると近所の人に言つておいてポンナミといつしよに家を出た。しばらく歩いてからすばやく山に登ると、八里も離れた遊撃根拠地に向かつて走り始めた。ところがこの日に限つて降り始めた雨は、山に登るうちにだんだん土砂降りになり始めた。しかし私たちは雨にうたれながらも続けて走つた。

ある狭い谷間に抜け出た私たちが、道端にある小さな丸木小屋の横にちようど着いた時だつた。

十余名の警察官が向かつてきていた。避けようにも避けるすべがなかつた。

私はポンナミの手を引いてすぐに丸木小屋に飛び込んだ。小屋には誰もいなかった。私はとつさにポンナミをオンドルの焚き口のそばに寝かせて古い布団をすつぱりかぶせた。台所を見ると、炭で湯がしゅんしゅんと沸き、台所の下には掘つてきたばかりのよくな湿つた土がいつぱいついたじゃが芋が一鉢置いてあつた。

外からは奴らが近づいてくる靴音が聞こえてきた。

私はとつさに思いついたことがあつて、台所に駆け下りて土のついたじゃが芋でチマや袖を何度もこすつて泥だらけにした。そしてじゃがみこんで薪を焚き口にくべた。

この時一人の警官が台所の扉をぱつと開け放つて、雨に濡れて泥だらけになつた私の姿を殺氣立つた目つきでにらみながら、「どこに行つてきたんだ?」と怒鳴つた。

私は主人のふりをして、「山の畑にじゃが芋を掘りに行つて雨に会いました。」と平然と答えた。次の瞬間そいつは部屋の扉を開け放つてポンナミを指差しながら「あれは誰だ!」と問いつめてきた。

私は極力沈着になろうと努めながら、「私の息子ですが、じゃが芋を掘りにいつしよに行つて崖で転んで怪我をしました。」と言いつくろつた。

するとそいつは信用できないというように土のついた靴で部屋の中に入りこんだ。

瞬間私の目の前は真つ暗になつた。早く手を打たなければならなかつたが、体が動かなかつた。

(今に警官がボンナミを起こして体を調べて懐にある糸、染料、インクなどが見つかったらもうおしまいだ。)

私は目を閉じて唇をかんだ。

ところがそいつはボンナミの布団を足ではぎそうにしなから意外にもすつと外へ出ていってしまったのである。

警官が広い道に出て行くと、私はふうつと大きく息をつきながら部屋の中に入って、それまでびくともせずによこになっていたボンナミがかぶっていた布団をのぞきこんだ。

瞬間私はびつくりして身震いした。ボンナミの顔はすっかり血まみれだった。私はさつき警官がとやかく言わずに立ち去ったわけがその時初めて分かった。

ボンナミは私が「崖で転んで怪我をしました。」と警官にうそをついたのを聞くと、齒で自分の指を噛んで血を流して顔にすつかり塗りつけたのである。

私は急いでボンナミの手を引いて林に入り、チマ

の裾を裂いて彼の手を縛ってやった。

そして正体がばれば貴重な情報を遊撃隊に伝えることができないというただ一つの思いで自分の指を噛みきったボンナミを抱きしめて泣いた。

こうして危険な瞬間を免れた私たちはその日のうちに根拠地に到着して敵情を報告することによって、遊撃隊員たちが敵の〈討伐〉に対処する万端の準備を整えることができるようにした。

その時ボンナミの話を聞いた根拠地の人民と遊撃隊員たちは誰も涙を禁じ得なかった。

その後ボンナムトムムはキム・イルソン同志が領導される栄光に充ちた抗日遊撃隊に入隊した。

遊撃隊員になったボンナムトムムは部隊指揮部の連絡兵として、その後は護衛兵として実に勇敢に戦った。

そんなボンナムトムムは一九四一年春チャビゴウ地方付近の戦場で英雄的に戦って犠牲になった。

ボンナムトムムが犠牲になった日の夜私は焚き火のそばに座ったまま一晩中眠ることができなかった。

本当の弟のように愛してきたし、幼い時から死線にくぐり抜けながらも闘ってきたボンナムトムムに再び会えなくなつたのが実に無念で私は声をあげて泣いた。

「ボンナミ！」今でもその名を呼んでみながらいつしよに闘つたその時を回想する私の胸は張り裂けそうになる。

ただ革命のために、祖国の輝かしい未来のためにためらいなく命を捧げて勇敢に闘つた赤いつぼみたち！

今日、ボンナムトムムのような児童団員たちが抱いていた高貴な革命精神は、党とキム・イルソン同志のこの上ない配慮の下に祖国の真の息子娘としてりりしく育つ我が国の全ての少年団員たちの胸の中に大切にしまわれ、永遠に輝いている。

「人民の海の中で」

28 死に打ち勝ったチヨチャンヂユ（車廠子）

ペク・ハンリム

革命の道は艱苦である。その路程は平坦な大路での安逸な歩みではない。

敵との決死的な闘争、飢えと寒さ、経済的難局の克服、敵のあらゆる悪辣で陰險な暗害策動の粉碎なしには革命の前進はありえない。

連続して押し寄せてくる力に余る難関と峻厳な試練の波濤を真つ向から打ち碎き乗り越えてこそ革命の勝利を得ることができる。

我々は実にどれほど多くの波乱曲折を経て輝かしい今日に至ったか！

誰しも自分の過ぎ去った生活における艱苦だった時期を忘れることはできない。

私は今日の幸福を考えるたびに、キム・イルソン

同志が領導された抗日武装闘争時期のチヨチャンヂユでの苦難に満ちた闘争と生活を振り返ってみようになる。

敵によつてもたらされた惨禍の中でも餓えの中でも革命の勝利を鉄石のように固く信じながら不死鳥のように闘ったチヨチャンヂユ人民にとつては、生活そのものが敵との決死戦だった。

アンド（安図）県チヨチャンヂユ遊撃根拠地はペクトウ（白頭）の太古然とした密林に囲まれた、人跡まれな地方で、敵が〈討伐〉するには不利で、我が軍が防御するには比較的可利な地帯だった。

チヨチャンヂユ根拠地は東満の多くの地方根拠地よりずっと遅い一九三五年初めに至つて創設された。

根拠地に対する日帝軍警の〈討伐〉が甚だしくなり、根拠地封鎖政策が強化される条件の下で、飢えと血みどろの闘争の動乱の中で苦しめられていた人民が、敵〈討伐隊〉の発狂的な殺人蛮行を避けてここに集結して新たな根拠地が創設されたのだった。

こうしてここにはフアリヨン、ヨンギルの遊撃根拠地から来たたくさん革命大衆が住んでいた。

彼らはすでにここに移ってくる前にフアリヨン、ヨンギル県の各根拠地で艱苦な困難を経てきた人たちだった。

彼らは再び暮らしを立てた。谷間には人民革命政府機関や学校、病院、兵舎、人民が暮らす丸木小屋ができた。

当時私はここで組織された反日自衛隊に属していた。

武装して根拠地を保衛する任務を負った反日自衛隊員たちは、毎日のように警戒勤務に立ち、軍事訓練と政治学習を進めた。

搾取と抑圧のない我等の世！ 本当に力が湧き、

生きている気がした。

皆が生甲斐と信念にあふれていた。

人民革命政府の施策は人民に対する愛情と配慮にあふれ、我々の幸福を用意してくれた。

女性、壮年、老人の誰を問わず皆自身が自身の運命の主人となつて働いた。

人民革命政府は彼らと生死苦楽をともにしながら、彼らに与えることのできる全てのもを与えながら温かく懐に抱き支えてやった。

少年たちが丸木小屋の学校で黒い瞳を輝かせながらノートにさつさつと我々の文字を書く光景は、全てのチヨチャンヂュの人たちの最も大きな幸福の象徴だった。

しかしその幸福を守るといふことはたやすいことではなかった。

チヨチャンヂュの人たちは敵と熾烈に闘わなければならなかった。敵は根拠地を封鎖する一方、なんとしてでも根拠地を奪おうと発狂的に襲いかかってきた。

このような条件の下で食糧、被服などの必需品を解決するということは並大抵の困難ではなかった。一合の食糧を手に入れてくるのにも血を流さなければならなかった。

敵〈討伐隊〉は日が経つほどいつそう凶暴に襲いかかってきた。そのために根拠地の全ての人たちはいつも戦闘的動員態勢を緩めることはできず、有事の際には命をかけて根拠地を守らなければならなかった。

難関は一つや二つではなかった。密林の中に位置するチヨチャンデユはあまりにも不毛な地域だった。何しろ一着きりの麻服をまとい、素手のほかには何も無い人民にとって冬は最も困難な時節だった。穀粒も、草も、塩もなかった。飢えは容赦なく人々を倒し始めた。

人民は大小の鎌や刃物を持って寒さに震えながら山に登り、力の及ぶ限り松の皮をはいで食べ始めた。日が経つほど皮をはがれた真つ白い松が増えていき、しまいには樹林全体が凄惨な姿になった。

そうかと思えば男女老少が凍った手で深く積もった雪の下をかき分けて古くなった草の根や乾いた山葡萄の芽やじゃがいものつるなどを掘り出して塩もなく煮て食べた。

このようなものを食べる時にはのどがぐつと詰まるようで、のどから血が出てきた。しかしそれさえ十分になくて食べられない状態だった。

若い人たちはこのような惨状を座して見ていることができず、食糧を求めに出かけた。

我々武装自衛隊員も死線をくぐり抜けて敵の食糧をいくらかずつる獲ってきたりした。

しかしそれではたたくさんの人たちが口に糊するのに足りなかった。こうして食糧を分配する時にはまるで薬剤師が薬を取り出すように小さなさじで手のひらに分けてやった。実に穀粒一粒が金の塊のように貴かった。

塩がなくて体がむくみ始め、髪の毛の生え際が裂け、足がふらつき始めた。

実に形容しがたい身の毛のよだつような生活が日と月をつないでいった。

しかし誰も困境に勝てずに生命を自ら無にすることはしなかった。困境になるほど日本帝国主義者に対する憎悪と復讐心に燃え、齒を食いしばって立ち上がった。

フアリヨン県から来たある老人は腹をすかせて横になった妻子たちに煮た松の皮を出しながら言った。

「起きなさい！ 日本の奴らを滅殺する前にわれらが倒れてどうする？ 土を食べてでも生きなければならぬ。さつさと起きなさい！」

この言葉に横になっていた妻子たちが一人一人起き上がった。

全ての人々が互いに鼓舞し援護した。体の丈夫な人たちは何とかして食べるものを用意しては家々を訪ねて回りながら分けてやった。

「兄さん、元気を出してください！」

「遊撃隊がまた敵をやっつけたそうですよ。起きてください！」

「生きてウエノムを一人でもやつつげなくちゃならないじゃないですか！」

人々は互いに会えばこのように挨拶をした。

誰も百倍千倍に敵に報復しなくては、たとえ千丈の崖から転げ落ちることがあろうとも死んではならないということをあまりにもよく知っていた。これは闘争と未来に対する自覚であり、革命に対する熱望だった。

冬の一、二ヶ月は十年に相当するほどのうんざりするような長さで流れていった。いつの間にか気候が和らぎ、日差しが強くなってきた。

チョチャンヂュの空に飛んでくる季節鳥たちと草木をかすめて吹いてくる暖かい風はうれしい春の消息を知らせてくれた。

しかし人々はあれほど待っていた春を立てて迎える力がなかった。横たわって涙に潤む目で春を迎えた。

政府では穀物を植えなさいとじゃがいも、とうもろこし、そば、粟、きびなどのいくらかの種穀を分

けてやった。

しかし以前には「農民は死んでも種穀は刈って死ぬ。」ということわざを真実のものとしてそらんじてきた人民が、今ではもう我慢できずに種穀をこっそり食べてしまう現象が現れた。すでに苦しい体が意思の言うことを聞かなくなったのである。

そこで革命組織と政府で働く人たちは家々を回りながら、種穀を食べないように説得しなければならなかった。

人々は互いに励ましあい頼りあいながらのろい足取りで種をまきに出かけた。立えない人たちは這って畑に出た。

悪戦苦闘の中で一寸、二寸と地面は掘り起こされ、一粒、二粒と種がまかれた。

ところが一夜明けてみると種をまいた畑がすっかり掘り返されるといふ思いがけないことが発生した。

しかし人民は再び種をまいた。すると再び掘り返されるといふことが起こった。

後に判明した事実だが、その当時隊列内に潜入し

た反革命分子たちは農事を台無しにすることによって人民を飢え死にさせようと策動したのだった。

奴らは遊撃隊が遠征に出発する時に、人民の生命を保護するようにと与えていった少なからぬアヘンを売って食糧を買ってこようとせず、故意的に人民を飢え死にさせようとした。

こうして人民は避ける道のない飢えと闘いながら、同時に隠れた敵と血みどろの激闘をしなければならなかった。

この艱苦な戦いで結局勝利したのは人民だった。種をまいた穀物はとうとう芽が出始めた。

一見その芽は種から出たようであつても、人民が流した血と汗から、そして涙から出たものに違いなかった。

日が経つほど飢餓はひどい伝染病のように無慈悲にたくさんの生命を奪っていった。

しかし人々は生命のための決死戦から退かなかつた。

チヨチャンヂユの山と野は草をむしる人々で満ち

溢れた。

春のひざしがだんだん強まるにつれてワラビ、オケラ、オタカラコウ、ソングナムル、トラジ〔キキョウの根〕、アマドコロ、ユリ、ムスエ、ノルナムルなどのさまざまな山菜で食事を続けた。

さらにはかえるの卵までためらいなく食べたし、だめになったヘトロギ（冬用の皮の履物）まで煮て食べなければならぬ有様だった。

このような日々にも自衛隊は哨所を離れなかった。我々はずっと塩一粒なく草ばかり食べながら銃を握って歩哨に立った。

足がふらつき、全身が水に濡れた綿の塊のように力がなかった。目の前には間断なく火花が渦巻き、時折空と地面が逆さに見えたりした。

このような時には銃を握ったまま力なくその場にひっくり返ったりした。しかし再び起き上がった。

生きても死んでも革命を、人民を守らなければならなかった。生に対する放棄は変節であり、利己主義は反革命のように有害だった。

我々はただ意志の力で立つことができたし、人民に対する服務と愛情の精神で目を開け、歩みを移すことができたし、また銃を撃つことができた。

このような時我々にとって比較的ましな食糧はセスレとシラカバだった。

水が上がるセスレやシラカバをメートルぐらい皮をはいでからその下に器を当ててしばらく置くと、丼一杯ほどの水がたまる。その水を飲むと気持ちが悪さっぱりして多少とも力が湧いた。

このような困難な日々にも敵の〈討伐隊〉が襲撃してくれば、根拠地を保衛していた遊撃隊員たちと自衛隊員たちは勇気百倍で敵との決死戦に立ち上がった。人民もある限りの力を尽くして我々を助けた。チョチャンヂュの遊撃隊と人民はただ革命的熱情と鋼鉄のように固い団結の力で、優勢な武装を持った敵を打ちのめすことができた。

しかし敵の大部隊が不意に襲撃してきた時にはやむを得ず根拠地の一部を放棄していったん皆山に登ってから反撃せざるを得なかった。そのような時には

敵は根拠地の施設物を破壊し、火を放って逃げた。すると人民は辛抱強く燃えた跡に再び丸木小屋を建てた。

このようなことは実に数え切れないほど反復された。

「敵どもめ、お前たちが勝つか、我々が勝つか勝負してみよう！」

「奴らのために家を建てる腕が上がるぞ！」
人々はこのように言いながら再び丸木小屋を建てた。

敵は根拠地の家を燃やすことはできても、その中にこめられた革命的人民の固い意志までなくすことはできなかつた。ここにまさにチヨチャンヂユ人民の不屈の力があつた。これは未来を愛し、幸福とはどんなものかを知る人々の力がどんなに強いものかをはつきりと見せてくれた。

難関が厳しいほど大衆に対する政治活動は非常に重要だつた。

幹部たちは麦の穂が出る前には、麦の茎を持って

家々を回りながら、やがて穂が出てくるから難関に勝とうと鼓舞した。

麦の穂が出てきた時には、その新穂を持って回りながら、やがて新穀ができるから失望してはいけな
いと互いに力を培ってやった。

人民はすきつ腹を抱えながら実に超人的な忍耐力で難関と闘つていった。

畑には草が茂つた。人民は再び畑に這い出て、手の先から血が出るほど雑草を取つた。たとえホミ〔草取り鎌〕があつても持つ力がなかつた。

雑草を取るうちにその場で息を引き取る人も少なくなかつた。

しかし生き残つた人たちは彼らを埋める力がなかつた。一握り、二握り土を集めて、復讐の涙、恨みの涙で濡らしながらその死体を埋めた。

むしつて食べる草までなくなつた。生き残つた人たちの最後の生命まで危険になつた。しかし誰一人根拠地を離れようとしなかつた。根拠地は生の家であり、闘争のゆりかごだつた。

たった一日を生きるのでも自らの主権と遊撃隊の保護の下に生きているという幸福感がそのような不屈の力を生んだ。彼らは根拠地生活を通じて幸福とは何かをはつきりと知っていたために、その幸福から少しも退くことはなかった。

四肢がなくなれば胸で、胸がなくなれば歯でも守らなければならぬ根拠地だった。

人民は敵に家産を略奪され、家族を失って裸一貫になった人たちだった。多くの人々がまた遊撃隊の家族たちだった。

だから革命と遊撃隊は彼らの第一の生命だったし、生の甲斐もそこに求めた。

「革命のために最後まで生きよう!」、「どんなことがあっても遊撃隊が来るまで待とう!」、「死んでも革命のために」――人民はこのような革命的志操を整え鼓舞しながら互いに肩につかまりあつて草を摘みに行き、一粒の塩も分けて食べながら根拠地を死守した。ついに新穀を食べることができるようになった。

この新穀を食べながら、犠牲になった人たちのことを思つて涙を流さない人などは一人もいなかった。このころに遠くに出かけて活動していた遊撃隊が帰つてきた。遊撃隊員たちを抱きしめる人民は言葉よりも涙が先に立った。

ある遊撃隊員は自分の母親がいた家に走つていった。しかし母親はすでに世を去つていた。誰かが泣きながら彼に言った。

「お母さんはいいつもあんたを待ちながら言つていたよ――私はただ米ひとさじさえ食べれば息子が帰つて来るまで生きられそうだけだ」ってね。でもお母さんはその願いさえかなわなかったんだよ。…」

この話を聞いた遊撃隊員は悲憤に打ち震えた。彼の手から小さな巾着が落ちた。それは米の巾着だった。

彼は行軍や戦闘の時に胸をえぐるような飢えをこらえながらもその米を大事にしまつておいたのだつた。

遊撃隊員たちは人民の前代未聞の英雄主義に感激

しながらも、このような惨状をもたらしたのにはある誤った者たちの悪行が隠れていることを看破した。

惨状をもたらした原因を探るために遊撃隊と人民は会議を持った。

問題がだんだん明白になるや、隊列内に潜んでいた反革命宗派分子たちは逃げてしまった。

我々はその時隊内の敵がどんなに革命に危険であるかをはつきりと感じ、革命隊伍と組織大衆の純潔性のために皆が警戒心を高めて闘争しなければならぬということを感じた。

遊撃隊が帰ってきた後根拠地は再び活気を帯びてよみがえった。

女性たちは山菜を掘つてくるとおいしいものは遊撃隊員たちに与えようと別に集めてよもぎ餅、松皮餅（松の内皮をうるちの粉に混ぜて作った餅）を作つては自分たちは食わずに必死になって遊撃隊員たちに勧めた。さらには少年たちまでチョコチャンヂュを挟んで流れるコドン河で魚やかえるを捕まえては自分たちは腹べこで倒れながらもそれを戦闘から帰つ

てくる遊撃隊員たちのために残しておいた。

彼らは草をむしりながらも遊撃隊員たちを慰労しようとして演芸種目を準備した。

ある日の夜児童団員たちは遊撃隊員たちの前で演芸公演を行った。

素朴な舞台の上で大勢の少年たちが踊りながら「総動員歌」を歌った。

この時一人の少年がめまいを起こしてそのまま舞台の上で倒れた。

歌は止んだ。

全ての観衆が立ち上がった。一人の遊撃隊員が舞台に飛び上がって少年を抱きかかえた。すると少年は再びか細いのに力を込めて声の限り歌を歌った。

来たぞ 来たぞ 革命が 来たぞ

革命の 氣勢は 全世界を 覆った。

金のない 労働者は 槌を かついで 出でよ
土地のない 農民は 鎌を かついで 出でよ

全ての人々は涙を流しながら少年たちの歌声に合わせた。涙の混じった〈総動員歌〉はチョチャンヂュの夜空を揺るがした。

遊撃隊員たちもやはり人民の食糧を解決するために決死的に闘争した。

彼らは生命と食糧を引き換えてきて自分たちは腹をへらしながらも人民に食糧を分けてやった。たくさんの人々の食糧を解決するということは並大抵のことではなかった。

遊撃隊と人民との鉄石のように固い団結でチョチャンヂュは生きて息をつき、忍び寄る敵を打ち退けながら自己の権利と自由を守護した。

敵の〈討伐〉はいっそう激しくなり、奴らはだんだん更なる大部隊で押し寄せてきていっそう凶暴に襲いかかってきた。さらには飛行機まで動員して爆撃した。

実に死活的な時期だった。しかしチョチャンヂュの遊撃隊員たちと人民は屈しなかった。息絶えることがあるうとも根拠地を必ず守ろうという非常な熱

情で沸き立った。

チョチャンヂュの遊撃隊員たちと自衛隊員たちは一人が十人、百人の敵を引きうけて闘わなければならなかった。

実に形容のできない艱苦な戦いだった。弾がなくなれば炸弾で、炸弾がなくなれば銃剣と銃台で肉弾となつて敵を殴り倒した。

このような時には安全な地帯に身を避けていた人々まで助けに出てきた。

岩を転がす人たち、負傷したトンムたちを背負って運ぶ老人たち、実にチョチャンヂュの木一本、草一株まで敵を倒して闘った。

チョチャンヂュはこのように決死戦に立ち上がつて敵を打ち破った。飢えの中で、寒さの中で、敵の銃剣の林の中で、敵との絶え間ない闘争の中でも光明の未来を信ずるチョチャンヂュの人民は生きていたし、血にまみれた革命の旗を高く高く掲げた。

一九三五年九月上部から遊撃区域の人民を解散させることについての指示が下達された。新たに生じ

た革命情勢は、狭い遊撃区域に人民を集結させて敵の集中攻撃を受けるのではなく、遊撃根拠地を解散して遊撃闘争をもっと広い地域にわたって機動的に展開することを要求した。

会議が重ねて開かれた。それは人民が根拠地から、そして遊撃隊のそばから必死に離れまいとしたからだった。

革命政府の働き手たちと遊撃隊の指揮官たちは人民を重ねて説得し解説した。

しかし大部分の人民はこみ上げる涙を飲み下すばかりで、なかなか応じなかった。

ヨングルから来たある老人は泣きながら言った。

「どうして敵統治区域に下りていきましよう！私は敵によつて五人の家族を失つた身です…到底ここを離れられません。ここでは草を食べてでも我等の世の中でした。」

我等の主権は私に土地までくれました！ 老いた身で我等の文字まで学びました。本当に生きているようでした！…それなのにどうしてここを…離れる

というのですか?!…」

これがどうしてこの老人一人の心情だったろうか！ 誰も生と闘争の揺籃であるチョチャンヂュから離れるのをつらかった。

彼らには実際敵統治区域に下りていくほかに道はなかった。しかし敵は人間ではなく狼だということあまりにもよく知っている彼らは、今度は遊撃隊についていくと哀願した。

しかしこれも不可能なことだった。

身を支えることもよくできない彼らが、山野を走り回る遊撃隊にどうしてついていくことができようか?!

長い説得の末にやっと人民は敵統治区域に、いくらかの人たちはもつと深い山中に、一部の若い人たちは遊撃隊についていくことになった。

「骨が砕けて粉になることがあるうとも革命のために生きます！」これは敵統治区域に出発する人民が何度も遊撃隊員たちを振り返つて涙を流しながら言った言葉だった。

このようにチヨチャンヂユの人民は屈しなかった。
このようにチヨチャンヂユの人民は不死神のように
闘った。

今も静かに目を閉じて回想すれば、チヨチャンヂユ
の赤い心臓たちが赤々と燃え上がらせた革命の火が
見えるようである。その火は今日の温かい幸福を用
意してくれたし、これからも永遠に熱く燃え続ける
だろう。